

2021 年度

大正大学教職支援センター一年報

(創刊第 5 号)

2022 年 3 月

大正大学教職支援センター

2021 年度大正大学教職支援センター 年報

目 次

巻頭言

大正大学教職支援センター長 坪井龍太 3

1. 2021 年度教員養成政策の動向と大正大学教職課程・教職支援センターの現状・課題
滝沢和彦 5

2. 学びを振り返る
－ 4 年間の教職課程を終えて－ 11

－ 介護等体験－ 36

3. 特別講義の記録
－ 教育実習 I －
横浜市立中学校教諭 佐々木渚先生 41

4. 論考
キャリア教育と学校経営
高野篤子 65

実用面に焦点化した英語能力評価の課題：大学入学共通テストを事例に
行森まさみ 71

特別支援学校における性被害予防教育の実態把握
三浦巧也 81

5. 現場からの報告
都立高校における生徒指導・進路指導の現場より
東京都立葛飾総合高等学校主任教諭 浦部ひとみ先生 85

6. コラム
前センター長のおすすめ図書
滝沢和彦 93

7. 教職鴨台会の広場－活躍する卒業生たち－ 99

8. 教職支援センター関係資料 126

9. 教職支援センター日誌 129

編集後記

巻頭言 一 質保証から魅力化へ

教職支援センター長 坪井龍太

2021年11月1日より大正大学教職支援センター長となりました。滝沢和彦先生の後継が務まるかどうか、はなはだ心許ないところではありますが、どうか皆さん、よろしくお願ひします。

私が大学で専任教員として教員養成に関わるようになったのは、2006年4月のことでした。ちょうどその年の7月11日に中央教育審議会から「今後の教員養成・免許制度の在り方について」が文部科学大臣に答申されました。そこでは、「教員養成については、これまで、課程認定大学の一部の担当教員のみが教員養成に携わり、特に教科に関する科目の担当教員の教員養成に対する意識が低いなど、全学的な指導体制の構築という点で、課題が少なくなかった。今後は、すべての教員が教員養成に携わっているという自覚を持ち、各大学の教員養成に対する理念や基本方針に基づき指導を行うことにより、大学全体としての組織的な指導体制を整備することが重要である」と述べられました。「教科に関する科目の教員の教員養成に対する意識が低い」とずいぶんと大胆に言い切ってくれましたが、特に教科担任制を敷く中学校・高等学校の教員養成については、学部・学科の専門知識の習得が質保証に大きな影響を与えることは論を待たないでしょう。この答申が、日本全国の義務教育諸学校の教員の質を担保するために、各大学の「教職課程の質保証」という言葉が使われるきっかけだったことは間違いありません。

2006年の答申では、課程認定大学には全学的な組織として、教員養成カリキュラム委員会を設置することを求めましたが、2012年の中教審答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」では、一步踏み込んで、教職センターを各大学に設置することを提言しました。さらに2015年の中教審答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員養成コミュニティの構築に向けて～」では、教職センター設置の努力義務を各大学に求めました。努力義務とはいえ、「義務」という言葉を使って、中教審は各大学の教職課程について、本気で取り組むよううながしたのです。そして、2020年に文部科学省は省令改正をして、2022年4月1日から「教職課程を設置する大学の全学的な組織体制の充実及び当該組織による教職課程の自己点検評価の仕組みの創設」を義務づけました。この自己点検評価の仕組みに位置づけられるのが、2022年4月1日以降の大正大学教職支援センターと理解しています。

役所の言葉を使って説明すると、仰々しくなります。中教審の委員の先生方や文部科学省の役人は、（特に開放制の）教員養成をしている私立大学の負荷を高めて、意地悪がしたいのでしょうか。おそらくそうではありません。彼らのところには、教員の質を高めて欲しいという切実な声が届いているのです。

教員の質が低いというと、マスコミからの情報だけだと、わいせつ行為や体罰をする教員を想像してしまうかも知れません。教員の生徒に対するわいせつ行為は絶対にあってはなりませんし、令和の時代の今、体罰も根絶しなければならない課題です。しかし、私の友人・先輩の校長先生たち（主に中学校・高等学校）に話を聞くと、服務事故も心配ですが、授業を安心して任せられる先生が一人でも多く欲しいと言います。人間性だけでな

く、学力も必要というのは、大正大学の学生にとって、ほんの少しばかりハードルは高いですが、学科のゼミの授業などでの、主体的な学修への取組によって、手堅く学力も身につけさせたいです。

一方で近年のコロナ禍による社会情勢の変化、また教員不足の露呈など、教職課程に吹く風の向きは少しばかり変化しているようです。教員不足と言っても、その中心は小学校教員で、大正大学が課程認定を受けている中学校・高等学校教員は、自治体・教科によって、だいぶ状況に差があるようです。人生設計ができるように、定年まで働けるポジションを得るには、それ相応の覚悟が学生たちにはやはり必要です。ただ、現在の教職課程に吹く風は、優秀な学生が教職課程を経て、教員を目指すよう、課程認定大学の教職課程を（大正大学の言葉で）魅力化推進すべきである、という方向にあることは確かです。教職支援センターの教職員の叡知を集めて、魅力化推進に取り組みたいです。

と一点点、肩の力は抜きましょう。1学年の学生数 1,100 人あまりの大正大学で、中学校・高等学校の教員として、定年まで働けるポジションを得られる4年生（教員採用選考最終合格者）は、毎年ごくわずかです。もちろんこのごくわずかな人数を輩出することが至難の業なのですが、明るく元気に、教壇に立つ夢をこれからも学生が実現するよう、背中を押していきたいものです。

1. 2021年度教員養成政策の動向と

大正大学教職課程・教職支援センターの現状・課題

大正大学教授 滝沢和彦

本年度における教員養成政策の動向について、教職課程自己点検評価の義務化、「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」に関する科目の新設、そして令和3年1月の中央教育審議会答申「「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」を受けて同年3月に新たに諮問された「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について」の特別部会基本問題小委員会（教員養成部会と合同会議）における審議の状況、以上の3点について紹介する。

1. 教職課程自己点検評価の義務化

まずは教職課程自己点検評価の義務化を定めた教育職員免許法施行規則の改正を取り上げる。

中央教育審議会教員養成部会に「教職課程の基準に関するワーキング」が置かれ、令和2年2月に『複数の学科間・大学間の共同による教職課程の実施体制について（報告書）』がまとめられたこと、その論点の一つとして教職課程の質の保証及び向上に関する仕組みの構築が取り上げられ、
○全学的に教職課程を実施する組織体制の整備を義務とする。

○教職課程に関する自己点検・評価の実施を義務とする。

という方向性が示されたことは本誌前号でも紹介しておいた。

教育職員免許法施行規則の改正公布、施行は令和3年5月7日付けである。このうち、上記2点に関わる改正条文は以下のようにになっているが、同施行規則の附則において、この第22条7及び8

についてのみ改正規定は令和4年4月1日から施行する、とされている。

第22条の7 2以上の認定課程を有する大学は、当該大学が有するそれぞれの認定課程の円滑かつ効果的な実施を通じて当該大学が定める教員の養成の目標を達成することができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする。

第22条の8 認定課程を有する大学は、当該大学における認定課程の教育課程、教員組織、教育実習並びに施設及び設備の状況について自ら点検及び評価を行い、その結果を公表するものとする。

さて、上記報告書では「自己点検・評価の実施に当たって参考となるよう、文部科学省において自己点検・評価の観点などを整理したガイドラインを作成すべきである。」とされており、これに向けて「教職課程の質保証のためのガイドライン検討会議」が令和2年11月から3年1月にかけて3回開催された。そして、5月7日付けの文部科学省総合教育政策局長名による「教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令の施行等について（通知）」の別添資料として「教職課程の自己点検・評価及び全学的に教職課程を実施する組織に関するガイドライン」が最終的に公表されたのである。

「ガイドライン」構成は以下の通りである。

I 策定の背景

II 教職課程の自己点検・評価

1. 基本的考え方

①教職課程の自己点検・評価の基本的な手順

②教職課程の自己点検・評価の実施間隔

③教職課程の自己点検・評価の実施単位

④教職課程の自己点検・評価の実施体制

2. 教職課程の自己点検・評価の観点の例示

①教育理念・学修目標

②授業科目、教育課程の編成実施

③学修成果の把握・可視化

④教職員組織

⑤情報公表

⑥教職指導（学生の受け入れ・学生支援）

⑦関係機関等との連携

Ⅲ 全学的に教職課程を実施する組織体制について

1. 全学的に教職課程を実施する組織体制の必要性について

2. 全学的に教職課程を実施する組織体制の果たす役割・機能

3. 中核組織の形態

先に述べたように、全学的に教職課程を実施する組織体制の整備、いわゆる教職センターの設置と教職課程の自己点検評価の義務化は、令和4年4月からとなっている。実施時期については、文科省は令和3年11月2日付けの課程認定大学への「質問回答集」で「施行が令和4年4月1日であるため、それまでに体制を整え、それ以降から評価ができるようにすれば良い。」とした。令和4年度中に自己点検評価を行いその結果を公表する、というスケジュールになる。

全国私立大学教職課程協会における取り組み

本学も加盟している全国私立大学教職課程協会（全私教協）では、既に数年前から教職課程質保証と点検評価の在り方についての研究を進め、その成果を以下の3冊の文科省委託事業報告書として公表してきた。

①『平成30年度文科科学省委託事業「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」私立大学における教職課程質保証に関する基礎的研究報告書』（平成31年3月）

②『令和元年度文科科学省委託事業「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」私立大学における教職課程質保証評価の在り方に関する研究報告書』（令和2年3月）

③『令和2年度文科科学省委託事業「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」運営の責任体制と自己点検・評価を核とした教職課程質保証評価に関する研究報告書』（令和3年3月）

①では、教職課程質保証の在り方としていわゆる第三者評価をも視野に入れて、先行研究である東京学芸大学プロジェクト5つの「基準領域」、13の「基準」、40の「観点」—より、13の「教員養成教育認定基準」を取り上げて、私学として重点的に取り上げたい基準、評価の基準としては困難と思われる内容、外部評価への期待と不安、全私教協の行う質保証評価への期待と懸念、調査の形態と方法・頻度、評価委員派遣の可能性、可能な経費負担等について会員大学にアンケートを実施した。その結果、外部評価への期待の一方、会員大学の独自性や特色、個性が正しく評価されるかどうか、また事前準備や実施時の事務作業等の負担、人的・経費的負担への懸念が確認され、評価基準、項目の厳選、提出書類の重点化や簡素化の必要性が明らかとなった。

②では、①の成果に基づいて、特に教職課程の自己点検評価に先駆的に取り組んでいる会員大学を中心とした資料調査及び訪問調査によって改めて会員大学における教職課程評価の現状把握を試み、その結果から、当協会として行う教職課程自己点検・評価の基本的考え方を明らかにした。さらに、全私教協版の「教職課程 自己点検・評価基準」及び「「教職課程 自己点検・評価報告書」作成の手引き」の試案を作成した。

③では、②の成果である「教職課程 自己点検・評価基準」及び「「教職課程 自己点検・評価報告書」作成の手引き」に基づいて、この上記「自己点検・評価報告書」の試行調査を13大学にお願いし、「特色ある教職課程の好事例—教職課程の質的向上」としてまとめた。用いられた自己点検・評価基準は以下の項目である。

I 教職課程の現状及び特色

II 基準領域ごとの自己点検・評価

基準領域1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み

基準領域2 学生の確保・指導・キャリア支援

基準領域3 適切な教職課程カリキュラム

III 今後の教職課程教育・運営の課題

さらに、「自己点検・評価基準」について改めて会員大学へのアンケート調査を行い、必要と思われる修正改善を行って「教職課程 自己点検・評価基準」（改訂版）を示した。

以上の研究成果については、令和3（2021）年5月22日の全私教協研究大会におけるシンポジウム「教職課程の質的向上と自己点検・評価の具体化」において筆者より「「好事例調査」から見る教職課程の質的向上」と題して報告をした。

協会ではその後、文科省「ガイドライン」の検討及び協会版自己点検・評価基準とのすり合わせ作業に取り組み、9月から10月には協会理事及び会員大学向けの説明会をオンラインで開催、さらに昨年11月27日の研究交流集会のオンラインシンポジウムでも筆者から「協会版「自己点検評価基準」を活用した教職課程自己点検評価の方法ー『「教職課程自己点検評価報告書」作成の手引き』をもとにー」と題して報告を行った。

これら説明会やシンポジウムに対して会員大学から寄せられた質問についても全私教協の質保証特別委員会で12月以降さらに検討を重ね、質疑応答集も付した『「教職課程自己点検評価報告書」作成の手引き（令和4年度版）』を完成、本年3月上旬に会員大学に向けて発送したところである。

2. 「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」に関する科目の新設

令和3年1月26日の中教審答申「「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」は、副題にもあるように「全ての子

供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びを実現する」ことを謳ったものである。答申は、そのために「学校教育の基盤的なツールとして、ICTは必要不可欠なものである。」との前提に立ち、「学校教育の質の向上に向けてICTを活用するためには、養成・研修全体を通じ、教師が必要な資質・能力を身に付けられる環境を実現することが必要である。」として「大学における教員養成段階において、学生が1人1台端末を持っていることを前提とした教育を実現しつつ、児童生徒にプログラミング的思考、情報モラル等に関する資質・能力も含む情報活用能力を身に付けさせるためのICT活用指導力を養成することや、学習履歴（スタディ・ログ）の利活用などの教師のデータリテラシーの向上に向けた教育などの充実を図っていくことが求められる。」と述べていた。

各論において答申はいう。

また、教職課程においては学生がICT活用指導力を体系的に身に付けていく必要があるため、各教科の指導法におけるICTの活用について修得する前に、各教科に共通して修得すべきICT活用指導力を総論的に修得できるように新しく科目を設けることや、修得した内容を学校現場において生かすことができるよう実践の総まとめとして位置付けられている教職実践演習において模擬授業などのICTを活用した演習を行うこと等について検討し、教職課程全体を通じて速やかな制度改正等を行うことが必要である。

これを受けて令和3年8月に教育職員免許法施行規則が改正され、「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」（1単位以上）が新設されることになった。

コアカリキュラムは、以下のようになっている。

全体目標

情報通信技術を活用した教育の理論及び方法では、情報通信技術を効果的に活用した学習指導や校務の推進の在り方並びに児童及び生徒に情報活

用能力（情報モラルを含む。）を育成するための指導法に関する基礎的な知識・技能を身に付ける。

（1）情報通信技術の活用の意義と理論

一般目標：情報通信技術の活用の意義と理論を理解する。

到達目標：

- 1) 社会的背景の変化や急速な技術の発展も踏まえ、個別最適な学びと協働的な学びの実現や、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の必要性など、情報通信技術の活用の意義と在り方を理解している。
- 2) 特別の支援を必要とする児童及び生徒に対する情報通信技術の活用の意義と活用に当たっての留意点を理解している。
- 3) ICT 支援員などの外部人材や大学等の外部機関との連携の在り方、学校における ICT 環境の整備の在り方を理解している。

（2）情報通信技術を効果的に活用した学習指導や校務の推進

一般目標：情報通信技術を効果的に活用した学習指導や校務の推進の在り方について理解する。

到達目標：

- 1) 育成を目指す資質・能力や学習場面に応じた情報通信技術を効果的に活用した指導事例（デジタル教材の作成・利用を含む。）を理解し、基礎的な指導法を身に付けている。
- 2) 学習履歴（スタディ・ログ）など教育データを活用して指導や学習評価に活用することや教育情報セキュリティの重要性について理解している。
- 3) 遠隔・オンライン教育の意義や関連するシステムの使用法を理解している。
- 4) 統合型校務支援システムを含む情報通信技術を効果的に活用した校務の推進について理解している。

（3）児童及び生徒に情報活用能力（情報モラルを含む。）を育成するための指導法

一般目標：児童及び生徒に情報活用能力（情報モラルを含む。）を育成するための基礎的な指導法

を身に付ける。

到達目標：

- 1) 各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間の時間（以下、「各教科等」という。）において、横断的に育成する情報活用能力（情報モラルを含む。）について、その内容を理解している。
- 2) 情報活用能力（情報モラルを含む。）について、各教科等の特性に応じた指導事例を理解し、基礎的な指導法を身に付けている。
- 3) 児童に情報通信機器の基本的な操作を身に付けさせるための指導法を身に付けている。

※小学校教諭

あわせて、

・教科及び教科の指導法に関する科目のうち「各教科の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。）」を「各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）」とする。

・道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目のうち「教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む。）」を「教育の方法及び技術」及び「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」とする。

といった諸点の改正がなされた。施行は令和4年4月1日である。

3. 中教審への諮問「「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について」

令和3年3月、文科大臣は中教審に対して「「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について」諮問を行った。昨年の本年報でも触れておいたが、諮問された事項は以下の5点である。

- ①「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師像と教師に求められる資質能力について
- ②質の高い教職員集団の在り方について
- ③教員免許の在り方について
- ④「令和の日本型学校教育」を支え、多様化した教職員集団の中核となる教師を養成する教員養成

大学・学部、教職大学院の在り方について

⑤教師が、自らの人間性や創造性を高め、子供たちに対して効果的な教育活動を行うことができる環境整備について

中教審では、「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方特別部会基本問題小委員会が教員養成部会と合同会議を開催するなどして検討を進めているところであるが、ここでは特に、①について注目しておきたい。本稿執筆中の本年2月21日の合同会議では、教職課程の見直しに関して、として「理論と実践の往還を重視した教職課程へと転換し、教職課程において「新たな教師の学びの姿」を実現するための基礎的な資質・能力の育成を図る」という方向性が示され、主な論点として、

- ①教育実習の実施時期・実施方法の見直し
- ②特別支援教育の充実に資する介護等体験の見直し

が挙げられた。①について会議資料は以下のよう

に書いている。教職課程の終盤に長期間まとめて教育実習を履修するこれまでの履修スタイルから、学校体験活動を効果的に活用して学校現場での教育実践を段階的に経験する学びへと転換を図ることとしてはどうか。

大学での座学と教育実習及びそれに先立つ現場体験学修、いわゆる理論と実践の往還を重視した教職課程への転換、大学と教委及び学校現場との連携の推進、教育実習と就活との時期の調整（教授受験者の確保）等々の問題が関わってくる論点である。

一方、②について会議資料はいう。

近年、学校現場において特別支援教育の充実に強く求められている状況等を踏まえ、教職課程における貴重な現場体験の機会である「介護等体験」について、特別支援教育の充実に資する観点から積極的に活用を図ることとしてはどうか。

こちらにも、当初介護等体験が制度化された際の意義づけに加え、「特別の支援を必要とする児童等に対する理解」や「学校体験活動」等の教職科目の学修と関連付けながら理解を深めること、あるいは、特別支援学校のみならず、特別支援学級等での体験機会を充実させていく、という方向性が検討課題となっている。

教員志望者の減少の一因として教育実習と民間の採用時期が重なっていることはこれまでも指摘されているが、もちろんそれだけが今回の提案の背景ではないだろう。すなわち、本学がこれまで行ってきたような、教育実習に先立っての現場体験活動が、大学での座学と現場での体験学習、いわゆる理論と実践の往還的な学習を可能としてきたこと、このことが学生にとって学習意欲の向上や教員採用試験での実績向上につながっていることが肯定的に評価されての議論であると考えたい。

もちろん、従来の教育実習が果たしてきた大きな役割を軽視していいはずもない。だから、これを廃止して現場体験学習に移行すればいいというわけでももちろんないだろう。介護等体験も同様である。学生の資質能力をどう捉えてどのように育成するか、段階的・体系的なプログラムをどう編成するか、既存の教職科目との関連をどう構想するか、教育委員会や学校現場との連携をどう進めるか、何より学校現場の負担増をどのように考えるか、等々課題は山積しているが、こうした方向性が議論され始めたことを学生諸君、卒業生諸君にはぜひ知っておいてほしいと思う。

他の諮問事項を含め、中教審の「基本問題小委員会」において専門的な議論を深めて令和4年夏頃までを目途に一定の結論を得るとされており、今後の審議状況に注目したいところである。

4. 大正大学における教職課程及び教職支援センターの現状と課題

最後に、以上の政策動向に関わって、本学の現状と課題について述べる。

まず、全学的に教職課程を実施する組織体制の

整備の義務化及び教職課程に関する自己点検・評価の実施の義務化について。

本学では従来、教職資格科目の開講及び担当者に関する事項や実習の運営に関する事項、教職資格に関する調査・研究・計画・運営・事務に関する事項等を扱う組織として教職部会があり、一方、教職支援センターでは、教職課程登録者の支援と教員採用選考に向けた各種事業を担当してきたが、これをこのたび令和4年4月1日より教職支援センターに統合することとなった。新生教職支援センター規程については本号の資料編に掲載するが、その目的と所管業務は以下のような予定である。

(目的)

第2条 センターは、本学学則第40条に規定する教職に関する科目を円滑に教授・運営を行い、教職課程登録者の支援と教員養成教育の整備・充実及び優秀な教員の輩出に努めることを目的とする。

(所管業務)

第3条 センターの所管業務は、次のとおりとする。

- (1) 教職課程（教科及び教職に関する科目）の編成と運営、履修指導（科目等履修生を含む）及び教員免許状の授与に関する事項
- (2) 教職課程に関する調査・研究に関する事項
- (3) 教職課程の自己点検評価に関する事項
- (4) 教育委員会等関係諸機関との連携に関する事項
- (5) 実習指導及び運営に関する事項
- (6) 学校インターンシップ等に関する事項
- (7) 教職支援センター年報の発行に関する事項
- (8) 隣接校種の教員免許状取得支援に関する事項
- (9) 教員採用試験対策等キャリア支援に関する事項
- (10) その他目的達成に必要な事

(3)にあるように、教職課程自己点検評価もセンターが実施主体となることが明記された。既に教採対策等で新規の事業も始まっており、また教職課程を置いている各学科が教員養成に対する第一義的責任を有しており、センターはそれを統括する組織であるとの共通理解が本学でも深まりつつあることは、「大学全体で教員養成を行う」という命題が具体化していることの表れであり、歓迎すべきことであると思われる。

第二に、「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」（1単位以上）の新設については、令和4年度の入学生から学則変更の対象とするべく、（本稿執筆時点で）文科省への届け出を準備しているところである。本学では現在教育方法を担当している稲井教授に担当をお願いする予定であり、従来の教育方法2単位を新科目の内容を加えることで2単位の新科目を設定する方向で準備を進めている。授業開始は令和5年度からとなる。

第三に中教審への諮問「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について」であるが、こちらに関しては現在審議が進行中であり、今後の議論を待ちたいところではあるが、教育実習に先立つ現場体験学習（学校インターンシップ、学校支援ボランティア）については、本学では平成17年度以来の実績がある（筆者編著の『大正大学における教育連携事業報告書』を参照されたい。本年2月刊行の最終号まで、15年間にわたって刊行を継続した）。もちろん、これをもって現行の教育実習に取って代われるものではないが、こうした議論の方向性がかつてないほどに明確になっていることは衆目する必要があると思われる。今後とも審議の行方を慎重に見極めつつ、教職を志す学生にとって最適の学びとは何かを追究していくことが必要である。

2. 学びを振り返る（1）

－ 4年間の教職課程を終えて－

4年間の教職課程の学習を終えて卒業・就職・進学する諸君に、これまでの教職課程の学びや後輩へのメッセージ、そして4月からの抱負について綴ってもらった。

■ 4年間の学びを振り返って

文学部日本文学科4年 由利大志

1. はじめに

私は教員免許状が取得できることに魅力を感じて大正大学に入学しました。大学での学びは非常に濃く、特に教職課程での経験は、進路を含む私の人生観に大きな影響を与えました。ここでは、大学や教職課程での学びを振り返るとともに、重要であると感じた観点について話していきたいと思います。

2. 大学2年から4年の春にかけて

私は2年の春学期から教職課程の履修を始めました。4年の春までは、教員免許状の取得に向けて必要な単位を取っていくとともに、教員採用試験に向けて学力をつけていくことが学業の中心になります。この期間で最も重要なことは、継続的な学習を怠らないということです。ここでの学習とは大学の講義だけを指しているのではなく、主に教員採用試験に向けた自主的な学習を指しています。一見、簡単な内容であるようにも思われるかもしれませんが、継続して行っていくためには、自身の計画性や忍耐力、同じく教員を志す学生同士での協力が必須です。具体的な方策としては、日本文学科では「教職虎の穴」と称した勉強会を立ち上げ、週に一、二回の活動の中で、模擬授業や教員採用試験対策を行っていました。計画的かつ継続的な学習が苦手であることを自覚していた私は、どれほど忙しかろうと、モチベーションが低かろうと、勉強会は可能な限り参加するようにしていました。

勉強会はおおよそ2年近くにわたって行っていたのですが、学科の学生の中でも参加率の良さはほぼ一番であったと自負しています。自主的な学習が苦手な学生は、他の学生と協力し、制約をつけて学習を進めていくことが重要だと思います。

また、継続的な学習と同様に重要なのが、専門教養の知識を身に付けることです。専門教養は教員採用試験における重要な一分野です。加えて、実際に教員になり、教壇に立った際に求められる「授業力」の要素の一つでもあります。当然、教師には教科に対する専門的な知識が求められます。ここで注意しておきたいのは、教員採用試験で求められる知識の水準と、授業で教える際に求められる専門教科としての知識の水準には大きな差があるということです。教員採用試験の一次試験を突破するための知識量だけでは、実際の授業には全く太刀打ちできません。このことを私は教育実習や教員採用試験を経て痛感しました。決して大学での4年間の学びをないがしろにしていたわけではないのですが、結果として専門教科に関する知識が圧倒的に足りていなかったことを、卒業間際になって気付かされることとなったのです。

今、教職課程を取っている学生は、先に挙げた継続的な学習を怠らないという観点も踏まえたうえで、できるだけ早期の段階から専門教科の知見を深めておくことを推奨します。

3. 教育実習

4年の春には教育実習があります。教育実習は教

職課程の中でも重要な現場実習の一つですが、当然ながらただ学校現場に行き数週間過ごすだけの期間ではありません。学校現場で多くの物事を見聞きし、実際に経験し、自身の糧として蓄えていく必要があります。そのためにも、事前の準備が重要になってきます。

教職課程を辞退もしない限り教育実習には必ず行くことになるため、履修を始めた段階から、学科の学生同士で模擬授業を行っていくことをおすすめします。模擬授業ができなくとも、学習指導案の作成だけでもやっておきましょう。この段階では、一度の質よりも定期的に行い回数をこなしていくことが最重要です。質より量です。中身はインターネット上に掲載されているものや、教科教育法で作成したものでも構いません。とにかく模擬授業や指導案作成の数をこなしてください。

教育実習での授業は、想定していたよりもはるかに難しく、奥が深いです。上では事前準備として数をこなすのがよいと伝えましたが、実際に教育実習が始まると、それまでに行ってきた模擬授業や学習指導案が通用しないという現実と直面するかと思います。正直、この段階までに身につけてきた知識や技術は一割未満しか通用しません。ただ、その一割未満のあてが、実習に行く皆さんにとって大きな支えになり、同時に、教育実習で得られる知見の質や量に繋がってくるのです。

4. 教員採用試験とその後

多くの学生は、実習が終わってから1ヶ月以内に教員採用試験を受けることになります。1ヶ月という期間からも想像がつくように、実習が終わってからでは実行できる試験対策に限りがあります。そのため、教育実習が始まる前から大方の対策は終わらせておき、残り1ヶ月間は得点力アップの追い込みを残すだけにしておきましょう。

また、私は実習先の校長先生にお願いをして、教員採用試験で提出する資料の添削や面接練習等を受けさせてもらいました。現場で仕事をされている多くの先生方は、学校教育の現状を危惧していると同時に、このような状況でも教育の道に進も

うとする学生を積極的に応援してくださっています。これは、私自身が実習先で感じた雰囲気もありますが、実際に校長先生をはじめとする先生方からこのような言葉をいただいたことからもうかがえました。実習先で教育に対する真摯な姿勢を見せていれば、教員採用試験対策に関する協力をいただけるかもしれません。既に教育実習に協力していただいているということを感じ、こちらの立場を十分にわきまえたうえで、実習の最後の方でもお願いをしてみてください。

教員採用試験が終わった後は卒業論文が学業の中心になります。ただ、それまでに経験してきた教職課程の忙しさは落ち着いたため、他のことに時間が割けるようになります。私はこの期間中に、中学校で放課後勉強教室の指導員と、部活動指導のボランティアを始めました。教育実習とはまた異なる環境で生徒達と関わることができるため、自身の知見が大きく深まります。

私は実習先の学校から提案をいただき、このような活動を始めるに至りましたが、そのほかにも大学ではボランティアの募集に関するお知らせが随時入ってきています。始める時期や内容そのものが教員採用試験に直接影響することはありませんが、自身のためにも、どこかの機会一度経験しておくとも良いかもしれません。

5. 今後の進路について

友人や大学の先生方、職員の皆さん、教育実習先でお世話になった先生方、生徒達の協力を経て、私は今年度の教員採用試験に正規合格することができました。4月からは教員として、都内のどこかの学校で働くこととなります。現状としては、配属先の地域はおろか、中学校なのか高等学校なのかさえもわかっていない状況です。また、教員採用試験には合格できたものの、自身の能力が学校で十分な指導ができるほどの水準に至っていないことを自覚しています。大学4年生の1月現在は、実際に教壇に立つまでに少しでも能力を高められるよう、自身の専門教科と向き合う日々を続けています。

今までの20数年間、あくまで自分のために行ってきた学びが、人のための学びへと変わりつつある日々を実感しています。そのことに喜びを噛み

しめつつも、相応の責任と能力を身につけて学びに向き合い続けたいと思っています。

■4年間の教職課程を終えて

文学部歴史学科日本史コース4年 山下里紗

はじめに

私は、幼いころからずっと「学校の先生」に憧れていた。そして、教員免許が取得できて、自分の得意な歴史を学ぶことができる大正大学に入学した。この4年間の大学生活の中で学んだことや感じたことを以下に記していきたい。

学生生活で得たもの

教職課程が本格的に始まるのは2年次からだった。1年次からも何かやっておきたいと思い、選択授業では、苦手な数学やパソコンを学び、生徒理解に役立ちそうな授業を選んだ。個別塾講師のアルバイトを始め、教職サークルに入り、教職を意識した活動も行った。塾では子どもや保護者、講師たちと直接かかわり、生徒理解を深め、教科の指導力向上に努めた。サークルでは指導案の書き方を学び、人前で発表する力を身に付けた。中でも、模擬授業は教師役だけでなく生徒役も勉強になった。生徒役は、授業を受けながらその授業者の良い点と課題点を書いて評価する。どんな授業にも良い点と課題点があり、それらを見つけようとする心掛けが身についた。

2、3年次はやはり大変だった。2年次からは、社会科と地理歴史科の免許を取得するための単位数が一気に増えた。3年次では、公民免許を取得しようとした矢先にオンライン授業になってしまった。一時期は単位を詰め込みすぎて制限単位をオーバーしたこともある。授業中に居眠りしたり、課題の提出に間に合わなかったり、外部講師の特別授業に寝坊したりと至らぬ点も多々あった。それでもできる限り一生懸命に取り組んだ。

オンラインの意見交換で沈黙が続いているとき

には、集団討論だと思い、頑張って積極的に話をした。オンラインで発表する際には、皆にわかりやすく伝えられるように、資料を工夫して作った。ある授業の提出物に毎回出されていた自己紹介の欄は、自己PRの場だと思い毎回違う内容を書いてみた。何事も前向きに捉えてやってみた結果、教職の先生から、実習の報告会や採用試験の集団面接対策会に誘われた。今まで身に付けてきたことを活かしたり、役立てたりすることができたのだ。こうして様々な機会に恵まれて、私は、同じ教員を目指す仲間たちやどんなきも支えて下さる先生方と出会った。

一人では乗り越えられなかった試験勉強

教員採用試験の勉強は自分でも少しずつ進めていた。初めのうちは、長期休業中に参考書や用語集を使って勉強した。大学の図書館に置いてある教職関係の雑誌に惹かれて、よく読んだ。学内や外部で行われている講座にも積極的に参加した。

1、2年次には、各教科の少人数講座に参加した。講座では、現職の先生と対話し、教科についてのことに加え、学校現場についてのことも教えていただいた。

3、4年次では、主にオンラインの対策会に参加することが多かった。集団討論を行い、試験問題の解説等を勉強した。オンラインの利点を活かし、昨年合格した卒業生や現職の先生方から、勉強法や実際の試験についてのことや、コロナ禍の学校現場についてのことを聞くことができた。試験が目前に迫ってくると、各自治体の元校長先生から対面で指導を受ける機会も増えた。個人面接や集団面接、書類や論作文の添削をいただいた。

色々な経験をしてきたが、今振り返ってみると、試験勉強の中で一番良かったのは、同じ教員を目指す仲間たちや支えて下さる先生方と出会えたことだと思っている。自分一人では乗り越えられなかっただろう。問題を出して教え合った。一緒に説明会や講座を受けに行った。本物の過去問題を手に入れるために共に現地へ赴いた。何気ないことかもしれないが、皆と頑張っていると思えるだけで心強かった。面接や討論の練習では、自分が知らなかったことや考えもしなかった意見と出会うことができた。あの人の様に堂々と言えるようになりたい、あのフレーズは私も使えるかもしれないと、毎回の発見は尽きなかった。

皆で様々な情報を共有できることも良かった。同じ自治体を受ける人や、違う自治体の人、学校の学習支援に行っている人、外部で指導を受けている人、先輩と頻繁に連絡を取っている人等、各自で手に入れた情報を共有して、互いに学び合った。私は、各自治体が行っている教員養成のプログラムについて知らなかったため、そのプログラムに参加している人の話は特に参考になった。先生方には、過去問の解説や書類の添削、面接練習等、多岐にわたりお世話になった。ゼミの先生や、教職の先生に多くの情報や知識を御教授いただき、様々な経験をさせていただいたことで、不安な点を解消し、自信を持つことができた。

介護等体験と教育実習を終えて

3年次に行った介護等体験と4年時に行った教育実習は、全く異なるものであるが、改めて振り返ってみると、全てが繋がっていたように思える。これらの実習を通して、目標を持つことの大切さと相手の立場になって考えることの大切さを学んだ。

介護等体験は、特別支援学校に2日間、社会福祉施設に5日間の計7日間行った。「全員とコミュニケーションを取る」という明確な目標を持って臨んだ。特別支援学校では、児童の数も少なく、比較的接しやすかったが、社会福祉施設ではそう簡単にはいかなかった。最初は勇気が持てず、自分か

ら話しかけてくれる人とばかり話していた。このままだと接する人が偏ってしまうことはわかっていて。ただ、無視されたら悲しいな、しっかり伝わっているのかな、などと考えると、自分から話しかけるのをためらってしまった。

ふと、何気なく話しかけてみると、利用者の表情や仕草がみるみるうちに明るくなった。たった一言に、こんなにも沢山の反応を返してくれるのだと、とても嬉しかった。何よりも、利用者の嬉しそうなお様子に感動した。自分の言葉は利用者によりよく伝わっていたのだとわかった。それからは自分から話しかける勇気を持てるようになり、積極的に利用者とかかわっていった。普段は静かな人でも、話しかけると、沢山話してくれたり、言葉はかえって来ないものの、表情や仕草が明るくなったりするのだと、一人ひとりの個性を知ることができて嬉しかった。この気持ちを教育実習にも持っていけたらよかったのに、と今は反省している。

教育実習では、明確な目標は持っていなかった。日々の授業に精一杯で、学級についての目標はどこか後回しにされていたのかもしれない。特に意識せず、自然に生徒たちとかかわっていた中で、指導教諭から放たれた一言にはっとした。「お客様になってたよ」と。その日から、授業中だけではなく、休み時間やその他の時間にも、できる限り沢山生徒たちとかかわろうと意識した。一人一回はかならず声をかけようとした。忙しかったり、余裕がなくなったりすると、当たり前のこと、大切なことも見えなくなってしまうことがある。目標を立てることで、大切なことを常に意識していくことが大事なのだと気づいた。

全ての実習を通して、自分本位で考えるのではなく、相手の事を考えることの大切さも知った。特別支援学校で児童が急に私に飛びついてきたとき、担任の先生から、「腰を痛めるから危ないよ、児童にだめだと言ってね」と指摘を受けた。児童に危険が及ばないのであれば自分はどうなっても大丈夫だろう、とそのときは思っていた。

しかし、その認識は誤りだった。社会福祉施設では、利用者が急に走り出そうとしたり飛びついて

きそうになったりするのを全力で止めていた。中には、体当たりするような形になっていたり、強い口調で伝えていたりするときもあった。利用者に少し厳しいのではないかと思ったが、それがその人のための優しさなのだと気づいた。特別支援学校では飛びついてきたのは子どもであったが、それが大人であったら犯罪になるかもしれない。飛びついたのでなく高齢者であったら、怪我をさせていたかもしれない。他の人を傷つけたら加害者になってしまい、何かの事故が起こってからでは遅いのだ。だめなことをだめとしっかり伝えることはその人自身を守ることになるのだ、と気づいた。

全ての行動を許容したり、主観的な考えや自己犠牲で物事を判断したりするのではない。他の人はどうなのか、その人自身のためになるのか、客観的に、相手の立場になって考えることが大事なのだとわかった。

教育実習では、教員としての立場で学校現場に足を踏み入れてみて、様々なことを経験した。私はよく「優しい」といわれるが、その「優しさ」が甘さや全ての行動の許容であるのは本当の「優しさ」ではない。児童・生徒のためを思い、勇気を出して、

ときには厳しく、全力でかわり、寄り添えるような「優しさ」を持った教員になりたいと思う。

おわりに

この4年間の大学生活の中で、沢山のつながりを実感した。物事のつながり、人とのつながり。何事も前向きに目標を持って取り組み続けることが大事なのだとわかった。4月からは、茨城県の公立中学校に社会科の教員として勤務する。つい先日、教員として初めてのオンライン研修で、『『分かる授業』は良くない』ということ学んだ。ほんの何ヶ月か前までは、『『分かる授業』を行いたい』と面接や論文で言っていたのに、もう時代は変化していて驚いた。学び続けることは大事なのだとさっそく実感した。このような感じのことを、教員採用試験を終えた今も、仲間たちと共有している。今まで出会えた人たちやこれから出会う人たちとのかけがえのないつながりを今後も大切にしていきたい。

共に歩み、学び合ってきた仲間たち、どのようときも支えて下さった先生方に感謝を申し上げます。ありがとうございました。

■4年間の教職課程を終えて

はじめに

私は、小学校3年時の担任教師に憧れてから今日に至るまで、教師になることを目指して過ごしてきました。しかし、高校3年生になっても、どの校種の教師になりたいのかを決めきれずにいました。そこで、興味のある日本史を学ぶことができ、中学校教諭1種免許状(社会)と高等学校教諭1種免許状(地理歴史)の取得に加え、通信課程で小学校教諭2種免許状が取得できる大正大学に進学しました。以下に、教職課程で学んだことと共に、教育実習及び「ちば!教職たまごプロジェクト」での経験について述べていきます。

文学部歴史学科日本史コース 富永陽菜子

1. 教職課程での学び

卒業論文の執筆が終わり、学生でいられる期間が残らずかとなった今、大学で過ごした4年間を振り返ると、大変だったけれども大きく成長することができた期間だったと感じます。歴史学科の開講科目に加えて教職課程を履修した日々は、常に時間に追われ、課題をこなすことに必死でした。そのような中で、授業を終えるごとに教育に関する知識が増えていき、自分の教育観や理想とする教師像が少しずつ具体的になっていくことに気が付きました。教師になるという目標に着実に近

づいている証だと思うと非常に嬉しく、授業への集中力も増していったことを覚えています。

特に、学校における大きな問題であるいじめや不登校・問題行動などが発生した場合、当該児童生徒とどのように向き合い、支援していくのかを扱った授業は大きな学びを得ることができました。

このテーマは教職課程のあらゆる授業で取り上げられました。授業を経て学んだことを受け、教師がどのように諸問題に取り組むのかを文章にしてみると、児童生徒の話や傾聴し事実確認を行い、発達の段階や取り巻く環境を踏まえながら組織的に対応する、というように表現できるかと思えます。文章にすることは簡単ですが、そもそもどのようにして児童生徒から話を引き出すのか、発達の段階とはどういったものなのか、他の教職員や家庭・必要な関係機関との連携の仕方など、細かく読み取っていくと教師の専門性が問われる場面をいくらかでも述べることができます。例えば、それらの場面を教職課程の授業に当てはめてみると、どのようにして児童生徒から話を聞きだすのかを学ぶのは「教育相談」であり、発達の段階を学ぶのは「学習・発達論」というようになっています。このように、教職課程の授業はそれぞれの分野に特化したものですが、その1つ1つの授業から得た学びを繋げていくことが、教職課程を履修した学生に最も必要な力であると感じました。

また、多くの授業で学生同士のディスカッションが行われ、自分と異なる考え、意見に触れることができました。物事を多角的に捉え、他者と意見を擦り合わせていく活動によって、自分の考えをより深められたと共に、今後にも活かすことのできる経験となりました。

2. 教育実習

4年次の教育実習は、5月に中学校で3週間、10月に小学校で2週間、それぞれ母校で実施しました。教員採用試験と卒業論文の執筆も同時進行だったため、スケジュール管理に徹底して取り組みました。準備期間に関しては、事前に教科書の範囲

を伺っていたので指導案を書き進めたり、教科書を読み込んだりして、なんとか不安を解消しようとしていたことを覚えています。

教育実習の中でも特に学びの多かった授業実習において工夫した点は、授業毎に取り入れる補助教材を変えたところです。例えば、板書を中心に行う授業やプリントを用いて進める授業、写真・映像を多く用いる授業、タブレットで調べ学習をする授業、グループで調べたことをまとめて資料作成をする授業を行いました。あらゆる形式の授業を行うことにより、板書は伝えたいことを厳選し簡潔なものにするべきであること、プリントのどこに何を書いて欲しいのかを明確に伝えなければならないことを学びました。加えて、視覚的な理解は大変重要であり、出来事の背景や当時の情勢などの説明を交えながら写真・映像を見せると理解が深まること、グループワークを行うと生徒間で役割分担が行われ、個々が生き生きと活動していることに気が付きました。

そして、授業を行う上で大切なことは、授業に対する私自身の目標と生徒の目標を定め、授業後にその目標がどれだけ達成できたのかを反省し、さらに次の目標に向けて準備することだと感じました。この目標の到達具合で、それぞれの生徒によって机間巡視の際の声かけを変えたり、発問の内容や難易度、言い回しを考え直したりする必要があることを学びました。

また、授業以外の時間に関して、小学校での実習の際にはなるべく休み時間は外で遊びました。児童と全力で走り回る休み時間は、1人1人の児童の個性や関心のあることを知ることができる大切な時間でした。中学校の実習では、始業前やお昼休みの時間に生徒に話しかけることを意識しました。このようにして、ちょっとした会話の中から得られる情報を児童生徒の名前と結び付け、とにかく早く名前を覚えようと努力しました。小さな努力ではありますが、教師になるには必要不可欠な努力です。授業時間外にどれだけ児童生徒とコミュニケーションを取ることができるのかによって、

自分に対する接し方がより親しみを持ったものに変化する。と共に、授業への関心の高さや挙手の数が変わることを実感しました。

3. 「ちば！教職たまごプロジェクト」

私は教職課程の履修当初から、出身地である千葉県で教師になることを目標としていました。そのため、定期的に千葉県の教員採用試験の案内を見たり、千葉県教育委員会のホームページを閲覧したり、千葉県で教師として勤務している知り合いに話を聞いたりして、千葉県で教師になるための情報を集めていました。そんな中で2年次の冬頃に、公立学校教員を志望する大学生を対象に、千葉県の小学校・中学校・義務教育学校・特別支援学校で研修を行うことができる「ちば！教職たまごプロジェクト」の存在を知りました。こんな良い機会を逃すわけにはいかないと思ったのですが、3年次での研修への応募は締め切られており、4年次に研修に参加することを決めました。

私が研修をすることになったのは、浦安市立東小学校です。研修校での1日の流れを説明します。まず、7時40分頃に出勤し、動きやすい格好に着替え、先生方に挨拶をします。そして、その日お世話になる学年主任の先生に1日の時間割を伺い、8時過ぎに教室へ向かいます。この研修は教育実習とは異なり、学生が授業実習をすることはありません。そのため、授業時の主な内容は机間巡視であり、児童のサポートを行うことです。そうして午前中を過ごし、お昼ご飯は持参したものを職員室で食べます。

お昼休みは、児童と校庭で遊んだり、教室でコミュニケーションを取ったりして過ごします。

お昼休みが終わると、児童と一緒に掃除をしながら清掃指導を行います。そして、午後の授業を終えると、日によっては高学年児童が取り組む委員会活動に参加したり、児童が下校した後に職員会議に参加します。それらも終わったら、1日の活動内容や学んだことを研修記録用紙に記入し、研修担当の先生に提出します。その際、1日の研修報告を

行うと共に、次回の研修日を相談し決定します。最後に、先生方に挨拶をして、大体16時～16時30分頃に退勤します。

研修を行うにあたって、私は避難訓練や運動会、書き初め等、学校行事が行われる日に研修の実施をお願いしました。なかなか教育実習では学校行事に参加することができないため、行事の際に先生方がどのような打ち合わせ・役割分担をして、どんな前日準備を行い、当日動いているのかを学ぶことができました。例えば、私が運動会に参加した際には、決勝審判係として打ち合わせに参加し、当日は係の先生や児童と一緒に、競技を終えた児童の誘導やゴールテープを持つ役になりました。さらに、研修生ではありますが学校職員の立場として、運動会後の片づけや職員会議での反省に参加しました。何より、児童が安全に行事を実施でき、かつ思い出に残るものになるよう、先生方が綿密な計画を立て、実践する姿を近くで見ることができたことは貴重な経験となりました。

しかし、昨今の情勢により研修の中断を余儀なくされ、本来であれば年間30日以上研修と複数回の地区別研修会が行われるのですが、2022年1月の段階で研修回数は10日未満であり、地区別研修会もすべて中止になりました。それでも、「ちば！教職たまごプロジェクト」に参加しなければ、学生のうちに経験できなかったことが多くあります。それらは、教員採用試験の面接で活用することができる体験談となりました。加えて、現場の先生から千葉県の教育現場の実情や、教員採用試験に関する話などを聞くことができました。教員採用試験を受験する自治体が決まっている学生は、その自治体が「ちば！教職たまごプロジェクト」のような研修を実施しているかを調べ、その研修に参加することをお勧めしたいです。

おわりに

4月からは、千葉県の公立小学校で教諭として勤務します。正直、今は不安が頭を占めています。ですが、教職課程を4年間やりきることができた根

性と、これまで積み重ねてきた努力には自信があります。大正大学教職課程や明星大学通信課程、そして「ちば！教職たまごプロジェクト」で学んだことを振り返り、更なる目標に向かって努力し続けられる人でありたいです。最後になりましたが、こ

れまでご指導頂いた大学の先生方、教員採用試験に向けて一緒に勉強に励んだ仲間、教師になるという夢を応援し続けてくれた家族や友人に、心より感謝申し上げます。

■4年間の教職課程を終えて

人間学部教育人間学科教職コース 原口冴織

はじめに

私は中学時代から教員になることを目指していて、教職コースのあるこの大正大学に入学しました。大学1年の春学期には巣鴨北中学校にTA活動に行き、夏休みには清和小学校に水泳の外部指導員として行きました。大学2年生の春学期には西巣鴨小学校にTA活動に行き、大学3年生の2月には実習校である市川市立鶴指小学校にボランティアとして入らせていただきました。本稿では大学4年間の教職課程を通して学んだことや教育現場に入らせていただいた経験などについて以下に記したいと思います。

4年間の学び

4年間の学びを通して、教職についての専門的な知識の習得と実際の現場での経験をたくさん積むことを意識して学びました。

まず、教職についての専門的な知識の習得ですが、主に教職課程の授業と書物から学びました。覚える事が多く、正直すべてを覚えているわけではありませんが、何が特に重要なのか優先順位をつけて勉強を行いました。書物については滝沢先生からすすめられた本を読んだり、自分が興味を持った本を読むことで知識を蓄えていきました。

実際の現場での経験は、はじめにでも述べたように小学校、中学校のTA活動、水泳の外部指導員、実習校でのボランティアなど数多くさせていただきました。時系列に沿ってどんな経験をさせていただいたのか述べていきます。

1年生の春、巣鴨北中学校へ週1回TA活動に行き、数学の先生について授業を見学していました。後ろで授業の見学をしながら、手が止まっている児童に解き方を教えたり教科書を開かせたりと授業の補助を行いました。生徒に教える難しさと、分かってもらえた時の嬉しさを学び、自分の知識不足を痛感しました。

1年生の夏休みに行なった清和小学校での水泳の外部指導員では、健康観察カードのチェック、児童の安全のための見守り、実際にプールに入っただけで指導などを行いました。初めて小学生と関わりましたが、楽しそうにプールに入っている様子や話をする中で、小学校の先生に興味を持ちました。

2年生の春学期には西巣鴨小学校へTA活動に行き、特別支援学級に入らせていただきました。特別支援学級では、後ろで見学している時間よりも声かけや指導を行っている時間が多くありました。特別支援学級の児童は、取り掛かるまでが遅かったり途中で飽きて違うことを始めてしまったりと指導がとても難しく、初めの頃はすぐに手伝わっていました。先生から「一人のできるようにならないといけないから見守ってあげて」とご指導をいただき、声はかけるが自分でやらせることを徹底しました。教員は児童が困っていたらすぐに手を差し伸べるものだと考えていましたが、自分でやらせることを徹底した結果、はじめは出来なかったことが少しずつできていく様子を見て、見守る事の大切さを学びました。

3年生の2月には、実習校である鶴指小学校にて授業の見学等をさせていただきました。様々な学年の授業に入って見学をしたり、注意して見ていてと言われた子について指導を行ったりしました。うまくいかないことも多く、アドバイスをもらいながら児童と関わりました。学年ごとに話し方や授業の工夫が異なっていて、児童の発達や学力、性格などをしっかりと理解した上で授業を展開することが重要だということを学びました。

明星大学通信教育課程での学び

元々は中学校の教員を目指し教職コースのある大正大学に入学しましたが、大学1年生の夏休みに清和小学校に水泳の指導員をしに行ってから小学校の教員に興味を持ちました。その後、明星大学と連携していて小学校免許も取れることを知り、2年生から小学校免許取得の勉強を始めました。勉強方法としては、大学から教科書が送られてきてそれを自分で読んで勉強して、基本2つのレポート課題があるのでそれに沿ってレポートを提出、スクーリング or テストを受け、全て合格すれば単位認定という形でした。教科書での勉強だけでは分からないことも多いため、スクーリングで教授と一緒に勉強している方に質問をして学んでいきました。

明星大学の通信課程を始めて改めて気づいたことは、とにかく時間が無いということです。大正大学の教職課程の必修でフル単位、TA活動、サークル活動、アルバイト、明星大学の勉強というようにやるが多すぎて、2年生の間はなかなか明星大学の勉強が出来ませんでした。そんな時に自分を支えてくれたのが、一緒に明星大学の勉強をしている友達です。友達と共に勉強をすることで「辛いのは自分だけではない」と思うことができ、励まし合うことでなんとか勉強を進めました。

大変なことは沢山ありましたが、様々な年代の方と学ぶ機会がなかったのでとても貴重な体験が出来ました。子供がいる方とのグループセッションでは、子供の実態を良く知っているからか児童

に寄り添った教育についての話し合いができ、現場の先生とのグループセッションでは、1対多数での苦労やそれに対する工夫など実践的な話し合いをする事が出来ました。大変ではありましたが、自分にはない視点から物事を見ることができたのでとても勉強になりました。

4月からの抱負

私は現在、東京都の期限付任用教員採用候補者に名簿登録されて電話待ちをしている状態です。来年度教壇に立つことができるのかまだ不確定ですが、いつ連絡が来てもいいように勉強を進めています。正直、実習を経て教員という仕事が自分に務まるのかと不安ですが、大学で学んだことや現場へ入らせて頂いた時の経験を活かせるようにしていきたいと考えています。

教員になったら児童に寄り添うことはもちろんのこと、様々な視点を持ち考える授業を展開したいです。また、児童が楽しく学ぶことのできる授業を目指して教材研究など授業力の向上に努めていきたいと思います。4年間を通して様々なことを教えてくださった先生方、挫けそうになった時に支えてくれた友人達のおかげで今の自分があると思っています。本当にありがとうございます。これからも様々な人のおかげで今があるということを忘れずに学び続けていきたいです。

後輩へのメッセージ

教職を目指す皆さんに伝えたいことは3つあります。1つ目は、沢山の経験をしてほしいということです。私は中学校の先生を目指して入学しましたが、途中から小学校の先生になりたいという気持ちが芽生えました。何事も決めつけてしまうとその道しか見えなくなってしまうのですが、皆さんには沢山の選択肢があります。焦らずたくさん経験をして自分が一番興味を持ったことや好きなことを見つけてほしいです。

2つ目は、くじけそうになった時は初心を思い出してほしいということです。私はくじけそうになった時、水泳指導で関わった児童の笑顔を何度も

思い出したり、自分が教員を目指すきっかけとなった先生のことを思い出してここまで頑張れました。自分で選択して進んだ道でも学んでいくうちに自分に自信が持てなくなったりくじけそうになることが誰しもあると思います。そうしたときになぜ自分はこの道を選んだのかということを出してみてください。きっともう一度頑張ろうという気持ちが芽生えると思います。

3つ目は、友達を大切にし、協力して頑張ってほしいということです。法律や各教科の勉強、時事問

題と学ぶべきものが沢山ある中で、一人で全部を網羅することは精神的にも厳しいものがあります。何度もつらくなり勉強が手につかなくなりましたが、友達と電話で話したり集まって一緒に勉強することで何とか乗り越えることができました。

教職課程に限った話ではありませんが、大学4年間で私は上記の3点がとても重要だと感じました。大変なことはたくさんあると思いますが無理はしすぎず頑張ってください。応援しています。

■教職課程を終えて

表現学部表現文化学科英語表現・コミュニケーションコース 佐橋俊輝

はじめに

私は専門学生時代に教師になりたいと思い、大正大学の3年次に編入学し、教職課程を履修し始めました。しかし、平成31年度から新しい教職課程が始まり、3年次終了までに履修しなければならない科目で履修できないものがいくつかありました。そのため、学部修了後に科目等履修生になり、教育実習に行ったりと様々な経験をしてきました。そんな3年間の教職課程で私が学んだことや伝えられることを以下に記していきます。

教職課程での学び

(1)授業を受けるときの意識

教職課程を履修し始めた当初、課題や期末テストといった目先のことに注視していました。単位を落とさないように、あるいは少しでもいい成績を取るためには大事なことだったと思います。そして、同じ英語科の友達と協力しながら課題や模擬授業などに取り組んできました。特に、英語科の授業ではプレゼンテーションやグループディスカッション、ディベートといったグループの課題が多かったため、役割分担をして調べたり、情報を共有したり、他のグループを参考にしたりと、誰かと協力して課題をこなすことがほとんどでした。こうした課題を通して、または教職関係の授業で学

んだことから、授業や課題にはそれ自体を学ぶ以外に「他者と協力する力」「情報をまとめる力」「他者に伝える力」といったさまざまな能力を養う目的があり、そのための多数の授業方法があるとわかりました。そこで、私自身が授業を受けるうえで、多くの先生の授業方法を注目するようになり、模擬授業の際にさまざまな方法を試して、教えることの難しさや面白さを学ぶことができました。それと同時に授業を受ける際の意識を教える側にも向ける重要性に気づきました。

(2)模擬授業を通して

模擬授業を通して、実践的な授業感覚を身につけることで教師としての弱点を改善することができました。例えば、私は元々人前に立って話すことが苦手で、声も教室の後ろまで通り難く、ハキハキと話すことができませんでした。3年生の頃の模擬授業では、授業改善点に毎回挙がっていたところでした。主な原因は、授業することに慣れていなかったことや授業することに自信がなかったことがありました。そのため、模擬授業を回数こなすことで自然と慣れていき、授業の仕方や知識が増えたことで授業への準備が入念になりました。準備が出来ていれば緊張を良い方向に捉えることができ、4年生の頃には指摘されなくなっていました。それ

でも教育実習の最初や研究授業では緊張しましたが、声が聞こえないとか通らないという指摘はありませんでした。こうした、人前に立って話すことが苦手だったり、声が通らないといったことは教師にとって致命的な弱点で、改善できないものだと思っていました。しかし、自分の弱点を直す努力を怠らなければ少しずつ改善していくことを学びました。

(3)教育実習を経て

私は都立高校で3週間、教育実習をさせていただきました。現役の高校生の前で授業をするため、模擬授業とは異なる緊張を感じながら実習をこなしていきました。多くの先生から現場における生徒との関わりや授業のアドバイスを頂くことができましたし、生徒とたくさん会話をして、大変でしたが、楽しく貴重な経験ができたと思います。教育実習を経て多くのことを学びましたが、その中でも「教科に関する知識」と「生徒を見ること」は特に大切だと思いました。

私の実習校は、実習前に教える範囲を決めるところだったので、ある程度準備をすることができました。例えば、教科書の内容やその文法・単語の確認をして、わかりやすく説明できる状態にしていました。しかし、いざ授業をするとなると、想定外の質問があったり、授業を改善するにあたって生徒にとって興味のある内容が何かないかと考えたりすると、より多くの教科に関する知識が必要だったと思う場面が多々ありました。

また、授業をするうえで、どんな生徒がいるのか把握することでよりスムーズな授業をすることができました。実習ではただ授業をするのではなく、生徒と会話して、生徒との距離を縮めていきながら授業するようにしました。教える人がどんな人かわからないと、生徒にとってただ受けている感覚になりますし、私も生徒の興味を知って、生徒理解を図ることで、授業の盛り上がりが変わってくるとわかりました。

後輩へのメッセージ

4年生になると卒業論文や教育実習、教員採用試験と大変な1年間になると思います。特に教員採用試験の勉強は3年生から本格的に始めなければなりません。そのため、1、2年生のうちに計画を立てて、課題や勉強と同じくらい趣味などにも時間をかけてください。趣味といった時間はリフレッシュになりますが、今後の教員採用試験や教員になった際に生きてくると思います。例えば、私は旅行が好きなので、やるべきことをやった後の息抜きでよく旅行するようにしていました。その際のエピソードを教育実習の授業でネタとして使える場面がありました。趣味や遊びなどはリフレッシュになるだけでなく、思いもよらないところで活用できるため、勉強の息抜きとして大いに楽しんでください。

また、教職を志すうえで、モチベーションを維持することが難しい方もいるかと思いますが、私は「教員採用試験に落ちたら」という不安から、教職とは別の道も考えることができました。それでも、教師になりたいという気持ちはあり、モチベーションに揺らぎはあったものの、後悔しないように教職課程をこなしていきました。それでも、教育実習で生徒や現場の先生からエールをもらい、そのとき教師になるということに決意を固めることができました。ずっとモチベーションを高く維持し続けることは難しいことですが、それでも諦めずに努力していくことで、何かのきっかけがそれを強いものにしたいと思います。そして納得のできる学生生活を送ってください。

4月からの抱負

私は4月から埼玉県私立高校で非常勤講師として勤務します。うまく行くかどうかかわからない不安はありますが、なんとかうまくやってこれたこれまで通り、次第に学校にも慣れていくものと思います。また、教師として、生徒にとってわかりやすく、興味のある授業にしたいです。そのため、私自身が学び続けることや生徒を理解することを怠らないようにしていきます。そして、今まで私は大学の先生方や友人から支えられてきました。そ

の分を返せるように、生徒に寄り添うことができ
る教師になることを目標として、これからも頑張

っていきたいと思います。

■ 4年間の教職課程を終えて

人間学部教育人間学科教職コース 4年 箕輪潔人

はじめに

4年間の教職課程を終えて、教員への熱意が大きく変わったと感じる。こんなことを言うと、滝沢先生や坪井先生をはじめとする教職課程の先生方に怒られるかもしれないが、教職課程を履修し始めた頃はいわゆる「免許だけ」を目指していたのが本音である。また、自分に教員はできないものだと考えていた。それが、教職課程での経験を積み重ねていく中で、自分が教員になった時の強みを知り、教員への熱意も変化した。また、数々の実習を経験し、現場での経験や実際に教員として働いている先生方からのアドバイスを頂き、成長することができた。教員を志す決め手になったのは、母校の帝京第三高等学校での教育実習であった。自分の人生で一番勉強し、工夫を重ねた3週間は、実習を終えて一生の宝物になった。そして、ご縁があり4月から母校で教壇に立つことが決まった。

本稿では、私の教職課程4年間を振り返り、経験を重ねていくなかで学んだことや気持ちの変化をまとめていく。また、4月から教壇に立つにあたっての決意や現時点の気持ちを述べていきたい。そして、本稿を今後自分が教員としての壁にぶつかったときに振り返る「原点」とし、大正大学で教職を志す後輩に少しでも教職課程をやり遂げようとする気持ちを与えるものとした。

教職科目での学び

私の教職課程は、1年生の秋学期からはじまった。もともと進路を決める際に、「大学野球ができる」「教員免許がとれる」という2つを軸としていたため、教職課程を履修しない選択肢はなかった。しかし、硬式野球部に所属しながらの両立は難しく、継続できない人が多いとは聞いていた。実際に、私

の学年の硬式野球部で教職課程を最後まで履修したのは2人のみであった。はじめに履修した「現代教職論」では、中元先生から学校という「組織」について学ぶことができた。私はこのころ、まだ「免許だけ」を目指していたため、教員を志していればまた違った見方があったかもしれない。それでも、私の教職課程の一步目として「現代教職論」を履修して良かったと思える。

2学年春学期からは、教職の科目と教科の科目を並行して履修した。その都度、授業で学んだことを教職と教科それぞれに活かすように工夫して取り組んだ。このころの教科の科目は、教員になるうえで土台になる部分であったため、もう少ししっかりやっておけばよかったと思う。秋学期からは、模擬授業に取り組み、授業をする範囲を一生懸命勉強したことを覚えている。今になって気づくことは、範囲を深く学ぶことと同時に横の流れをつかむことも重要ということだ。特に、私の教科は社会科であるため、歴史の流れやプロセスが重要となる。それも模擬授業をやらなければ気づくことができなかったことで、私の授業作りの原点となっている。

実習での学び

3年生になり、ほとんどの教職の科目を取り終え、学校という組織や教科以外の教員の役割について理解が深まったところで実習に取り組んだ。介護等体験では、特別支援学校で2日間、介護施設で5日間体験させていただいた。特別支援学校では、1年生のクラスを担当し、授業の付き添いや散歩の補助をした。特別支援学校の生徒の特徴を事前に学んで難しそうな印象を持っていたが、比較的軽い障害をもつ児童のクラスであったから幼稚園

生と遊んでいるような感覚であった。指導してくださった先生にも、良い意味で障害を忘れて接していたことが印象的だったとお言葉を頂き、特別支援学校の教員の魅力を感じた。

一方で、介護施設ではデイサービスにいらっしゃる高齢者のレクリエーションや食事の補助を担当した。正直な感想として、職員の方もストレスを感じながら働いている印象を受け、日本が抱える介護という課題を肌で感じた。教員は、これからの未来をつくる子どもと接する職であるため、実際に体験したことを伝えられることは子どもにとっても感じ取りやすい。ただ、単純に介護の大変さを伝えるだけでなく、楽しさや魅力を交えたうえで日本の課題として介護の問題があることを伝えていきたいと思う。

4年生の6月に教職課程の集大成である教育実習に行った。実習先は母校の帝京第三高等学校で、3週間寮生活をしながら取り組んだ。私は大学でも野球を継続していたため、野球部の指導にも関わり、授業と部活動を並行して過ごした。部活動が終わるのが20時ごろで、そこから食事、風呂、洗濯、寮の点呼があるため、教材研究は、23時ごろに始めていた。睡眠時間は、多くて4時間、少ないときは2時間ない程で、肉体的にも精神的にもとても辛かった。ただ、実習を終えて担当したクラスから寄せ書きをもらい、本当に頑張ってたよと感じた。この時、私は人生で一番辛い3週間で過ごしたにもかかわらず、教員になりたいと思えた。また、一般企業の就職活動を通じて感じていた、自分にしかできないこととは何なのか、という疑問を解決できた。

そして、先述したように4月から社会科（地理歴史科）の非常勤講師と硬式野球部のコーチ、寮監

を務めることになった。野球部を持てたのも、大正大学で厳しいと言われていた部活動と教職課程の両立を最後までやり遂げられたからである。まずは、教員として学校第一で取り組み、教育の延長の部活動という基本を忠実に歩んでいきたい。

おわりに

本稿では、私の教職課程を振り返り、学んだこと、気持ちの変化をまとめてきた。こうやって教壇に立てることになったのも、「免許だけ」という気持ちであっても学び続け、教育実習を終えられたからである。もし、本稿が教職課程を続けようか悩んでいる後輩に届いたならば、とりあえず教育実習まで頑張るという選択肢があっても良いと思う。教員にならないなら、教員免許は持っていても意味がないし、遊んだほうが良いという人もいるだろう。しかし、私は実際に教育実習で気持ちの変化があったし、たとえ教員にならなかったとしても人生で一番の経験になったことは間違いない。

ただ、はじめから教職課程を「教員になる」という気持ちで学び続けた人との差は大きいとも感じる。現在、4月からの授業準備をしている中で、私は土台となる基礎から学んでいかなければならない。しかし、それも私の強みであると感じている。生徒と同じ目線で教材を見ることで、疑問に感じる点が多いからだ。その疑問が、頭の良い人にとって「当たり前のこと」という考えでは、生徒に寄り添えないと思う。この私の強みを生かして、教員生活を歩んでいきたい。

最後に、教職課程の先生方へ感謝の気持ちを伝えたい。本当にありがとうございました。これから「学び続ける教師」であるために、創意工夫を重ねていきます。

■ 4年間の教職課程を終えて

はじめに

大学入学を機に自分の将来について考えるよう

文学部歴史学科日本史コース4年 高山晴菜

になった私は、1年生の秋、教員になることを目指して教職課程をスタートさせました。高校生の時

に出会った恩師のように人を支えられる存在になりたいと思ったこと、そして大好きな日本史に触れられる仕事がしたい、という思いからでした。教職課程が始まるとガイダンスに参加し、様々な授業を受講します。その中で、たくさんの先生の口から、教職がとても大変なものであること、生半可な気持ちで目標にしてはいけない、という話を聞きました。実際、周りには大学に入学する前から教員を志望している人や、TA や子供たちと関わる活動を通して経験を積んでいる人がおり、自分の思いや覚悟が足りないと思うことがたくさんありました。

しかし、私は大正大学における教職課程を経て、教員になるという夢を叶えることができました。諦めずに自分のできる努力をすること、周りの人と支え合うことがなによりも大切です。本稿では、そういった経験を少しでも、今教職課程を受講している皆さんにお伝えすべく、4年間の学びや教員採用試験について振り返ります。

4年間の学び

教員を目指す上で最も苦労したのは、教職に関する知識を身に付けることでした。専門教養も覚えていないことや新しく知ることが多々あれど、これまでの基礎があったので新たな学びを得るのにそこまで苦労することはなかったように思います。しかし、教職教養については全く知識がなく、授業内で登場する用語さえ知らないものが多くあったので、まずは基礎的な教育の知識を身に付けることに努めました。配布される資料を確認しながらネットで調べたり、先生の話をもメモして、少しでも内容を記憶に残すことから始めました。また、他の教職課程の仲間と話をしながら、授業内容を確認できたことも学びにつながっていたと思います。普段の会話だけでなく、多くの授業で用意されていたグループワークを通して、曖昧に理解していたことも口に出して整理することで身に付いていきました。

教育の知識をある程度身に付けたら次にやらなくてはいけないのは、教員になったときに役立つ

経験をできる限りたくさん積むことでした。4年生の教育実習に向けて、2、3年生にかけて模擬授業を行いました。反省ばかりの授業になってしまいました。人前で話をした経験がほとんどなく、緊張しやすいことが自分でわかっていたので、2年生の夏頃から塾講師のアルバイトを始めていましたが、すぐにスムーズに話ができるようになるわけではありませんでした。内容に関しても、「生徒が興味を持てるような内容にすること」を担当の先生に課題として指摘され、もっと生徒に寄り添った授業展開にすることが必要でした。私自身が面白い、興味を持てると思う内容は、歴史を専門に学んでいて、歴史が好きな自分だからこそ思うことであって、歴史が苦手な生徒や初めて学ぶ生徒にとってそうであるかはわかりません。もっとわかりやすく、厳選した内容にすべきでした。

迎えた教育実習においても、その部分が課題となりました。教育実習では、模擬授業よりも素直な反応が生徒から返ってきます。自分の授業がつまらないということがはっきりとわかるので、正直心が折れそうになりました。しかし、逆にいえばそれは、自分の授業の改善点が明確となり、生徒の反応が良かった部分は続けていけばよいことを示しています。

また、クラスによって興味を持つ部分が異なり、少しずつ違った反応をもらえることは大きな発見でした。それまで大学の講義において、生徒一人一人に異なる考えがあり、学習にも得手不得手があることを学んできましたが、それを実感できたことは、4年間の中でも最も印象に残っている学びです。指導教諭の先生からご指導いただいた部分や、自分が考える反省点のすべてを教育実習中に改善することはできませんでしたが、自分なりに努力したり、課題意識を持って取り組んでいくことは、確実に自分の成長につながったと思います。

教員採用試験について

私は、埼玉県高校地歴科の教員採用試験を受験しました。結果は不合格でしたが、反省点を踏まえつつ、その後の私立高校の採用試験受験までの流

れを記していきたいと思います。

まず、埼玉県教員採用試験について、私は受験前年の12月頃から、7月の採用試験に向けて本格的に勉強を始めました。埼玉県は一般教養・専門教養・教職教養が出題となるので、範囲は広めです。初めは、どこから勉強すればよいかわからず、赤シートで覚えるタイプの教職教養・一般教養のテキストと、自分が大学受験のときに使った一問一答を使って専門教養の勉強をしました。しかし、今考えるととても時間のもったいない勉強法です。出題範囲が広いことに焦ってすべてを覚えようとして、どの科目も中途半端な勉強になってしまいました。その後、3月頃から教採の勉強会に参加させていただき、私はようやくそこから過去問に取り組み始めましたが、できる限り早くから始めるのが良いです。勉強が済んだら腕試し的に過去問を解こうと思っていましたが、早いうちから過去問を研究することが合格への近道だと思います。自分の受験する自治体の出題傾向や、勉強が必須な問題を絞り、効率的に勉強しましょう。

次に、私立高校の採用試験について、7月末の埼玉県の教員採用試験の不合格を経て、11月末に受験した私立高校に採用が決まりました。埼玉県の試験で不合格となったあとも、今後のことを考えて面接練習等には参加させていただいていましたが、いつ合格できるかわからない試験を来年以降も受け続けることに不安がありました。そのような状況の中で、教員を目指すことについて自分の

中で考え直し、一般企業に就職することも考えました。しかし、やはり教員になることをあきらめきれず、受験を決めたのが私立高校の採用試験でした。その後、私学協会に登録を行ったところ、採用試験受験のお声かけをいただき、模擬授業と面接の結果、採用となりました。たった1校の受験で合格できたことはとても運のいいことだと思います。諦めずに教員を目指し続けたことを忘れず、チャンスをいただけたことに感謝して、生徒に寄り添い努力し続ける教員でありたいと思っています。

おわりに

最後に、教職課程を受講している皆さんにお伝えしたいことは、何事も諦めずに努力すること、そしてなにより自分の気持ちを大切にすることです。大学の講義はもちろん、教育実習も教員採用試験も、その後の就活も諦めずに頑張ってください。しかし、そのためには自分の気持ちが伴わなければいけません。私は最後まで教員の道を選び続けましたが、教育実習や採用試験を経て、教員に向いていないと思ったり、別の夢が見つかることもあると思います。つらいときや迷ったとき、モチベーションを維持できないときには周りの先生方や友達に相談したり、息抜きをして、自分を見つめ直してみてください。その結果、どんな選択になるろうと、自分の気持ちが一番大切です。いろいろな可能性を模索しながら、自分の決めた道を進み続けてください。

■4年間の教職課程を終えて

はじめに

私が今まで歩んできた道を振り返ると、なかなか特殊であり、とても面白いものであったと思います。私は高等学校を中退し、高等学校卒業程度認定試験に合格して大学に入学しました。私が大学に入学した理由は、教員免許を取得し、教員として働きたいと考えていたためです。そのような目標

文学部日本文学科4年 岡田千明

がありながらも、4年間はたしてやり切れるのかという不安がありました。

大学での学びについて

教科教育法を終えた学年については模擬授業などができない環境であるかと思っています。そのような時は是非学科の仲間たちと勉強会を開き、模擬

授業や専門教養対策をしておくことをおすすめします。私達の学年は、コロナの影響や長期休みの影響で大学へ通学できない期間がありました。その期間はモチベーションを保つのが難しくもありましたが、教員を目指す同じ学科の仲間達と勉強会を開くなどして全員で頑張りぬくことができました。

他にも今できることとして、大学の授業で配布された資料を持っているのであれば、今一度確認しておくことをおすすめします。プリントに自分の書いたメモは残っていませんか。同級生が作った学習指導案を見て、あなたならどのように授業を組み立てますか。学習指導案は学習指導要領との兼ね合いも非常に大切です。今一度確認してみてください。

教育実習について

教育実習は母校の中学校に 3 週間お世話になりました。コロナ禍での実習ということもあり、給食は黙食が徹底されているなど通常と異なる点が多くありました。そのような中でも生徒たちは日々学び、学校生活を楽しんでいると感じました。

私は中学 2 年生の国語を 2 単元分担当させていただきました。授業については、とにかく堂々とするのを心がけました。大学では私は学生ですが、学校では先生と呼ばれます。先生であるからには事前に考えた授業案を自信もって行おうと思いましたが、授業を終えるごとに授業に関するフィードバックをいただき、その都度修正するというのを繰り返しました。休み時間が 10 分しかない中で次の授業までに修正しなければいけないときは大変でしたが、非常に勉強になりました。アドバイスとして学習指導案については教育実習が始まる前に作成しておくことをお勧めします。理由としては、教育実習期間は他のことで手いっぱいになり教材研究に時間をさけないこと、事前に担当の先生に見ていただき指導案の書き方や授業内容についてアドバイスをいただけることなどがあげられます。

部活動では女子ソフトテニス部に参加し、実際にボール出しやサーブの打ち方の指導などを中心に行いました。私は前述したとおり 2 学年の担当であったため、他の学年の生徒との関わりはほとんどなかったのですが、部活動に参加したおかげで他の学年の様子なども知ることができました。また、授業とは異なる生徒との接し方もここでは体験することができました。

教員採用試験について

私は教育実習を終えてから本気で教員になりたいと確信し、教員採用試験までの一か月間をひたすら勉強に費やしていました。私が受験した自治体は一次試験に一般教養・教職教養、専門教養が出題されました。結論からいうと私は一次試験に合格できませんでした。国語科の教員を目指しているのにも関わらず、私は専門教養で不合格となってしまいました。もしも、私と同じように専門教養に自信がない方がいらっしゃったら、この時期は専門教養を特に強化しておくことをおすすめします。

学習支援員について

教員採用試験が一次で不合格となり、正直かなり苦しかったです。しかし、私は結果が出た翌日から早速行動にでました。まず、来年度からどのような形であっても教壇に立ちたかったので講師登録についての情報を集めました。そして次に、学習支援員に応募して市内の学校へ行く機会を作りました。なぜなら当時、支援員の募集が中学 3 年生への指導を想定しており、教育実習で自分の担当以外の学年とはほとんど関わりが持てなかった私にとっては良い機会であると考えたためです。他にも、ずっと避けてきた国語と向き合いたいと考えたことも理由の一つです。

前述したとおり、私は今回の教員採用試験を専門教養で落ちてしまいました。その反省からも国語を中心に中学 3 年生に指導できるように、必死に勉強しなければならぬと考えました。学習支援員を経験したことで私の国語に対する熱意はも

もちろんですが、現在の中学生が抱える国語に対する苦手意識をどのように払拭していくのがよいのか非常に考えさせられました。

今後の抱負

私は11月にとある県の教育事務所に講師登録し、その中の市教育委員会に連絡を取って、面接を組んでいただきました。私は全部で4つの市教育委員会に登録しましたが、そのうちの1つの自治体から1月上旬に中学校の任期付教員のお話をいただきました。私は教育実習の3週間で中学校で過ごしましたが、中学校で働くことが自分にとってのベストであると思っていたため、このお話は大変嬉しかったです。

任期付教員として来年度から働くことが決定し、4月からは1人の教員として子ども達と接していくことになります。私は様々な目標がありますが、その中の1つに、授業で生徒との信頼を築くことができる教員になりたいというものがあります。

■4年間の教職課程を終えて

はじめに

私は教員を目指し大正大学へ入学した。TA活動を通して芽生えた小学校の先生になりたいという夢を持ち、明星大学通信教育部の履修を始めた。大学で授業を受けながら、学校現場での活動にも取り組むことができた。本稿では、大正大学で学んだ4年間の教職課程を振り返るとともに、今後の抱負や後輩へのメッセージを送らせていただく。

教職課程の授業

入学当初は、どの科目を履修していけば良いのかわかっていなかったが、先輩に聞き、2年生からは、必要な単位が確実に修得できるように計画をもって授業を組むことができた。2年生から本格的に教職課程が始まるものの、その時の私は何が大変なのかわかっていなかった。しかし模擬授業や

まずは教科を理解するために準備を重ねて、残りの学生生活を国語とひたすら向き合う時間にあてたいと考えています。

おわりに

ここまで私の4年間の教職課程について振り返ってきました。教職を学ぶ中で私は、人に言われてから行動するのではなく、自分に今何が必要で、そのために何をしなければならないのか考え、実行に移すことができるようになったことが良かったと思います。また、国語という教科が子ども達にとっていかに大切であるか、この4年間で学ぶことができました。

個人的な話になりますが、ずっと私を応援してくれていた父が昨年亡くなりました。父は生前よく「千明にしかできない生徒との関わり方がある」と言っていました。4月からはその言葉の意味を探しながら、日々を全力で過ごしていく決意です。

人間学部教育人間学科教職コース 穴澤優菜

教科教育法を学ぶにつれ、教師になることの難しさ、大変さを実感した。初めて指導案を目にしたときには、こんなにも書くのかと思った。どのように授業計画をし、生徒に何を学ばせ、どんな発問を投げかけるのか、時間を費やして自分のものにしなければいけない。いざ、授業をしてみると、声の大きさ、板書の仕方、全体を見る力など上手くいかないことの方が多かったが、授業を重ねて出来ることが増えていき、回数を重ねることの大切さを感じた。

子どもに教師しか指導できないことがある。それは生徒指導だ。学級を持てば、色々な子どもがいて、問題が発生する。どのように対応すれば良いのか、心理学から子どもの発達段階を学び、教育相談及び生徒指導の授業において子どもとのかかわりについて学んできた。それをいざ、TA活動で活動

してみると、授業中、落ち着かない子、鉛筆が止まっている子など様々な子どもを目にした。クラス全員をみる力、まとめる力の指導力も欠かせないものであると実感した。

3年生は、コロナ禍でオンライン授業となり、新たな環境での取り組みだった。介護等体験や4年生には教育実習を控えており、どのようになるのかという状態の中で、不安だらけだった。しかし、ICTの取り組みが進んでおり、オンライン授業でパワポを作って授業を行っていたりしたため、教育実習では見やすいパワポを作れたり、コロナ禍での経験が教育実習で活かされた。細かい内容は以下の教育実習で述べる。教員を目指した4年間は、教員になりたい思いを強くするとともに、自分にとって今まで深く学んでこなかった分野の知識を取り入れることができ、基礎から学ぶことができた。

教育実習

私は、高校は6月に3週間、小学校は11月に2週間、それぞれ母校で教育実習をさせていただいた。

高校では3学年の授業を担当し、部活動にも参加した。体育大会という行事もあり、生徒たちとコミュニケーションを取ることを意識しながら学ぶことができた。日本史の授業では、電子黒板をメインで使用しながら発問は板書する形で授業を構成してみた。高校生になると、1コマで進む教科書のページ数が多く、さらに教科書以外の知識も当然必要であり、1つの授業を創ることの大変さをしみじみと感じた。また、歴史の流れに沿って指導し、1コマ喋り続けるくらいの感じでいなければいけないとも教わり、知識の無さを思い知らされた。

小学校では、2年生のクラスを担当させていただいた。休み時間は児童と積極的に遊ぶようにし、クラブ活動などにも参加させていただいた。初めて授業を行う前日は、あまり眠れなかったのを今で

も覚えている。どのように授業を行えば興味を持ってくれるのか、表や絵といった視覚的な物を入れたり、試行錯誤の毎時間だった。どうやって児童たちを引きつけるかがポイントである。すべての学年の先生の授業を参観させていただいたが、授業方法にこれが正解とかではなく、児童や学級に合った取り組みが必要であることを学んだ。

今後の抱負

教壇に立てるお話をいただいている状況である。自分が児童に教えられるのか、学級をまとめられるのか、色々と考えるときりがなく、不安が募るばかりである。しかし、今まで学んできた勉強や教育現場での活動に無駄だったことは1つもないと信じ、何事にも挑戦していこうと思っている。児童と関わる上で、1つ1つの行動にしっかりと責任を持ち、児童及び先生方とコミュニケーションを取りながらたくさんのことを吸収していきたいと思う。そして、これからも夢に向かって学び続けていこうと思う。

後輩へのメッセージ

ぜひ自分の夢を諦めないでください。ガイダンスに出たり教職課程の授業を受けたり、学年が上がるに連れて忙しくなる日々です。嬉しいこともあれば、それ以上に苦勞すること、大変なことが多く、後輩の皆さんも苦しい・大変だなと思っている時期だと思います。そんな時、教職を取っている友達と声を掛け合ったりしてみてください。教育採用試験の勉強は、1人でつまずいたり心が折れそうになったときは、ぜひ一緒に勉強したり、勉強の環境を変えることも良いと思います。4年生の時期は1年間がとてもあっという間で、教育実習から教採試験まで時間が全くありません。この時期が踏ん張りどころだと思います。一緒に教員になる夢を叶えるために頑張りましょう。

■4年間の教職課程を終えて

人間学部教育人間学科教職コース 津江美咲

1. 本学での学び

本学では、中学社会科及び高等学校地理歴史・公民科の免許を取得するために教職課程を受講した。特に印象に残っている講義は、教育課程論である。教職課程の中で最も単位を取るのが大変と聞いていたが、想像以上であった。講義の最後に行った期末テストは、腕が壊れそうになったが、しっかりと対策をしていったら大丈夫なので、これから教員免許を取りたい人には頑張ってもらいたいと思う。単位修得以外にも、教育課程論は教員採用試験にもかなり出てくる範囲なので試験対策にも有効だ。

心理学の授業は、面白いだけではなく実際に自分が実践できるものがあるので、教育実習や普段の子どもとの関わりでも実践してみたいと思う。

2. 明星大学での小学校免許課程

本学の教職課程以外にも、明星大学の通信教育で小学校免許を取るために必要な科目を履修した。通信では、1つの科目につき2つのレポートを提出とスクーリングか試験を受けて1単位が認められる。大学2年生から通信を始め、3年生に上がるまで1単位しか取得できていない状況だったが、新型コロナウイルスが流行りはじめ大学3年生の時に追い込むように単位を修得した。教員採用試験の勉強もしたかったので、12月までには指定された単位を修得するように努力した。

通信は、自分が進んでやらないと全く終わらないので、通信で小学校免許を取ろうとする人には計画的に進めることをおすすめする。特に、小学校の教育実習を行うためには、一定数の単位を修得しておく必要があるため、ギリギリだととても苦労する。

また、通信で教育実習を行う人は注意してほしいことがある。東京都在住の人は、東京都の学校で教育実習を行えないので、早めに学校を見つけ内諾をもらわなければならない。単位が取れていて

も、教育実習を行うことができないと免許が取得できないので要注意だ。私の場合は、練馬区在住で近めの埼玉県所沢市の学校に電話したが、大体卒業生以外は受け入れてないと断られた。奇跡的に、知り合いの人が行っていた実習先が受け入れてくれたため、何とか実習をすることができた。

3. 小学校の移動教室の指導支援員の経験

私は、3回小学校の移動教室の指導支援員の経験をした。1回目は、滝沢先生の紹介で足立区立島根小学校の支援員として5年生の2泊3日の鋸南自然移動教室について行かせてもらった。1回目の支援員は、腕を骨折した児童を見守る仕事内容だったので、全体を見るというよりはその児童中心にして周りを見るという感じだった。その他にも、女子風呂の見守りや夜の巡回など様々な体験をした。

2回目の支援員は、大田区立東蒲小学校の6年生の2泊3日のとうぶ移動教室についていかせてもらった。1回目と違い全体を見るので、色々なクラスの児童と話すことができた。その他の仕事内容は1回目と変わらなかった。

3回目の支援員は、武蔵野市井之頭小学校の5年生のセカンドスクールについていかせてもらった。ここで大きく違うのは、セカンドスクールは2泊3日ではなく7泊8日で、民泊だったことだ。移動教室では区が所有する少年の家などに宿泊することが一般的だが、セカンドスクールでは何班かに分けて児童が宿泊した。1班大体7人から10人くらいで、男女の支援員が1人ずつ配置された。先生達は他の所に宿泊し、毎日朝と夜に巡回しに来た。なので、支援員の役割はとても大きかった気がする。移動教室ではできない貴重な体験をすることができたので、セカンドスクールに1度行ってみることをおすすめする。

しかし、児童を支援する立場で移動教室などについていくので、見た目や言動などに気を付けてほしい。セカンドスクールで、他の大学の学生がア

ルコールを飲んでしまい、教員に注意を受けていたことがある。信用を無くしてしまうと取り戻すことが大変なので、本当に気を付けてほしい。

4. 高校と小学校の教育実習

私は小学校教員志望だが、教員採用試験を受ける前に高校の教育実習に3週間行かせてもらった。高校の教育実習では、科目は世界史を担当し、ホームルームは2年生を担当した。小学校志望だったので、世界史を選択したのは一瞬やらかしたと思ったが、指導教諭が熱心に指導してくださり何とか乗り越えることができた。

高校の実習では、主に教材研究をして、授業に備えた。12回授業をして自分の中でうまくいったと思った授業は、1、2回しかなく、あとはうまくいかなかったと思う授業ばかりだった。だが、一生懸命やればそれが生徒にも先生方にも伝わると感じた。

高校の部活動はほとんど出なかった。私はもともと女子バスケットボール部だったが、一度部活動に出向いた時に生徒が上手すぎて何もアドバイスできないと思った。その分、授業準備に使うことができたので、よかったのかもしれない。

高校の教育実習は教材研究を主にしたが、小学校の教育実習は児童と関わり、児童理解を深めることに重心を置いた。実習初日に、校長先生と教頭先生の話聞く時間があつた。その時、児童理解がないと授業をやっても意味がない、ただ教えるだけになってしまうというお話を聞いた。昼休みや放課後はなるべく児童と過ごす時間を増やし、家

で授業準備や教材研究などを行った。

高校と小学校では、子どもと関わる時間が明らかに違い、高校は自分で関わりを作らないと生徒との時間がないので積極的にコミュニケーションをとることが大事だ。小学校では、児童との過ごす時間が圧倒的に多いので、そこから児童の実態を深く理解していく必要がある。教育実習では、家庭環境などあまり深く知ることはないが、担任になった時は、学校と家庭の相互の連携が必要だと深く感じた。

5. 卒業後進路について

私は残念ながら本年度の教員採用試験に落ちてしまった。そこから就職活動を始め、通信制高校の内定をもらった。だが、研修を受けるたびに、自分が通信制高校で働くビジョンが見えなくなってしまった。その時にちょうど、産休代替臨時採用の連絡があり、悩んだ結果小学校の臨時採用に挑戦することにした。この選択が正しいかどうかはわからないが、自分の就きたい仕事をとりあえずはできるので精一杯頑張ってみようと思う。

産休代替は、1年間担任を持つことができる。先輩方の実践やアドバイスなどから、自分なりに学級経営をしていきたいと思っている。中高の社会科の免許を持っているが、小学校では算数など専攻して教材研究を深めたいと思っている。

4月までの間に、教員採用試験の勉強をし、また教員採用試験を受けることになる。教員採用試験を受ける新4年生や卒業生の方々、一緒に頑張りましょう。

■4年間の教育課程を終えて

人間学部教育人間学科教職コース4年 浅野七菜

1. はじめに

教員を目指し、大正大学へ入学し、中学校社会科、高校地歴・公民の教員免許を取得しました。4年間で多くのことを学び、経験を積みました。免許を取得するまでの教職課程での授業、介護等体験、教育

実習について、記したいと思います。

2. 教職課程での学び

教職課程の学びの中で、教員になるための必要な知識や、現場での学び、実践能力を養うことがで

きたと考えています。どの授業も苦勞しましたが、1 番大変だったのは、滝沢先生の「教職課程論」でした。この授業は、講義内容も難しく理解しきれないことも多々ありました。学期末テストもかなり苦戦しました。テストがある 1 週間前から夜遅くまで学内に残り友人と協力しながら対策をしていました。しかし、この授業の内容は、教員採用試験の教職教養によく出題されるものなので、大変だったけど、学んでよかったと 4 年生になって思いました。この授業は 2 年生の春学期に履修することをお勧めします。

教職課程のなかでも大きく影響を受けたのは、TA 活動です。4 年間近隣の中学校で活動し、大学での授業だけでは学びきれないことをたくさん吸収しました。生徒への声のかけ方、タイミング、距離感など、大学で座って授業を受けているだけではわからなかった経験ができました。1 年生の時は、生徒とどう接すればいいのか、どのタイミングで声をかけていいのかわからないことだらけでした。しかし、また、週に 1 回のペースで現場の先生の授業を見ることで、授業のアイデアや授業の流れを学ぶことができました。活動を行っていた当時は、大学の 1 限が始まる時間よりも早くいかなければならないことや、普段と違うなれないことで、大変だと感じるが多かったが続けることで自信の力になったことを今感じています。

3. 教育実習

私は、公立の中学校に 3 週間お世話になりました。実習に行く前は不安と緊張で、自分なんかうまくできるのかという思いがありました。しかし終わってみると、やってよかったと心の底から思いました。

実習中は 7 時 40 分までに出勤し、おおよそ 20 時に退勤していました。担当学級、担当授業はともに 2 年生で、部活動は女子バレーボール部に参加していました。また、実習期間中に運動会があり、行事の運営にも携わることができました。

社会科の授業では、指導教諭の先生がグループワークをたくさん取り入れる先生であったため、

グループワークを行うときのコツやポイントを多く学びました。中でも、グループの人数を内容ごとに変えていることについて大きな意味があることを学びました。

教育実習を行う準備として、指導案を早めに作り指導教諭からご教授いただくことが大切だと思いました。運動会や土曜授業が実習期間中にあり、授業準備をする時間が十分に取ることが難しかったため、私は実習が始まる前に 3 回分の授業の指導案を作り、初日に添削をお願いしました。はやめはやめに準備ができ、打ち合わせも多くでき、準備に費やす時間が増えました。

教育実習中に気を付けたことが 2 点あります。1 点目は、言動です。私が授業で話したこと、とった行動、授業外で話したこと、とった行動すべてにおいて生徒はすごく細かく聞いて、見えています。いい意味でも悪い意味でも注目されます。2 点目は、生徒との距離感です。教育実習生は教員の中で生徒と 1 番年の近い先生です。そこから親しみやすさを感じえくれる生徒もいます。生徒の中には、積極的に話しかけてくれる子もいます。そこにうれしさを感じることもありますが、私は教育実習生として、学びに来ているわけであり、あくまでも生徒と先生です。その関係を絶対に崩さないように距離感にはとても注意をしました。

4. 4 月からの抱負と後輩へのメッセージ

私は 4 月から 2 つの公立中学校で非常勤講師として勤務します。特別支援学級、通常学級の教壇に立ちます。大学 4 年間で学んだことを活かし、生徒とともに成長していきたいと思えます。生徒 1 人 1 人とのコミュニケーションを大切に、生徒に寄り添い適切な支援ができる教員になれるように学び続けます。

教員を目指す後輩の皆さんに伝えたいことは、教育の現場に何かしらの形で携わることです。私自身、TA 活動をとおして、現場の先生との会話や生徒とのふれあいで学ぶことがたくさんありました。この経験があったからこそ、今の私があると思っています。

■教職大学院への進学を前に

文学部歴史学科日本史コース 4年 中野初歩

はじめに

今、本誌を目にしている皆さんの中には、「先生になりたい」という夢と「本当に教壇に立てる日は来るのだろうか」という先の見えない現実悩んでいる人がいるのではないのでしょうか。少なくとも1年前の私は、そのような気持ちを抱えながら、有益な情報はないかと本誌に掲載された先輩方の体験記を読んだことを覚えています。また、4年間の教職課程を振り返ってみると、自信を持って教員になるための勉強に取り組んでいる期間より、不安や劣等感を抱いている期間の方が圧倒的に長く、上手くいくことばかりではありませんでした。しかし、まさに運命的と感じる程の巡り合わせや多くの方々のご指導のお陰で、最終的には早稲田大学大学院教育学研究科(教職大学院)への進学を掴み取ることができました。そこで本稿が、皆さんの背中を押すきっかけになったり、少しでも役に立つことを願い、教職課程の学びを振り返るとともに私の経験から伝えられることをいくつかの項目に分けて記します。

大正大学での学びと教員採用試験に向けた勉強について

教員志望の皆さんが一番気になることは教員採用試験の対策だと思います。そこでまず初めに、教員採用試験の勉強について振り返っていきたいと思います。2年生の終わりから3年生の夏頃までの私は、日々の教職課程の授業が大切なのは理解しているけれど、採用試験ひいては実践にどのように活かせばいいのか分からず、悩んでいました。専門科目の勉強ばかりに偏り、教職教養の勉強を本格的に始めたくても、何から始めればいいのか分からず、時間ばかり過ぎていきました。とりあえず、暗記することが近道だと考え、闇雲に勉強を始めましたが、全く手ごたえを感じず、より不安が募りました。

もし、私と同じような悩みを抱えている人がい

るのならば、私の経験では、過去問の分析や教員志望者向けの雑誌を読むことが悩みの解消に繋がったのでお勧めしたいと思います。一見すると遠回りに感じる勉強ですが、結果的にはインターネットで調べるより簡単にまとまった情報を手に入れることができます。いじめ、不登校、特別支援教育、必ず押さえない法規・答申からコロナ関連問題など、日々の授業の予習・復習、教職教養の試験対策に加えて、論作文や面接試験に活かすことができます。これらの教職に関する資料は教育人間学科の資料室だけでなく、大学図書館にも置いてあります。既にご存知の方が多いかもしれませんが、特に歴史学科や日本文学科の方で、教員採用試験の情報が集めにくいと感じている方は一度先生に相談し、資料室でゆっくりと参考書等を読み比べてみることで、採用試験の勉強の良いスタートを切れると思います。

教育実習について

私は、母校である都立高校で教育実習を行いました。3年生の日本史を受け持ちました。私の指導を担当して下さった日本史の先生の授業は、面白いだけでなくとてもハイレベルな内容のため、私の在学中から日本史を得意もしくは受験科目の武器とする生徒が多い学校でした。そのため、実習が決まった時から授業のレベルを落とさないことを目標に勉強していましたが、実際に教育実習を意識し始めたのは3年生の12月上旬に行われる教育実習報告会の後からでした。

実習の2週間前に実習校と打ち合わせがあり、詳しい授業範囲が明らかになったのち、指導案やプリント作りなどの授業準備を行いました。この打ち合わせが行われる日程は実習先により若干の違いはありますが、教育実習開始の1ヶ月~2週間前が多かったと思います。本誌を目にした皆さんは実習直前に焦らないために、教育実習報告会から実習が始まるまでの5ヶ月程の期間を大切にし

て欲しいと思います。

4年生の春は想像以上に忙しく、教員採用試験の勉強、卒論、就活などを同時並行で進めなければいけません。卒論の方向性を早めに固める、早めに就活を行う、実習で受け持つ科目の基礎知識を向上させるなど、実習範囲が未定でもできることは沢山あります。長期的な計画を立てて、最高の教育実習にしてください。

また、教育実習までゆとりがある時期に本誌を読み、教育実習に向けて準備できることはないかと情報を探している方は、3年生秋学期、4年生の時期に履修する授業を極力減らせるように授業の履修計画を立てること、卒業に必要な単位だけにこだわらず、幅広く授業を履修することをお勧めします。現時点では実習と関係ないと思える雑学的な知識や経験が、急に訪れるピンチを救ってくれます。

私は教育実習で初めて教壇に立った日「じゃあ、自己紹介がてら、大学でどんなことを勉強して、どんな経験をしてきたか生徒たちに向かって3分間フリートークして」と言われました。とても急だったので焦りましたが、先生になった時に話したいなと思っていた語学研修の体験談と学科の先生に協力して頂き、打製石器を作った経験を高校と大学の学びの違いに触れながら話したところ、興味を持ってくれる生徒が沢山いました。「留学に興味があるから、中野先生の話をもう少し聞かせて欲しい」と休み時間に尋ねてきた生徒が教育実習の最終日に「もっと頑張って勉強して、本格的に留学について考える」という手紙をくれた時、過去の自分に感謝し、何となく積み重ねてきた経験の重要さに気づきました。

教育実習に行くまでは、教材研究をしっかりして、知識が多い先生が良い先生だと思う節がありました。実習を終えて、教材研究や知識の質・量があるのは最低条件であり、そのうえでどのように生徒たちに向き合い、伝えていくかが重要なのだと知りました。自分自身の経験を振り返ったり、こんな風に話したいと教壇に立つ姿を想像してみることが教育実習に向けた準備の大きな一歩にな

ると思います。

進路（教職大学院への進学）について

上に記したように、当時の自分ができる精一杯の真摯な姿勢で教育実習に向かいました。教材研究も、教科書だけでなく多くの本や大学の先生にアドバイスを頂き、研究授業を見て頂いた先生からお褒めの言葉も頂きました。しかし、コロナウイルスによる緊急事態宣言で分散登校が継続したこと、私の担当した学年が3年生ということもあり、他の実習生が15~20回ほど授業を行っていたのに対して、私が実際に教壇に立てたのは4回だけでした。誰が悪いわけでもなく、コロナ禍で実習をさせて頂けたことは本当に有難いことだと思います。しかし、一緒に実習を行った実習生が1回1回の授業ごとに成長する姿を近くで見て、私の心の中では「もし、教採に合格したら、本当にこのままで4月から先生になれるのだろうか？」と先生になりたい気持ちより、圧倒的に経験が足りないことに対する不安が芽生えてしまいました。

そんな時、私の指導をして下さった先生から「本気で先生になりたいなら、教職大学院も考えてみたらどうか？今年教職大学院を修了した先生がいるから、相談してみなさい。」というお話を頂きました。その後、教育実習を終えて、自分自身でも教職大学院について調べたうえで、教員採用試験の勉強と教職大学院入試の両方を視野に入れ、勉強することを決めました。

当時の私は、教職大学院というものがあることは知っていましたが、それは教員採用試験の勉強で覚えた用語に過ぎず、教員採用試験に落ちたら、次の年の教員採用試験を目指すしか道はないと思っていました。しかし、実際に教職大学院について調べてみたところ、学校教育の抱える課題が複雑・多様化する中で、①教員養成に特化した教育を行い、新しい学校づくりの有力な一員となる先生を育てる。②高度な理論と実践力の両方を備えた教員を育てることを掲げており、実践力の面で強い不安を抱えていた私にとってはまさに最適ともい

える学びの場でした。

大正大学から教職大学院への進学はほとんど例がないということなので、以下、教職大学院の受験日程や試験について説明していきたいと思います。教職大学院は多くの国立大学と複数の私立大学に設置されています。大学によって規模や特色も異なり、試験内容も大きく異なるので、受験を考えるならば、しっかりと調べて選ぶ必要があります。説明会に参加して校風や自分は何のために進学したいのかを明確にしておかないと、面接試験、小論文等をクリアするのは厳しい、ということの頭の片隅にいられておく必要があります。また、どれだけ成績が良くても、推薦などの制度はないため、一般受験です。内部進学や現役の先生は一般以外にも方法はありますが、大正大学から進学を考える場合、私が受験した段階ではありませんでした。私の志望した早稲田大学の教職大学院は7月17日に説明会、9月26日に一次試験、10月3日に二次試験という日程だったので、教育実習の後でもギリギリ説明会に参加することができました。

そして、試験内容は教員採用試験における教職教養と小論文に似ています。大きな違いがあるとすれば、東京都の教員採用試験の教職教養はマークシートが基本であり、小論文は2つのテーマからどちらか1つのテーマを選んで書くのに対して、早稲田大学の教職大学院の教職教養はほとんどすべて記述式の問題です。100～200字程の分量で指定された用語の説明を行う問題が半分程度占めているので、答えを選択できるだけでなく、自分の言葉で説明できるレベルまで勉強することをお勧めします。また、小論文は2つのテーマが与えられますが、教員採用試験と異なり、制限時間内に両方を書き終えなければいけません。文字の総数は教員採用試験より少し多いです。このような一次試験に受かると、二次試験が待っています。私が伝えることができる試験の内容は以上です。(一次試験については、HPに過去問として公開されています。)

皆さんへのメッセージとこれからの抱負

最後まで読んで下さり、ありがとうございました。私の経験が少しでも皆さんのお役に立てたら嬉しいです。また、このような体験記などを読むと「ちゃんと計画性を持ってやらなきゃだめだ」「まだまだ自分の頑張りは足りていない」「自分の勉強法間違ってる？すでに手遅れ？」と思う方がいるかもしれません。その気持ちがやる気の着火剤になることもあります。素直に力に変えられない時もあると思います。すでに頑張っているからこそ、深刻に考えすぎてしまう時もあります。私自身、1年前は大学院に進学するとも、本誌に執筆する側になるとも全く思っていませんでした。計画性を持つことの大切さを記しましたが、本誌の冒頭でも述べた通り、まさに運命的と言えることの連続だったのです。これから、人生の分岐点を迎える皆さんもきっと驚くほど素敵なことが沢山待っていると思います。受け身にならないこと、人との繋がりを大切にすること、最後まで精一杯頑張り続けることがチャンスを掴む鍵だと思います。

私は春から早稲田大学教職大学院に進学します。けれど、皆さんと同じ「教員志望者」であり、まだ先生になったわけではありません。一時期、学び続けることができる私の環境が恵まれすぎている、甘えだと感じてしまった時期がありました。教育実習の報告会では「私の進んだ道が本当に正しい道だったか分からない」と発表を締めくくりました。しかし、そんな悩みを吹き飛ばす程家族が応援してくれたこと、同じように教員を目指している仲間が「正しい選択だと思うよ」と言ってくれたことで救われ、吹っ切れることができました。私はこれから2年間、大学院で思いっきり学び、「私の進んだ道は本当に正しい道だった」と自信をもって言えるように、多くのことを吸収して成長するつもりです。そして、教員になることをゴールとするのではなく、生徒と学問に真摯に向き合える良い先生になります。

最後になりましたが、お忙しいなか指導を下さった先生方、教育実習を受け入れてくれた実習校の皆様、ともに学んだ仲間や最後まで支えてくれた家族に感謝いたします。今度は後輩の皆さん

んに、良い巡り合わせが訪れますように。お互いに 頑張りましょう。

2. 学びを振り返る（2）

－介護等体験－

■介護等体験を通して学んだこと

人間学部教育人間学科教育・学校経営マネジメントコース 4年 坂本龍也

私は、目黒区立大橋えのき園で5日間、都立中野特別支援学校で2日間、計7日間の体験を行った。社会福祉施設の大橋えのき園には昨年度の介護等体験でお世話になり、今年度は中野特別支援学校でお世話になった。中野特別支援学校では、小学部の1年生のクラスを担当し、自閉症傾向の6人の児童とかかわった。大橋えのき園では、様々な特性を持った20名ほどの利用者とかかわった。利用者の年齢も多様で、18歳から50代前後までと幅広かった。

介護等体験全体を通しての目標として「現場でしかわからない支援員と利用者のかかわり方を学ぶ」ということを掲げて臨んだ。この目標を掲げた理由は、普段見ることのできない施設の中に入れていただける貴重な機会であるため、障がい者支援の現場での支援員と利用者のかかわり方を学び、今後自分が障がい者とかかわる機会があった際に役立てたいと考えたからである。コロナ禍での介護等体験ということで、活動に多くの制限がかけられた中、その目標を立てた結果として、特別支援学校と社会福祉施設での介護等体験を通して、新たな学びや発見を得ることができたと感じている。特に、「障がい者支援」に対する認識の変化が大きかった。

中野特別支援学校で学んだことの中で特に紹介したいのは、支援の方法と指導の方法である。支援の方法の基本的な考え方として教えられたのは、「引き算の支援」という考え方だ。これは、児童のできないことを見つけるたびに支援を増やしてい

くような足し算ではなく、最初は支援が必要であったことも少しずつ自分でできるように支援を減らしていくという考え方である。

その考え方がよく表れている指導の様子があった。言葉をしゃべることのできない児童が「あ」と言って何かを伝えようとしても、先生は「あ、じゃわからないよ」と言って、手話やカードでの意思表示を促したのだ。一見厳しいようにも思えるこの指導だが、これを続けていくことで少しずつ成長していき、できることが増えていくのだ。

また、具体的な支援方法として、視覚支援というものがある。例えば、予定を文字だけでなく写真やイラストの描かれたマグネットも使って伝える支援、逆に余計な視覚情報をホワイトボードなどで隠すといった支援がこの視覚支援にあたる。実際に、教室の黒板にマグネットで児童の写真と今やるべき活動、次にやるべき活動というように一日の予定が貼られており、ひとつ活動を終えるごとにマグネットを外していた。

また、先生は手話をしながら具体的な指示を出していて、伝えるための工夫が施されていた。朝の運動では、かける音楽を変えてランニングから片付けに切り替えさせていて、聴覚からも支援しているように感じた。

他に気づいたこととして、先生の洞察力には驚かされた。6人中5人はしゃべることのできない児童のクラスだったのだが、児童の表情やしぐさから思考を読み取り、コミュニケーションをとっていた。授業で個別の課題をやらせているときも、ただできないのか、できるのに遊んでいるのかを見分けていたことに驚いた。先生は常に児童を見て

いて何が起きてもすぐに対応できる距離感を保っていた。朝の運動のランニングで並走していたり、「頑張れ」と声をかけながら背中を支えたりする姿からそのように感じた。中野特別支援学校での介護等体験全体を通して、障がい者支援はただ利用者を介抱するのではなく、できないことにも少しずつ挑戦させることで、できることを増やし、育てていくという形もあることを学んだ。

大橋えのき園で学んだことは、利用者ひとりひとりを理解することの重要性である。施設では、利用者ひとりひとりの特性やその度合いによって組み分けされており、それぞれに合った対応がなされていた。食事もちり方を利用者ごとに変えていて、細かいところまで配慮されていた。利用者によって、支援員やほかの利用者との相性の良さがあり、支援員はそれらを理解した上で対応していた。

利用者自身でできることは、なるべくやらせて伸ばしていくという考え方が、着替えを見学していた時に垣間見えた。ある利用者が支援員に着替えを手伝って欲しそうなそぶりを見せたのに対して、支援員が「〇〇さんが自分でできるの知ってるからね」と言って手を貸さなかったのだ。その結果、利用者は自分で着替えを終えた。また、見守りの時間中に、背中を搔いて欲しそうなそぶりを見せた利用者に対して、支援員は「やらない」と断り、甘えさせないことで自分で解決できるように促したのだ。その結果、利用者は自分の席に戻り解決した。このような支援だけでなく、利用者の要求になるべく寄り添う支援も見ることができた。

■介護等体験を通して学んだこと

はじめに

介護等体験は本来、特別支援学校へ 2 日間、社会福祉施設へ 5 日間の計 7 日間の体験を指す。しかし、昨今のコロナウイルス感染拡大防止の観点

から、今年度の社会福祉施設での体験に関しては代替措置がとられた。したがって、私自身の体験は 2 日間の特別支援学校でのもののみとなった。本稿では 2 日間の体験を通して私が何を感じ、何を学

バスからなかなか降りようとしない利用者に対して、すぐに降りそうとするのではなく、時間を置いて再度サポートを試みることや、作業が時間内に終わらなくても利用者の納得のいくところまで作業を続けさせることなど、利用者のペースや気持ちに寄り添ってスケジュールをこなすことができるように支援していた。買い物の時間では、利用者が欲しいと言っていた商品が見つからなくても、3軒の店をまわり、納得がいくまで探したことで妥協して商品を購入することができた。

7 日間の介護等体験全体を通して学んだことは、様々な特性を持っている人がいて、同じような特性を持った人達でもひとりひとりに個性があり、それぞれの個性を理解した上で支援していかなければならないということだ。これはなにも障がい者支援に限った話ではない。これから先、生きていく上で様々な人とかかわっていくだろう。そのひとりひとりに個性がある。個性を理解せずに人と接すると、人間関係のトラブルにつながりかねない。したがって、相手をよく観察して個性を理解しようすることが人間関係を構築する上で重要なことである。私は介護等体験で学んだことを活かして、これからの人生で出会う人たちと良好な関係を築いていきたい。

文学部人文学科国際文化コース 3 年 眞田青佳

から、今年度の社会福祉施設での体験に関しては代替措置がとられた。したがって、私自身の体験は 2 日間の特別支援学校でのもののみとなった。本稿では 2 日間の体験を通して私が何を感じ、何を学

んだのか述べていく。

体験内容について

私の体験先は東京都立花畑学園である。花畑学園は肢体不自由教育部門と知的障害教育部門を併置する支援学校だ。

1日目は花畑学園の概要説明を受けた後、肢体不自由教育部門中学部の学部見学をさせていただいた。生徒たちがどのように授業を受けているのかわることができたほか、児童・生徒とコミュニケーションをとることができる数少ない時間であった。また、体験学習として車椅子体験をさせていただいた。体験中には車椅子の扱い方を教わった。車椅子を操作する際はブレーキの場所を事前に確認し誤った操作をしないことや、車椅子利用者とのコミュニケーションをとる際は同じ目線までかがむことなどを意識するということが教わった中で特に印象に残っている点である。

自走用車椅子、介助用車椅子の両方を体験したが、自走用車椅子の体験で感じたことは腕の筋肉の重要性である。車椅子の重さに自分の体重も加わった重さを腕の力だけで操作するので、小さい子どもやお年寄りが手動の自走用車椅子を利用するのは難しいのではないかと思った。また、介助用車椅子の体験では、車椅子利用者への声かけの重要性を感じた。声かけもなく突然車椅子が動き出したり、段差に躓いたりすると、利用者は不安や恐怖を覚えることを身をもって知ることができた。

また、教材作成・環境整備の時間がとられていた。学内や行事で使用する装飾や授業で用いる道具などを作成したのだが、この時間を通して、自分が学生時代に何気なく使用していた教材や教室の装飾などは、当時の先生方の地道な作業の末に存在していたのだと今更ながら気付くことができた。

2日目は本来、障害者スポーツの体験学習の予定が入っていたが都合により中止となった。そのため、1日を通して教材作成・環境整備を行った。児童・生徒とのコミュニケーションはとれなかったものの、その分他の体験生とのコミュニケーションを多くとることができた。加えて、手が空いたと

きの立ち回り方を学ぶこともできた。

体験中心がけたこと

私の担当学年は知的障害教育部門中学部 2年だったが、体験期間が緊急事態宣言中だったこともあり、生徒と直接接する活動はほとんどできなかった。体験前は児童・生徒とコミュニケーションをとりつつ、障害をもつ子どもたちとの関わり方を学ぶ 2 日間にしようと思っていたが、それは非常に難しい状況でもあった。そのため、体験期間中は「気付き」というキーワードをもとに生活することを心がけた。具体的には、児童・生徒が授業を受けたり休み時間を過ごしたりしている様子と、自分自身が経験してきた学校生活とを照らし合わせ共通点や相違点を探したり、想像していた特別支援学校と実際の特別支援学校との共通点や相違点を探したりするようにした。こうすることで、実際に現場へ行くことの意味を見出したかったのかもしれない。そして、やはりこの意識によって得た気付きは大きなものであった。

例えば時間割ひとつとっても、共通点と相違点がみられる。見学させていただいた肢体不自由教育部門の英語の授業では、一般校とほとんど大差のない授業が展開されていた。もちろん肢体不自由教育部門の中でも健康状態に応じて細やかなクラス分けが行われており、私が見学したのはその一部に過ぎない。しかし、授業内に英語をちりばめながら展開されるその授業を見て、全ての授業が特別仕様になっているという認識を改めることができた。

一方で、相違点としては、一般校にはない時間割のひとつである自立活動の授業が印象的である。この授業では生徒ひとりひとりに合わせた活動が行われていた。歩行器を使って移動している生徒に会ったのだが、歩行器自体も生徒の健康状態に合わせて作られており、共有器具ではないとのことがあった。確かに廊下を歩いていると歩行器を利用している生徒に数名会ったが、どの生徒の器具も形状が異なっていた。

また、校内の様子に対してはやはり相違点を感じ

じることが多かったように思う。例えば教室のドア付近に設置されている「〇〇室」などと書かれたボードだが、ここには文字のみが記されているイメージを持つ方が多いのではないだろうか。しかし、花畑学園の場合はここにピクトグラムやその教室からイメージされるイラスト（理科室ならフラスコなど）も示されていた。このようなボードに限らず校内ではピクトグラムをよく見かけたように思える。教員の方に質問をしてみたところ、理由としては特に知的障害教育部門の児童・生徒に向けたもので、文字は認識しづらい一方、絵は認識しやすいという場合があるため、とのことだった。

この際、「良いところに気付いたね!」という言葉も頂いたほか、「他のピクトグラムについても調べてみるとおもしろい」との助言も頂いた。興味を持ったので調べてみたところピクトグラムの規格が大きく分けて 2 種類あり、個人的によく目にするのは JIS 規格だったことが判明した。文字よりも絵の方が認識しやすいということは私にとって新たな学びであったし、この体験がなければピクトグラムをわざわざ調べることもなかったと思う。そういった面でこの体験は私の知らない世界を知るきっかけになったと感じている。

これは介護等体験で花畑学園に行かなければ得

られなかったかもしれない学びであり、気づきを大切にするという意識づけに繋がった。このように、体験中の小さな心がけが大きな学びに繋がったことは明白だ。この点については今後の人生においても持ち続けたい視点である。

おわりに

今年度の介護等体験は、例年とは違ったかたちでの体験になってしまった学生が多かったのではないかと思う。私自身、社会福祉施設での体験は代替措置がとられたし、特別支援学校での体験も児童・生徒とのコミュニケーションから学ぶというよりは、見学や先生方のお話などから学んだ部分が多かった。しかしながら、事前学修を含め、障害を持つ子どもたちとの接し方を知識としては十分得ることができたのではないかと感じている。

また、介護等体験に関わる一連の学びは障害を持つ方や高齢者にしか活かさない学びではなかった。「個別化、受容、共感、傾聴」という人との関わりで意識すべき点は、誰に対しても応用できる点である。実践的な学びは少なくなってしまったものの、今後社会に出て様々な人と接するうえで今回の学びを活かせるようにしておきたい。

3. 特別講義

教職を目指す皆さんへ （「教育実習Ⅰ（教育実習事前指導）」第11回）

横浜市立中学校教諭 佐々木渚 先生

みなさんこんにちは。

5年前に、人文学科カルチュラルスタディーズコースを卒業しました、佐々木渚と申します。今日は現場のことをお伝えできればと思っています。よろしくお願い致します。

講義の流れは次の通りです。まず自己紹介と、私が今着任して5年目になりますので5年間どんなことをしてきたかと、あと、現在の学校現場についてを、ちょっとお話ししたいと思います。

その後、教育実習について。今年度、私も初めて実習生を担当させていただいたので、実習について感じたことをお話できればと思っています。

では、さっそく自己紹介に入ります。

出身は横浜市です。地元の市立中学校を出てから、そのまま県立の高校に入学し、2013年から文学部の人文学科でカルチュラルスタディーズコースに所属しました。今は、カルスタは吸収合併されてしまったようでその名前はないんですけども、学生時代はカルスタの勉強と、コースをまたいで日文の勉強と教職の勉強をしていました。いわゆる他学科聴講です。

先ほど滝沢先生からも、今は他学科聴講はやっていないという風にお聞きしたんですけど、私はそのようなかたちで免許を取りました。

学生時代はライトミュージッククラブでバンド

をやっていました。この中にもいらっしゃいますかね？時々、私の代にも（同じサークルで教職を取っている人が）何人かいたんですけども。バンドをやりつつ居酒屋でバイトをしつつ、あとは日本語学校にインターンに行ったりとか、板橋区の小学校で水泳の指導をしたりとか、そういうインターンの活動も少しやっていました。取得した免許状は、中学国語一種と高校国語一種、そして日本語教員資格の3つです。

2017年、大学4年の時の試験で採用していただいて、卒業1年目から新卒採用で5年間、教員として横浜市で仕事をしています。

それでは、初任から現在まで、主にどんな仕事をしてきたかというところをご紹介したいと思います。

横浜市は比較的、初任の年から担任を持たせていただくことが多いです。それについては私自身も、自分が学生の頃から感じていたので、1年目からきつと学級担任だろうというは何となく頭に入っていました。ですが、まさか中学2年生から始まるとは思っていませんでした。飛び込みで中2の担任からさせていただきました。

1年目は中2の担任をしつつ、中2の5クラスを教科担任として国語の授業を持ちました。その年から水泳部の主顧問を務めています。あと、体育祭の実行委員会の仕事も1年目からやっ

す。

2年目はそのまま中3にあがりまして、学級担任をしつつ、ここで実は学年のクラス数が増えたので、学年6クラスの授業を担当しました。2年目からはなんと、国語科の主任と各教科の主任が集まる教科会の主任にもなってしまう、そんなものを仕事としてやっていました。水泳部の顧問も引き続きやりつつ、部活動全体の会計担当にもなってしまうたりとか、体育祭の実行委員会も引き続きやったりとか、ちょっとずつ仕事が増えていったという感じです。

そのまま3年目になりまして、1年生に降りました。学級担任と、教科を4クラス担当しました。ここから担当の学年が7クラスになりまして、一人では持ちきれないので、学年に2人国語の先生がいて、4クラスと3クラスに分けて授業をするような形になりました。教科会の主任と水泳部の顧問を引き続き担当し、この3年目からは部活動全体の主任も務めています。部活動の在り方、活動の規約などといった、学校として部活動をどうしていくか、いうのを検討する主任として仕事をしました。この年は体育祭も副主任になり、行事の半分ほどを任せていただくようになりました。

4年目の春ですね、ここからがコロナで休校になってしまって色々バタバタしたところです。引き続き中2の学級担任と、同じく学年の教科と、この年は特別支援学級の国語科の出張授業も担当したので、週1回は特別支援学級に行って授業をしました。教科会の主任(3年目)と、水泳部の顧問(4年目)と、そして部活動全体の主任(2年目)、さらに体育祭はなんと主任になりまして、この年から体育祭の全てを取り仕切っています。

5年目の今年も、引き続き学年をあがりまして、現在は中学3年生の担任をしています。学年が7クラスなので、授業はそのうちの5クラスを担当しています。あと、今年は教育実習生の担当をし

たり、水泳部の顧問、部活動全体の主任、そして体育祭も引き続き主任として、務めています。なかなか5年間でいろんな仕事をさせていただいたなあという感じです。

ここからは、私がやってきた様々な業務についての詳しいお話をしていきたいと思います。担任業務と、教科担任としての業務、そして部活動についてと、あとその他学校で行う分掌についてのお話をしたいと思います。

一つ目は**担任指導**の魅力ですね。やはり学校の先生が塾の先生と違うのは担任指導があること。教科の指導だけではなくこういうところがあるっていうのが大きいかなあと思っています。実は、私は4年生の時は就職活動もしていて、教育実習へ行く前に、塾の講師の内定をいただいております。採用試験が終わってから、どっちにしようかなあというのを考えたとき、初めはやはり教科の指導がしたかったので、塾で十分かなあという気持ちもありました。実習に行った中で、この担任指導の魅力というか、学校にしかないところがあるなあということに気づき、学校の先生の道を選ぶ大きな決断になりました。

担任指導の魅力は、やっぱり「生徒の人となりを作る」という部分が一番じゃないかなあ、と私は感じています。その人となりを作る担任業務は大きく四つあると私は考えています。一つ目は、学活や行事、生活の指導です。二つ目は昨年度から「特別の教科」ということで教科化された道徳の授業です。これも担任の大きな仕事になっています。そして三つ目は進路指導、四つ目が学級通信とか日誌とか、担任の先生ならではのお仕事ですね。

私は自分の学級で、「好きなものをたくさん作る」ということと「好きなものを好きといえる強さをもつ」というのをモットーにしています。この三

年間も、各学級や授業でこの話をたくさんしてきました。好きなものがたくさんあると、それが心の拠りどころになります。日頃も、明るい話題が教室に増えるなあ、というのが一つありまして、そういう好きな話題とか明るい話題でつながると、結束力が、いいつながりになるんですね。

でも、子どもってどうしても、悪口であるとか「あれよくないよね」「私もそう思う」っていう、マイナスの結束感でつながることも多々あって。これがいじめの原因になったりもします。ただ、それは本当に脆いつながりでしかないので、そういうものじゃなくて、何か好きなものどうし明るい話題でつながろうよ、っていうのをずっとモットーにしています。

私自身も、ずっといろんな所でこの手の話をしています。好きなバンドの話であるとか、ドラマの話であるとかアニメの話であるとか。そういうのをいろんな所で話すんですね。そうすると子ども達も「私もそれ見ました」とか「先生これ好きなんですか?」とか「みんなテレビに出ていましたよね」とかっていうかたちで結構話をしてくれたりするんです。そういうきっかけにもなるので、このモットーを大事にしています。

あとは、「その好きなものを好きだといえる強さをもつ」ことも大事ななあと思っています。よく子どもを見てみると、やっぱり自尊心が低いというか「好きなものがない」とか「分からない」っていう子も結構いるんです。でも、「にわかとか歴が浅いとか、全然そういうの関係ないんだよ」という話とか、「これが好きって胸張って言えるようにしてほしいんだよね」という話とか、あとはそれを好きだっていう自分を好きになってほしいっていう話とかをして、少しずつ自尊心を育てていきます。

例えば「ファンとして恥じないように生きていくにはどうしたらいいかな」みたいな話をすると、

私はこれが好きで、その好きなものをより高めていくために自分もよくしていこうっていう風なことを考えてくれる子が出てきてくれます。なので、こういうことをよくモットーとして、子どもには語っています。

次に、**学活・行事**の指導ですね。みなさんも自分が中高の時に、班決めとか係決めとか委員決めとかそういうのをよくやってきたと思います。修学旅行・体育祭・合唱コンクールとか、学校には行事がいっぱいあって、やっぱりそれをうまく回していくっていうのが担任の大きな仕事かなあ、と思っています。

リーダーの育成については、そういう素質のある子をしっかり見つけ出して、その素質のある子がもっているものをしっかり活かせるような空気を作るっていうことが、担任としてすごく重要だと考えているので、これを大事に日頃の学活等を行なっています。

ただ、リーダーを育てるのはもちろん大事なんですけど、そのフォロワーの育成が結構重要ですね。やっぱり全員がリーダーじゃないし、むしろそうやってリーダーを支える側の方が向いているっていう生徒も多くいるので、そういう子たちを育てたりとか、周りを大人にしていくっていうのも意識しながら、普段の学活や行事の指導をしています。

集団意識というところでは色々、様々な考えがあると思うんですけど、私は中学の一クラスっていうのは別に仲良しこよしではなくていいと思っています。個で良いと思うんです、一人で。けれど、やっぱり世の中、社会は集団とか組織とかでまわっているんで、個を尊重したいけれども、どうしてもその組織の一人として動かなきゃいけない場面も多々あって。それは学校現場も同じなので、そういう意識を子どもたちにもよく語っています。無理に仲良しこよしでお手々つないで仲良くして

ってことはしなくていいよ、と。でも、例えば行事の時であるとか、クラスで何かをやるって決まった時、そこで一匹狼でいるのは違うから、そういう時にどういう立ち振る舞いをしたらいいんだろうね、という話をしながら、学活や行事を進めています。

これ（スライド）は、修学旅行に行く前の写真（中 2）で、彼はクラスの修学旅行実行委員の一人でした。どうやってクラスみんなに修学旅行の目的を伝える？って話を事前にしたとき、「じゃあ自分がこれを書いて、これを話して、こういう風にみんなに伝えときます」っていうのをこの子は考えてやってくれました。

じゃあ、次は「**道徳**」ですね。今は週一回で道徳の授業をやっています。きっとみなさんも、教育実習に行かれた先で一回は道徳の授業をすることになるとと思いますので、ぜひ頭の中に入れておいていただきたいです。

方法は様々で、担任が必ずずっとやる場合もあるし、学校とか学年によっては担任シャッフルをして、いろんなクラスでいろんな担任がいろんな道徳を実施するっていうのもあります。

私がモットーとしているのは、つまらない授業にしないってことですね。そして私は国語科なので、どうしても、読み物系の教材は国語の授業に寄ってしまうなあ、というのが、自分の課題としてあります。教科化してから道徳のテキストが配られるようになったので。なので、その辺に気をつけながらやっています。

あとは、道徳の授業って、みなさんも学生時代に「つまらないなあ」とか「綺麗事だなあ」って思いながら聞いていた経験とかあるんじゃないかなあと思うんですけど。なんとかそうならないように、子どもに問題提起をして疑問を投げかけたり、綺麗事しか言えない空気を作らないようにし

たりしています。わざと、発言じゃなくてノートに意見を書かせて。そうすると、発言では言えない子でも「こういう答えを求められているのは分かるけど、でもこうじゃない？」みたいなことを、結構書いてくれたりします。それを考えるのが道徳の良いところかなあ、と思いながら授業をしています。私は子どものノートにコメントをつけるのが好きなので、ノートに意見を書かせて、毎週それを回収して、全部にコメントをつけて返すっていうようなやり方で普段やっています。

これは板書の例ですね（スライド）。私が以前やった道徳の授業の板書なんですけれども。これは『席替え』という教材で、「くじ引きだから公平なんだけど……」とか、「席替えやり直したいとか言っている」とか、よくあるパターンのものでしたんですけど。これで実際にロールプレイングをして、班の中で主人公・席を譲る人・譲ってほしい人の役をそれぞれ生徒に体験させました。こんなのをやってもらいながら、この場合どうしたらいいんだろうね、というのを考えたりした回でした。ちょうどこの時はクラスで席替えの問題が起きたばかりだったので、その辺も掘り起こしながら授業をしました。

あと、これも『班での出来事』というやつですね（スライド）。今までの、遠足に行った後の反省を踏まえて、班をどうやってうまくやったらいいかなっていうのを、考えさせたりとかして、授業を展開しています。

三つ目は、**進路指導**です。今、私は中学3年生の担任をしていて、教員経験の中で二度目の進路を迎えています。今週、昨日もちょうど進路面談の予備面談みたいなものがあって。今週の月曜火曜が期末試験だったんですね。なので、それを踏まえて「やっぱりちょっとこうだと思うんです」とか「テストの結果があまりよくなかったので」

とかっていう子たちと、少し事前の面談をしたりしていました。

最善の道とともに考えるっていうのが、この進路指導の一番大事なところで。公立に行くのが絶対にいいとか、いわゆる私立は滑り止めてっていうのも、今はほとんどなくなっているなあ、っていうのが最近の実感としてあります。なので、その子自身に本当に合う進路先を、私立公立ともに一緒に考えていくというのが、この担任の進路指導の醍醐味かなあとと思っています。

いわゆるサポート校とよばれる学校も、今は結構充実しているの、最近学校にあまり通えていない子たちとか、勉強があまり追いついていない子とかも、高校入ってから苦労しないように、自分がやりたいこと学びたいことを学べるように、「こういう風にしていったらどう？」とか提案して、そういうのも一緒に考えたりとか。あとは家庭事情ですね、やっぱり奨学金、学費の問題とかも結構あるので、そんなのも一緒に保護者の方と連携しながら指導をしているところです。

その他ですね。担任といえばやっぱり**学級通信**とか、そういうところがちょっと個性でるところかなあと思うんですけど。ここ2年ぐらいはやっぱり、コロナの影響で行事に保護者の方が入れなかったり、学校に保護者の方が来る、懇談会をするとかってというのが結構無くなってしまっていて。私は初任の頃から学級通信をなんとか出しているんですけども、この2年間は特に、家庭に学校の様子を伝えるっていう意味合いで、学校生活の写真をたくさん載せながら出すようにしています。

あとは、あまりこれは生徒は気づいていないようなんですけど、日頃のちょっとした出来事ですか、何気ない一言とか、あとはみんなが見ているわけではないけれど、クラスで陰ながら努力をしている子の様子とか、そういうのをなるべく記

事にするようにして。そうすると、クラス内で知らなかったことを周りが知るし、生徒自身も「あ、これやってよかったんだな」とか「言ってよかったんだな」という自信に繋がるんですよね。なので、そういうことがあったらなるべく早く形にして、生徒の中で振り返りができるようにっていう意味で学級通信を作っています。

これ(スライド)は今年の学級通信なんですけれど。黒板に、私が「言葉と物の忝意性」という話をして、「別に猫は猫って名前じゃなくていいんだよ」みたいな例を出した時に猫の顔を描いたんですね。そしたらなんか、あれよあれよという間にいろんな生徒が体を付け足し、顔を付け足し、ふき出しを付け足し、なんか色々してくれて。それを子どもたちが「かわいいから残したい」と言い出し、黒板に書いたので消さなきゃいけないとなって、じゃあちょっといい感じに手直しをして学級通信の飾りにしよう、ということで、今この「にゃー」と呼ばれている子が飾りになっているんですね。それがさらに、今年はこの学級旗のデザインにも採用されまして(写真)、そんな感じで学級通信にたまたま載ったイラストが、子どもたちのなかでも繋がって行って学級旗にもなっている、というようなところでやっています。

あとは**学級日誌**ですね。これも子どもたちの気持ちとか、「誰がどんなこと思っているのかな」というのを知るツールとしてとてもよくて。あとは、今うちのクラスでは絵しりとりが続いています。それをやることによって、みんな誰がどんなことを書いたのかっていうのをよく見るようになったし、「あいつ意外と絵がうまい」とか「これ面白い」というので、また違う話題に繋がっていったりとかするので、なかなか面白いなと思っています。

これなんかは一昨年年(写真)。2年前、1年生を担当していた時に、朝の時間に私が毎日小さなホワイトボードに、今日は何の日っていうのを

描くっていうのを1年間やりました。これも本当にただの話題づくりで特に深い意味はないんですけど、それを描くことによって、なんかこうその日の話題になったり、「お肉食べたいね」とか「今日の昼ごはんカレーかなあ」とかそういう話題になったりとか。他の教科の先生が、クラスに来た時にコメントを残してくれたりとかもして、そういう繋がりも、結構生徒との話題づくりになっているかなあとと思います。こんなのがやっぱり、担任をやっている中での醍醐味というか、こういうちょっとしたことを続けていくのが大事なのかなあとという風に思っています。

これ(スライド)は初任の時の**学級旗**ですね。初めて着任した時なので、大学卒業して半年ぐらい。9月とか10月とか、卒業から半年経ったぐらいの時に、てんやわんやしながらやったやつですね。これ(写真)は昨年度ですね。去年の三学期に、クラスの子たちが「このクラスとても良かった」と、「何か記念に残したいんだ」と言ってくれて、「じゃあちょっとなんか寄せ書きでも作れば？」っていう話をしたら、一人一人が全員にメッセージを書くというようなことをやまして。何人かが中心になって全員分のデザインを考えてくれて、全員のメッセージを書いて、私がそれを製本して。そしたら、終業式の日にはちゃんと私の分まで準備してくれています。

これらはもちろん子どもたちの成長もそうですが、日頃1年間私がやってきたことが、こういうかたちになって返ってきたことはすごく成果として嬉しかったですし、子どもも成長しているんだなあ、というのが感じられた瞬間でした。こんなのがやっぱり学級担任としての魅力・醍醐味かなあと思っています。

では、**教科指導**についてですね。今回、私は国語科なのでちょっと国語科寄りの話になってしま

いますが。

中学の先生としてはやっぱり「学びの入口に」というのが大きなテーマかなと私は考えています。国語の先生として大事にしているのは、言語感覚を磨いてほしいというのが一つ、あとは教養を身につけるっていうのが一つ、そしてやっぱり伝えたいことを正しく自分の意図通りに伝えられるようになってというのが一つ。これらを主にテーマとしながら授業をしています。そのためにはやっぱり生徒に興味を持ってもらわないといけないので、こういう話題だったら興味を持ってくれるかなあとか、どういう風な伝え方をしたら子どもの中にストンと落ちていくかなあというのを考えながら、日頃授業を作っています。

この5年間での実践例がありますので、それをいくつか紹介したいと思います。主によくやっているのが、単元に合わせた廊下の掲示と、あとは今、学校図書館の**司書さん**がいろんな企画を提案してくださるので、その方と一緒に、各行事に合わせた展示をしたり、読書週間に廊下に小さい本棚を持ってきて、そこに特集した本を載せた出張本棚を作ったり、そんなのをやっています。

あとは**百人一首大会**もやっているのですが、その準備や(写真)、古文で『扇的』をやった時には、ちょうど廊下の端から端までが六十間(けん)だったので、これぐらいの距離なんだよっていうのを表現するために、扇的を本当に廊下の端の壁に括り付けて、休み時間に廊下の端に立ってもらってその距離を体感させたりということをしています。

これは短歌の授業をやった時の実践例で(写真)。私、すごく短歌が好きなんです。なので、オススメの本を司書さんに買っていただいて図書館に入れていただいたりとか、『ダ・ヴィンチ』なんかも自分の私物なんですけど、こういうのを廊下に掲示して紹介して授業の導入にしたりとかしてい

ました。

横浜市は光村図書の教科書を使っていて、当時は「新しい短歌のために」という単元で歌人の馬場さんが随筆を書いていたんですね。なので、その馬場さんの最新の作品をこんな感じで拡大して掲示したり（写真）、あとは栗木さんとか俵万智さんとか穂村弘さんなんていうのも、『国語便覧』とかに結構お名前が載っていますので、「教科書に載っていた人たちだよ」って紹介したり。

あとは修学旅行に向けて、ちょっと後でまた修学旅行についてはお話するんですけど、今年は京都に行く予定でしたので、「京都が舞台の作品を集めて下さい」という風に司書さんをお願いしました。そしたら、聖地巡礼マップまで作ってくださいって。ここがこの作品の舞台になったとか、この場面がこんな風に描かれているっていうのを、地図で作ってくださいました。

あとは、先生方のオススメ本なんかも司書さんがアンケートを取ってくださいって、それを紹介として廊下に掲示したりしています。

あとはそうですね、これ（スライド）は百人一首です。覚えよう！ということで、廊下に百首すべて掲示しました。大変でした、十首ずつ全部拡大して。端まで全部あるのがそうなんです（写真）。覚え方のポイントや、一字決まり二字決まりなどを全部線で引いて掲示しました。これ、結構廊下に立ち止まって生徒たちも読んでくれたりとか、「これあだよね、こうだよね」と言いながら見てくれたりもしたので、なかなか効果のあった掲示だなあと思っています。

あとはこんな感じで（写真）、話題の本の紹介ですね。『クイズノック』とかは YouTube やバラエティ番組などで子どもたちも結構知っているのですが、そういうのを私からどんどん司書さんにリクエストをして本を入れて頂いたり。「こんな入ってるから読んでみなよ」という感じで、図書館ともコ

ラボしたりとかしています。

じゃあ、ちょっと板書の紹介ということで。実習に行ったところで皆さんも板書を書くので、今、板書の練習をしている方も多々いると思うんですけど、私はこんな感じで板書をしています。

これ（スライド）はついこの間やった『奥の細道』の板書ですね。基本的には、タイトルと目標を掲示して、なるべく一時間一枚で終わるように書くようにしています。色々な生徒がいますので、色はとにかく二色におさめるようにしています。その代わりに波線引いたり、二重線を引いたり四角で囲ったりして、工夫しています。

あとは、この『奥の細道』なんかはやっぱり歴史のことを分からないといけないということで、左側には分かりやすく義経と頼朝の話を書いて、「だからこうなってるんだね」と解説したり。ちょっと、社会科の先生に怒られそうな日本地図が上にあって恥ずかしいんですけど（笑）、『扇の的』がこの辺だったでしょとか、「社会で壇ノ浦やったでしょ」とか、「音楽でも勸進帳のやつ見たでしょ」とか言いながらつなげていって、「それで平泉まで逃げてきたんだよね」「それを見た芭蕉がこんな風感じたんだね」というような形でまとめていきました。

こういう解説をしてあげると、古文が苦手な子でも「なんか歴史で聞いたな」とか「そういえば音楽でも笛のやつ見たな」とかっていうところで、理解に繋がっていくので、なるべくそういうところは繋げられるように、他教科の先生からも情報を仕入れて授業をしています。

これ（スライド）は詩の授業ですね。これもやっぱり記号と線と、工夫して二色で収まるように板書を作っています。こちらは私のノート（写真）なんですけど、子どもに配るプリントに自分で書きこんでみて、書きこみづらかったらプリントを

修正したり、書きながら「こうやって展開してこうかな」「ここで何を話そうかな」と考えながら自分でノートを作っています。

ノートの上半分に板書計画ですね。こんな風に板書を書くっていうのと、板書にはしないけど喋りたいなあという内容をノートの下にまとめて、大体 50 分でこれくらい、最後には次回の予告をしてという感じで日頃の授業を計画しています。

指導案というところまではいかないんですけども、ここでこの話をしておきたいとか、ここでこれ言っておきたいっていうのはノートに全部留めておいて、授業中話せるように準備をしています。教科についてはそんな感じです。

あともう一つ、スライドは無いんですけど、**定期テスト**と**漢字テスト**も、今色々考えながらやっています。漢字テストはいま週 1 回のペースで実施してまして、これは子どもたちの学習力の定着や、継続して学習するというのを身につかせるためにやっています。満点をとった生徒の、名前を掲載したプリントを毎週配布しています。プリント作成は相方の先生がやってくださっているんですけど、そこに名前が載るっていうのが子どもたちにとっては一つ大きなモチベーションになっていて、「あのクラス、今回名前がすごく多かった」「今回、自分たちの名前は少なかったね」とか言いながら、「次頑張ろう」という感じで漢字テストをやっていますね。

定期テストも定着度をはかるというところで。もしかしたら実習行った際に、それこそ 1 学期の中間テストとかと被る方も、時期的にいるんじゃないかなと思います。そういう時はぜひ、その先生がどういう意図で、どんな問題を作っているのかっていうのをちょっと聞いてみてください。その後の授業研究・教材研究にすごく役立つんじゃないかなと思います。私もこの 5 年間、色々作ってきましたけれど、まだまだ改良の余地があるな

あと思いながらやっています。

じゃあ**部活動指導**についてですね。部活動についてはここ数年で結構色々大きく動きがあって、働き方改革もそうですし、支援員さんと呼ぶとか、あとは休養日を設けるとか。そんなことも結構大きく出ています。

私は水泳部を 5 年間担当しています。なぜ水泳部かっていうと、私は水泳経験がありまして。大学 1・2 年生の時にはスポーツクラブでコーチのアルバイトもしていました。大学 4 年の時には、小学校で支援員とかサポートで水泳の指導をしたりとかもしています。

部活動については私も、いろいろ思うところがあって。実をいうと部活動自体、そんなにというか。自分が学生の時はそんなに、そんなにというか、まあ水泳はやっていたんですけど、クラブチームでやっていたし、部に所属してとことんやり込んだっていう人でもないし。高校大学はバンドをやっていたので、本当に楽しく気ままにやっていたんですね。だけど、中学の部活動っていうのはやっぱり運動部がメインで。若手教師は運動部を任されることが多いっていうのも状況として知っていたので、試験に合格した時に、教師を選ぶか内定先の塾講師を選ぶかで、最後まで悩んだのは部活動でした。塾の講師では部活動の指導がないので、学校の教師になったら部活動指導があるっていうのがずっとネックで。私は水泳以外の運動は全く全然できないので、もし水泳部以外だったらどうしようかなとか、やったことないスポーツを教えるのにまた勉強しないといけないのかなあとか、あとはまあそうですね、私は運動音痴なので、子どもから「そんな下手くそなヤツに教えられても」って思われたらどうしようとか、そんなのも色々悩んでいました。

横浜市は中学校が全部で 140 校近くあるんです

けれど、部活動として水泳部があるのは 30 数校か 20 数校しかなくて。そんな確率で水泳部を持てるのかっていうのもあったので、なかなか緊張だったんですけど、運よく水泳部のある学校に採用していただいて。というか、水泳部で採用されたのか、分かりませんが。体育科以外の教員で、なおかつ女性で、水泳の指導ができるっていうのは、なんか市内には片手で数えられる程度の人数しかいないようなので、なかなかレアってことで採用してもらえたかなって思うところはあるんですけど。運良く水泳部を 5 年間担当して、楽しくやっています。

私は、経験のある部を任せていただいたので、その選手経験を基に指導ができていますが、やっぱり顧問をする部活動は選べません、基本的には。なので、私の勤務校でも、現在バスケ部を持っていらっしゃる先生は、本当にバスケ未経験の方だったり。運動部にはそういう方がいて、それが結構、働く中でも苦勞になっていたりとか、色々ありますね。やっぱり正課外というところもあって。実習に行かれる学生さん達であれば、色々ニュースとかも見てると思うんですけど。土日に練習試合とか大会とかに行かなきゃいけないとか、結構色々あります。なので、やっぱりそこが辛くなってしまう人も中にはいます。

今、一応いろんな支援員さん・指導員を配置するとか、休養日を設けるとかっていうかたちで、働き方改革もできているので、少しずつですけど、そういう働き方に関する部分は改善されているのかなあという実感はあります。

横浜市はここ数年、部活動指導に対して支払われる手当の金額が上がっていて、10 年前と比べると結構ちゃんとその部活動の時間にお金が出るようになりました。その辺も割と、各自治体で昔より変わってきているんじゃないかなと思います。

なので、やっぱり折り合いをつけてやっていか

ななきゃいけないのかなというのが正直な気持ちです。正課外といえど、大事な教育活動の一つであることには変わりはなく、その中で成長していく子もいるし、学力には自信ないけれどそこで力が発揮できるっていう子もやっぱりいるので、そこで育てるっていうことも大事なんだなあっていうのはこの 5 年間ですごく感じています。

これ（スライド）は今年の水泳部の写真です。なかなか頑張ってやっています。ちょっとコロナの影響でこの 2 年間は本当に活動が色々制限されてしまって、不遇の 2 年間なんですけれども。まあなんとか、そこでも色々やったりですとか、これはちょうど 2 年前に卒業した子たちが、水泳部一同ってことで、卒業式の日、顧問の私へわざわざ色紙をくれました。この子たちは「3 年間先生でよかったです」っていうのをすごく言ってくれたりとか、卒業してからも夏に差し入れを持って訪問にきてくれたりとか、そんな風に関わりを持っています。なので、私の指導が彼らの中にずっと残っていったんだなあと思うと、ちょっと嬉しい気持ちもありつつ。ただ、やっぱり色々忙しかったり、大変だったりすることに変わらないので、部活動に関しては自分なりに色々折り合いをつけてやっていかなきゃいけないなという気持ちが大きいですね。

では**分掌**の業務ですね。学校の先生にはいろんな仕事がありまして、今紹介した担任・部活動・教科以外に、それぞれ校内で仕事を分担してやります。私の場合は、体育祭の実行委員と部活動全体の取りまとめが主な仕事です。さらにもう一つ**学習指導部**というところに所属をしていて、学習に関する様々な業務、細かいところを担っています。例えばですね、大きいのは道徳の指導についてとか図書館指導についてです。どうやって道徳の授業を運営していくとか、どの教科書にしま

すか？とか、そんなのを部内の先生たちで相談します。

また、この2年では**GIGA スクール構想**もあったので、横浜市の中学校でも **iPad・Chromebook** が支給されました。その活用方法を検討したり、校内ルールを取り決めたりするのも学習指導部で行ないました。また、ここ2年の学習指導部の大きい仕事は、やっぱり休校中の学習課題の検討でしたね。こんな時にどうやって学習を途絶えさせないか、どうやって保障するか。課題をただ出すだけ、やらせっぱなしもよくないので、この辺りを学習指導部としてはよく考えました。

その iPad とか Chromebook の活用法の検討については、やっぱり職員自身、不慣れな人が多かったので、支援員を招いて研修会を実施したり、実践例を職員間で共有したり、得意な人がどんどん授業とかで活用して行ってやっていくとか、っていうことを進めました。あとはルールの整備とかもしなくちゃいけなかったんで、授業で使う時にはこうするか、子どもたちが使う時にはこうするとかっていうのも、この指導部の中で検討をしていきました。

子どもはやっぱり、やっぱりというか慣れてる子が多いので、結構渡したら何でもできちゃう。さらに、識字に難があった子でもパソコンだったらレポートが書けるっていうことが結構あって。各教科のレポートですとか、行事の振り返りとかっていうのを、パソコンでも手書きでもいいよっていうかたちにしたら、普段全然書けなくて困っていた子が、すごく完璧なレポートを Word なりなんなりで作ってきて、提出してくれたりとかしています。なので、この辺りについては今後も、学習指導部としては活用の方向を検討していきたいよねというのを話しています。

そして**休校中の課題**ですね。ネット環境を活用したのもそうですし、与えるだけにならないっ

ていうのは、大きな問題としてこちらの考えることとなりました。きっとみなさん来年実習に行かれる時も、もしかしたらこういう事態に再びなってもおかしくないですし、それこそあったのは、家族が感染したとか本人が感染したとかで、2週間自宅待機になりました、じゃあその2週間分の学習支援は？ っていう時に、その個別の対応をどうするか。そんなようなことを結構、指導部の中ですごく話し合いをしまして。横浜市は今**ロイロノート**っていうアプリを使うようになっていまして、それでやり取りをしたり、板書の写真を撮ってアップして送るとか、プリントも PDF にして送るとか、そんなのを実施しました。

あとはそれ以外にも、配慮や支援が必要な生徒の対応っていうところで。識字に難があるとか、特別支援校に行くほどではないんだけど、みたいな子とか。結構グレーな子がクラスには一定数いるので、そういう子たちにどうやって対応していくかを相談したり研修会をしたりとか。あとはそもそも「学校で学ぶってどういうことなんだろうね」とか「学校がしなきゃいけないことってなんだろうね」というのを、この休校期間中はすごく考えさせられました。ちょっと答えが出ない部分も多いんですけども。私の勤務校では、その ICT の活用を促進してそこでうまくやっていけるようにいくとか、学校に来れない子がそうやって繋がれるように、とかをなんとかやるようにしています。

そして**体育祭**ですね。私は、今年・去年と、体育祭の主任を務めさせていただいて。コロナ禍での体育祭ということで色々大変だったんですけど、競技をリニューアルして、例年の内容を踏襲するだけにならないようにしました。また、勤務校は組体操をずっと伝統としてやっていて。ただ、声としては「もうそろそろやめた方がいいんじゃない

ないか」っていう声があがっていたんです。危険なので。けれど、「じゃあそれを誰が音頭取ってやるんだ」っていうところで、コロナもあったので、それに踏み切ったりしました。あとはどうやって実施するかですね、この2年間は。

コロナ禍で密集密接にならないように、やめる訳じゃなくて、やるためにどうしたらいいかっていう部分を、今年の休校期間から非常に色々考えました。本校では、例年午後3時ぐらいまでやっていた内容を、種目を精選して、午前中で終わるようにしたり、演技種目の中止を判断したりしました。でも、それもやっぱり色々な声があったので、「こういう理由なんです」というのを職員の皆さんにプレゼンしたり、「感染症対策はこういう風に気を付けてます」と説明したり。対策としては保護者の方を入れないで生徒の座席を広くとったり、各種目の入退場を細かくして、そこで消毒をしたりとか。本当に色々考えて、何とかこの2年の体育祭を実施しました。

今年度なんかは、グラウンドに、新校舎が建ちまして。つまり、使用できるグラウンドの大きさが変わってしまったんですね。今まで通りの100m走もできないってなって。コロナ対策に加えて、競技を新しく考えることになりました。80m走に変更するにしても、トラックが小さくなっちゃったからカーブが急だよとか、直線で80mをしつかり確保できるのかとか、そんなのをずっと検討したりとかして、何とか実施しました。

しかも、本来は9月に実施予定だったのが、夏休み明けから分散登校になってしまったので、9月の行事が全くできず。予定が全部10月に流れて延期したので、予行練習・学年練習の計画も全部日程を組み直したり、雨が降って延期したりなんざりでした。そんなのも、学校の先生の仕事としてあります。

あと**部活動顧問会**としての仕事。私は水泳部の

顧問をしているんですけども、顧問会としては各顧問の長として、主任として、ここ数年色々やらせてもらっています。大きいのが、やっぱりコロナ禍での活動方針の検討ですね。また、いま動いているのは、**全員入部制から希望入部制への移行**です。本校は今、生徒全員入部制をとっているんですけど、そこを地域の事情とか今の子どもの実態に合わせて、廃止しませんかっていう方向に働きかけています。今ちょうど最終段階までできて、来年度から希望入部制になるといいなあ、なんていうところなんです。これもやっぱり、ルール作りですとか、変えなきゃいけないところとかも多々あるので、その辺を一個一個、検討しては提案し、検討しては提案し、みたいにやってきました。

ここまでお話したあたりの分掌の仕事について、私は実習に行くまで、というか採用されるまで、すごく不明瞭でした。だいたい紹介されるのって教科指導と担任と部活動指導のことなので。

なので、実習に行った際には、教科指導や部活動指導でいっぱいいっぱいだとは思んですけど、どの先生がどんな仕事してるのかなあていうのを少しでも見ておけると、自分がその後現場で働くことになった時に、見通しが持てるように思います。

ついでに、臨時休業から現在までの2年間の流れを、簡単にご説明したいと思います。皆さんはコロナ禍を経た学校に実習に行ったり、コロナ禍を経て色々状況が変わって、なかなか例年通りになっていない中で採用されたりすることになっていくと思うので、そこをちょっと、頭に入れておけるといいのかなあと思います。

2020年3月ですね。突然、**臨時休業**が始まって、もちろん学生の皆さんもすごく大変だったと思います。嫌でもこうやってZoomなどでの授業

が目立っていて、ご苦労されていると思います。臨時休校中でも、「行事のこと考えなきゃいけないね」ということで、職員全員での出勤ができない中で Slack っていうアプリを使ったり、チャットツールとかを使って「体育祭どうする？」っていう話を相談したり考えたり。

6月から分散登校が始まって7月から全体登校が始まって、でもやっぱりこの時点で「**宿泊行事**はできないね」ってなったので、去年の3年生もそうですし、当時担任していた2年生の**自然教室**っていうのも中止になりました。夏休みが短縮して、体育祭が延期になり、その後縮小で実施。**合唱コンクール**はもちろん中止になりました。

12月から再び流行の兆しとなって、私の学校では2年生が**職業体験**を毎年やっているんですけど、それも中止になりました。

今年、今担任している3年生は5月に**修学旅行**に行く予定だったんですけど、もちろん延期になって。同じく5月あたりに「今年も体育祭は縮小にしましょう」というのが決まりました。大体6月ぐらいからワクチンの接種が始まって、7月からは、部活動も徐々に再開し始めたんですけど。結局、夏にまた感染拡大っていうことで、横浜市は9月を分散登校としました。その、5月から延期した修学旅行も、本当は8月末に行く予定をしていました。2泊3日だったのを1泊2日に減らして、夏休みが明けたところで行こうかって言っていたんですけど、それもやっぱり分散登校の関係でできなくなってしまって、残念ながら中止になりました。

しかも、9月は分散もそうですけれど、授業数を確保しなきゃいけないということで。本校は普段は50分授業なんですけど、50分で6時間授業のところを40分で7時間授業に変更して、**特別時程**というので授業を実施しました。分散だったので、隔日で生徒をAグループBグループに分け

て、月曜日はA、火曜日はB、水曜日はA、みたいな感じでやりました。なので、すごく大変でした。同じ時間割を2回やらなきゃいけないし、普段50分で計画している授業を40分にしなきゃいけないし、っていうのでへろへろになりながらやって。さらに、9月にできなかった行事が全部10月にきて。10月に一斉登校が再開したんですけど、担任している3年生は10月1日に英検の実施があって、そのあとの4日に中間テストがあって、7日にVR修学旅行があって、翌の13日から進路面談を18日までやり。20日に体育祭の予行をし、22日に体育祭の予定が雨で延期になりさらに延期になり、27日に体育祭をようやく実施し、29日に文化祭をやり。怒涛の10月でしたね。

結構どこの学校さんも、こんな感じで行事が変更になったりとか、中止になっていたりすると思います。皆さんが体験してきた中高の学生時代とはやっぱり違う学校現場になっていますし、それを今度は皆さんが指導する場、教える場として行かなきゃいけない。そのことを頭に入れておいて、授業もそうだし学活もそうだし、子どもたちと「じゃあこの中でどうやっていく？」っていう話ができるようにならないといけない、と思います。

現在は、というところなんですけど、そのさっき言った**コロナ禍**だったということで、主にこんなことをやっています。手洗いやうがいの励行、校内の消毒作業、マスク着用の指導、あとは食事の時間に気を配ると（スライドに）書きましたけれども、今はやっぱり対面で食事はできませんので、「**黙食**」といわれるやつをやって、その時に喋っている子どもがいたら、注意しなきゃいけないです。体育の後とかはやっぱりみんな、汗をかいてマスクをつけられなくなっちゃう。勢い余ってそのままみんな喋っちゃうんですね、マスクつけないで。なので、それを指導したりとか。あとは

物の貸し借りですね。教科書の貸し借りとかも、なるべくは、感染対策ということでやめましょう、と。体操着なんかは、多分子どもたちは今まで結構貸し借りをしていたと思うんですけど、それも絶対にダメだし、飲み物の回し飲みとかも絶対にやめてください、っていうのを徹底してやっています。ただやっぱり難しいですね、中学生のそういうのを全部徹底するっていうのは。

でも、コロナ禍 2 年目になって、今、中学 3 年生を見ていると、中 3 ぐらいになってくると結構みんなコロナ禍でよくやってるなあ、というのを実感することもあります。さっきまでお話しした通り、学校行事等はやっぱり例年通りではない進行になっていますので、本校では朝会や集会は全部テレビ放送になっています。あとは動画、ムービー製作をして学年集会の代わりにしたりもしています。

行事も短縮したり、代替案を検討したり、部活動も活動時間に制限があったりとか、というようなところで、せっかくなので、今年、私の学年で実施した行事の内容をちょっと紹介します。まあ結局、うちの学年は 2 年生の時の自然教室も職業体験も、中 3 の修学旅行も実施ができなくて、じゃあそこでどうするかって考えた時に、**VR 修学旅行**というのを実施しました。

VR といっても、体験予定だったもののキットをこっちの学校へ送ってもらって実施したりとか、これ（写真）は実際に京都の映像を楽しめるというのでやりました。ちょっと 3D っぽく見える映像ということで、一人一台レンタルでスマートフォンを借りて、イヤホンと、このレンズをつけて見ると、映像が VR のようなかたちで見れるっていうものです。良いか悪いかは色々あると思うんですけど、何も体験しないよりは何かしら節目として、事前学習とか沢山やってきたので、そういうことができるといいよね、というのをコンセプト

トに実施しました。

これ（写真）なんかは、本来乗る予定だったバスのガイドさんと Zoom で繋がって。質問会をしたり仕事についてお話を聞いたりして、っていう交流会をしました。この立っている男の子が、うちのクラスの修学旅行委員の子で、代表して質問をしたり、挨拶をしたりしました。皆さんが実習に行かれる学校さんでも、こんなことを実施している場合があるかもしれないですね。

これ（写真）なんかは、本当は京都で清水焼を体験する予定だったので、制作体験キットをこっちに送っていただいて。その清水焼のお店の方と Zoom で繋がって、テレビ越しに作り方をレッスンしていただいて、教室で実際に清水焼を作りました。これもなんか本当に、現場に行けないっていうのは残念だったんですけど、実際の体験ができたので、子どもたちとしては結構充実した活動になっているようでした。こんな感じ（写真）でそれぞれが一緒に作って、絵を描いて、それを向こうに送り返して、焼いていただいて。こんな感じ（写真）ですね。これはちょうどこの間、完成品が届きまして、子どもたちも「おお〜」とか言いながら自宅に持って帰っていました。

各クラス、うちの学年は 7 クラスなので、匂い袋を作るクラスとか、扇子に絵付けをするクラスとか、自分たちで選択をして実施をしました。

あとは**文化祭**も、合唱ができなくなってしまってステージ発表のみになったんですね。そのステージ発表も、本来は体育館に全校生徒が集まって、生で観るっていうのを毎年やっていたんですけど、それもできないので、吹奏楽部や有志団体の発表を体育館でやって、それを各教室に映像で中継して、一般生徒は各教室で観るというかたちにして、去年と今年は実施しました。

そんな形式だったので、担任として今年の文化祭は全然やれることはないな、と悩みました。合

唱であれば合唱指導が担任のメインになってくるんですけど、それがなかったの。どうしようかなあというのを考えた結果、私のクラスの生徒が3人ほど、有志団体として出演するって聞いたので、じゃあそれを全力で応援しようと思って。応援するためにはどうしたらいいかなと考えて、うちわを作りました。この(写真)、ジャニーズ風のうちわを作って、教室でこれを掲げて応援をしました。生で観たいけれど、中継しか観れないっていうこともあったので。これ、クラスでも大ウケでして(笑)。クラスにいる子たちに「こんな作ったんだよね」って見せたらみんな「やりすぎだよ」って言いながらも笑ってくれて。これは、裏にメッセージを書いて、出演した本人たちにプレゼントしました。彼らもげらげら笑いながら受け取ってくれて。今回はそんな風なことを担任としてやってみました。結構こう、担任が盛り上がると子どもたちもすごく楽しんでくれるので、何事も子どもと一緒に一生懸命やるっていうのはよくやっています。

あとはやっぱりこういうところ(スライド)ですね。**感染者**が出た場合の諸対応ということで。本校でもやっぱり出ました。その場合、担任としては家庭訪問をして、対面はしないんですけど、ポストにプリントを届けたりとか、生徒保護者の心のケアをしたりとか。さっきも言いましたけど授業は板書を撮影したり、成績の扱いをちょっと考慮したりっていうのが入っています。私が実習生を担当した時期にもそのような対応があったので、実習生にはその辺も一緒に、臨機応変に対応してもらいました。

あとは、そんなコロナ禍ではあるんですけど、**学習指導要領**が新しく施行されました。中学は今年度から全面実施で、高校は来年度から実施ですよ。なので、今ちょっと皆さんもその辺を勉強されていることかなあと思います。評価の方法が

変わったり、観点が変更したりはやっぱり影響が大きいですね。国語は今まで、「関心・意欲・態度」、「書くこと」、「話すこと・聞くこと」、「読むこと」、「言語事項」という5観点だったのが、新学習指導要領では、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」という3観点に変わってしまったので、現場でもすごくてんやわんやというか、手探り状態でやっています。

本来だったら、この施行に向けて、研修会があったりするんです。コロナ禍の直前ですね、施行される3年前からちょっとずつ研修会があったんですけど、コロナになってそれが全部なくなってしまっただけで、実施の時期は変わらなかったの。本当にふってきたような、ふってわいたような感じがしています、現場としては。

なので、こちらは今すごく勉強しているんですけども、ぜひ学生の皆さんもよく勉強していただいて。本屋さんに行けば、関連図書もいっぱいあったりするの。その辺、今どうしてますか? っていうのを、実習の場で実際に聞くっていうのも大事なかなあという風に思います。

あとは、さっきからちょこちょこ出ているかな、**働き方改革**ですね。横浜市では、私が着任した年、5年前からタイムカードが導入されました。カードで、出勤時と帰る前に、ピッとやるようなかたちになりました。それまでは本当に、紙でしか勤怠管理をやっていなかったようなので、誰がどれだけ働いているかっていうのは申請しない限り不明瞭だったんですけど、それが明確になりました。なので、残業が多いと指導も入るし「なるべく早く帰ろう」っていうのが少しずつ意識として根付いてきたかなあと思います。部活動も休養日設定が必須となりまして、「土日祝日のうち1日は休みにしてください」とか「大会の翌日は休養日にしてください」ということを、横浜市ではやって

います。横浜市以外でもそういうのがちょっとずつ増えているとは思っているので、現場が変化しつつあるっていうのはぜひ知っておいてください。

じゃあ**教育実習**とは、というところで。私は今年度、実習を担当させていただいたんですけど、とにかく大変です、こっち（指導者側）は。普段の仕事と実習生担当というのはすごく大変でした。

先に時間割をお見せしたと思うんですけど、空きコマ全部に、実習生との打ち合わせとか振り返りが入ってくるので、その面倒を見なきゃいけないのが、正直めちゃめちゃ大変でした。普段、そのような空きコマでこなしている分掌の仕事などが、単純に後回しになってしまうので。

ですが、今年私が担当した学生さんはすごくやる気があって。「採用試験も受けます」と最初から言ってくれていたんで、私も一緒に頑張りました。そうすると、実習生を担当するのはこちら側の反省とか勉強にもなるし、「この子が将来同僚になるんだろうなあ」ということを思いながら指導するというのは、こっちとしても良かったです、とても。そういう気概のある学生さん相手には、現場も、とっても本気になります。とにかく、このコロナ禍とか新学習指導要領とかで忙しい中での実習生受け入れなので、そういうつもりでぜひ、実習に入ってほしいなと思います。

もちろん、これも散々言われていると思うんですけど、皆さんはお客様ではなく**チームの一人**になります。教壇に立つてことはプロです。これはもう子どもたちからしてもそうだし、こちら側職員としても、そのつもりでいてくれないと困るんですね。**職員室**に入ってることは、その学校のメンバーになるということなので、時には臨機応変に動くっていうこともあります。

今回、私が担当した学生さんですごくよかったのが、生徒の情報把握と**ハウレンソウ**ですね。私

が知らない場で、担任生徒がケガをして、その生徒が保健室にいるという場面があって。でも、担任の私はそれを知らなかった。事情を知っているのは実習生だけ。その時に、ちゃんと私のところに来て、「クラスの〇〇さんが、今こういう事情があって保健室にいます」というのを、的確に伝えてくれたんですね。それがすごくよかった。しっかりチームのメンバーの一人として、職員として動いてくれているな、っていうのをとても実感しました。

もちろん、やれることは限られていますので、実習に行った皆さんが、100%その子に対応しなきゃいけないとか、そういうことではなくて。自分の立場でやれることをやるっていうのがすごく大事なあとだと思います。だからその学生さんも、多分その先の判断はできないにしても、とにかくクラスの子がこういう事情で保健室にいるっていうのを確実に私に伝えてくれたので、この子の動きは悪くないなあ、というのをその時とても実感しました。という訳で、そんな意識を持って実習に臨んでくれるといいかなあとと思います。

実習へ行く前に、打ち合わせ等がこれからあると思います。ぜひ、自分から連絡をとってください。打ち合わせではメモを取ることと、分からないことはどんどん質問をすること。あとはとにかく、指導案を頑張って練りましょう。これがとっても大変ですけど、とにかく相談をして、早めに指導案を練ってくれるといいかなと思います。

その**事前の打ち合わせ**で確認するといいいのは、担当する単元、コマ数、持ち方、あとは実習期間にどんな行事があるかということ。これらを確認しておくのと、なんとなく3~4週間の見通しが立てるかなと思います。

今回、私が担当した実習生はこんな感じ（スライド）でした。5月24日から6月11日までの3

週間で中学3年5クラス。論説文『作られた物語を超えて』の単元と、漢字の単元と、言葉の単元をそれぞれ4コマ・1コマ・1コマで。合計6コマを、5クラスでやっていただきました。これを先に打ち合わせで聞いて、見通しが持てるといいんじゃないかなあ、と思います。

それで、担当する単元が分かったら、大体それを何コマぐらいやればいいのかってことと、副教材とかが必要なのかとかを聞いておきましょう。便覧とか、あとは「普段どうやって授業されていますか?」「プリントとかは使用されていますか?」っていうのを確認すると、指導案が練りやすいと思います。

授業の持ち方は様々なんですけど、大体一人で学年全クラスを担当されているか、学年にクラスが多いと、二人で学年のクラスを分けて担当していると思います。理科とかはよく、分野によって理科A・理科Bとかあったと思うんですけど。そのようなパターンで、二人で全クラスを担当しながら国語A・国語Bみたいに一週間の中でコマを分ける形か、もしくは7クラスあるうちの何組から何組がA先生で、何組から何組までがB先生、みたいな分担があるかと思います。私はいま後者の分け方ですね。それも確認しておけるといいんじゃないかなあと思います。

指導案を考える時は、その**評価の観点**もそうだし、さっきちょっと見せたように、ノート案とかワークシート案とかがあるといいんじゃないかなと思います。国語科は板書の計画もあると、どんな授業をしたいのかっていうのが伝えやすいと思います。で、あとはとにかく、指導案が未完成でも出しましょう。とにかくね。そこから相談できることもありますので。完成を目指さなくても、こんなことがしたいんだ、こんな風なことを教えたいんだけどどうしたらいいですか、っていうようなことを、ぜひ担当の教員の方にご相談できる

といいんじゃないかなあと思います。

実習中についてですね。とにかく大事なのは、やっぱり生徒と関わることだと思います。生徒の名前をぜひ覚えてあげてください。大体、座席表は各教室にありますので、それ見ながら授業中も名前を呼んで指してあげるといいと思います。

あとは、反省は一つでも次の授業に生かせるように。大体、同じ内容の授業を何クラスかやることになると思うので、一回目の授業でできなかったこととか、やってみて感じたこととかを、次の授業で活かしていけると成長できるのかなあと思います。失敗はつきものなので、ぜひそこから学んでやっていけるといいんじゃないでしょうか。

あとはそうですね、たくさん吸収して。まあ、実習生ってことは生徒も分かるので、一生懸命やっていたら、その思いはもちろん生徒にも伝わります。本気でやっているとか、関わろうとしているなっていう先生には、生徒の方も応えてくれるので、そんな感じでやってくれるといいかなと思います。

実習中は多分、**部活動**とか**委員会活動**等にも参加するようにと言われると思いますが。ちょっとここは、各校の雰囲気にもよると思うんですが、今回私が担当した時は、副校長先生から、実習生の帰りがなるべく遅くならないように、と言われました。もちろん、部活動や委員会等へも参加してほしいんだけど、授業準備が終わってないとか打ち合わせがあるとかっていうんだったら、そっちを優先で、とか。あと、空きコマにたくさん授業見学をしていると、やっぱり日中の空きが無くなっちゃうんですね。なので、その辺もなるべくバランスを見て、日中に授業準備とか印刷とか打ち合わせとかができるように時間を組みました。なので、部活動指導や委員会活動への参加は、無理のない範囲で行なえるといいのかなと思います

し、そういう風に配慮してくれる学校さんも多分あると思うので、その辺は雰囲気を見ながらやれるといいのかなと思います。

実習後ですね。終わったらやっぱり、向き不向きをしっかり見極めるっていうのは大事だと思います。私の同期とかも結構、実習に行ったことで「やるぞ」ってなった人もいれば、「やっぱりちょっと違った」っていう人もいますので、そこでしっかり見極めるのは大事かなと思います。

あとは**試験対策**ですね。実習校で、面接練習や模擬授業対策に協力してもらえることもあります。私も、今年持った実習生さんは、面接練習とか模擬授業対策とかを一緒にやりました。夏休みとかですね。依頼してみるのもいいと思いますし、あと実習中に「試験を受けます」っていう話をすると、結構いろんな情報をいただいたりすることもあるので。ぜひ、そういうつものある人は、指導教官なり、校長先生なり、副校長先生なりにご相談すると、「こうするといいよ」とか「じゃあ面接練習しようか」とかっていう風に言っていただけることもあります。それで、私が今年担当した学生さんは、見事、今年の採用試験に合格しましたので。ぜひ、皆さんも頑張ってください。

おまけです。多分この辺は、私が実習に行った際に知りたかったなあっていう話です。**教科書**はぜひ自分で最新のものを一冊用意しておくといいと思います。加えて、もしかしたら、指導書とか指導の手引きとかっていうのを、学校から貸してもらえる場合もあるので、その辺もあると指導案が作りやすいと思います。反対に、備品等は学校にあります。チョークとかクリップとか紙とか、その辺も学校のものを使えると思いますので、無理に全部自分で用意する必要はないと思います。自分のノートパソコン、これはあると便利です。

USBとかで作成した資料等を入れて、学校の印刷機で出力することなどもできます。この辺の扱いについては各校で規約があるので、「作ったプリントはどうしたらいいですか？」とか「どうやって資料を出したらいいですか？」っていうのも確認しておくといいかなあと思います。

最近、**ICT活用**はすごく好まれますので、教科書の特性に合わせて様々活用したり、フラッシュカードみたいなものを使ったり、**デジタル教科書**を使ったりっていうことにも、ぜひ挑戦してくれるといいかなあと思います。あとはそうですね、**Word**と**Excel**。今、皆さん卒論等も書いていると思うので、この辺やっているとありますが。ああ、3年生か、まだこれからだ(笑)。でも、レポートとか書いていますよね。なので、ぜひ今のうちに知識を身につけて、一通り使えるようになっておけるといいと思います。で、その**ICT**も積極的に活用してください。

あとですね、**SNS**！これは散々言われていると思いますが。もちろん、こちらが情報を流してしまうとか、写真をアップしてしまっ、っていうことに関しての注意喚起はよく言われる話なんですけど、逆も然りです。今の生徒はデジタルネイティブなので、すぐ検索してきます、先生の名前で！怖い(笑)。なので、**Instagram**や**Twitter**、**Facebook**等を使っている方は、内容を整理して管理して、鍵をかける等クローズにするっていうのはとっても重要です。あの、本当にすぐ検索してくるのでぜひ気を付けて下さい。私の過去の経験で言うと、学生時代バンドをやっていて、そのバンドがちょっと大会に出たりとかしていたんですね。その時の写真とか、バンド名とかがネットに流れていたんです。知られて困る情報じゃないので、別に気にとめていなかったんですけど、突然、生徒から「先生って〇〇っていう名前前のバンドやっていたんですね」って言われて、とてもびっくり

しました。名前でググったらしいです。なので、本当にその辺は、こちら側の防衛が大事かなあと思うので、ぜひ整理して管理してほしいなと思います。

あとこの辺は、また打ち合わせの中で聞くと思うんですけど、大体はスーツ・スニーカーでOKだと思います。昼食は学校のスタイルに合わせて。横浜市の昼食は今、ハマ弁というデリバリー給食を選べたり、お弁当を持ってきたりとか色々あるので。給食なら給食が食べられると思うので、そんな感じでやれるといいんじゃないでしょうか。

あとちょっとだけ、話させてください。おわりにといいことで。この5年間教員をやっていて、子どもと関わる中で、どんな先生が好かれるのかなあと考えて。あと今回、私が今担任している子どもに「大学で講義するんだよね」ということを話して、「なんかこう、どんな実習生が来たら楽しい？」みたいな話をしたんです。そしたら、「色々知っている先生がいい」という話が出ました。それは教科の知識はもちろんなんですけど、雑学とかニュースとか音楽とかアニメ漫画とか。そういうところを知っていると、やっぱり生徒からの信頼度がすごく高いですし、子どもが「この人なら話しても、話が通じるな」と思ってくれるので、そうすると子どもにとって、そういう先生が話しかけやすい先生、関わりたくなる先生、ゆくゆくは何かあった時に「この人なら相談してもいいな」と思ってくれる要素になります。

なので、本当はこの学生のうちにいっぱい色々体験してくださいね、って言いたかったんですけど。ちょっとこのコロナ禍で、バイトも旅行もサークル活動とかもままならないと聞いたので、なかなか厳しい部分もあると思うんですけど。やっぱり、何かについて詳しく知っているという

のは、子どもにとってすごく重要度が高いようなので。これから何か、教科の勉強はもちろんそうなんですけれど、本を読むとか、ニュースを見るとか、映画を観るとか、そのやれる範囲で情報をいっぱい持っている、子どもたちから信頼してもらえるようになるのかなあと思います。

私もよく、大学で学んだ話とか、バイトでやった話とか、大学時代にこんな先生がいたんだよねとか、生徒といろんな話をします。そうすると結構、子どもたちが「そういう勉強ってどういふところに行ったらできるんですか？」とか「そういうジャンルがあるんですか？」とか、色々興味を持ってくれたり。とある生徒は、「佐々木先生はそういう、いろんな学生時代の話をしてくれるから、いろんな進路の道があるんだなって思えた」と話してくれて。こんな道もあって、こんなこともできるんだなっていう風に将来がちょっと広がった、って言ってくれたんです。なので、そういう風にぜひ、いろいろ経験、体験、アルバイトでも何でもいいと思うので、なんかこう、引き出しをいっぱい持っているといいと思っています。

私はカルスタ出身なんですけど、カルスタを選んでよかったな、というのはそういうところですね。教科の勉強もしましたが、やっぱりそういう文化的な話とか、普通の国語の先生が知らない話とか、持っていない話をけっこう持っていたりするんで、それは本当にカルスタでよかったなあ、という風にすごく思っています。大正大学も、仏教の学校なんだよって言ったり、今サザエさんに出てるでしょ、とかいう話をすると結構興味を持ってくれたりとかするので、なんかそういう話がさらっとできると、子どもたちとも繋がっていきやすいのかなあなんていう風に思っています。

では、一応私の話はここまでということで。ご清聴ありがとうございました。実習・採用試験等色々あると思いますが、ぜひ頑張ってください。

さい。

滝沢先生

佐々木先生、ありがとうございました。5年間の経験を、ものすごい量の経験をしているので、それはもう今日のスライドの112枚という数にも表れていますけど、貴重なお話を沢山してくれました。

これから質問の時間にしたいと思います。質問ある人はミュートを外して発言してください。あるいは、ちょっと発言するのはどうかな、という人は、チャット欄に、チャットにまだ番号名前書いてない人いるね、今からでもまだ番号と名前書いてない人はチャットに書いて。それとともに質問をチャットに書いてくれれば、今この場で佐々木先生にお答えいただけると思いますので。どうですか質問。口頭でもチャットでも良いですよ。

さっき大学のバンドのサークルのことあったけど、同じサークルの人いるの？

佐々木先生

ライトの人いますか？ あ、いる、いる、すごい、嬉しい。嬉しいなあ、誰だろう。

滝沢先生

後輩から一言、先輩に質問したら？

学生

私もライトでカルスタで。今、英語の教職なんですけど、カルスタでよかった、って最後に仰っていて。特にこう、なんか生徒にウケがよかった話題とかってありますか？

佐々木先生

私、カルスタで星川先生のゼミだったんですけど、言語学の話とかはかみ砕いて子どもによく

するんです。さっき紹介した、学級通信のキャラクターになった猫の絵も、「モノと名前、どっちが先にあると思う？」という話を子どもにしたときの例で。名前っていうのは、モノがあって初めてあるのか、でも名前がなきゃ認識しないよね、っていう話とかをして。子どもにとってはすごく難しいんですけど、そういうのを大学で勉強するんだよ、とか。

あとやっぱりウケがいいのは、ファンタジーの研究、伊藤先生の授業ですね。ファンタジーの研究とかディズニー文化の比較研究とか。あとは近代文学研究の授業で、メディアミックスとか二次創作の話とかが結構あって。そういうのを真面目に勉強したんだよね、っていう話とか。その伊藤先生の授業のレポート、私、ディズニー文化の比較研究の授業で、『なぜ女子大生は制服を着てディズニーランドに行きたがるのか』っていう論文を書いたんです。それが結構子どもにはウケが良かったりとか。

あとは何がウケがよかったかな。日本でゾンビ映画がうまれない理由とか話したりしたら結構ウケが良かったのと、あとはごめんなさい、先生のお名前をちょっとど忘れしちゃったんですけど、近代文学の授業で、寺山修司をずっとやっている授業があって。最近、国語の教科書に寺山修司の短歌が載ってたんですよ。だから「すごい授業があつてね」っていう話をしたりとかすると、みんな「変な大学ですごいこと勉強してたんだな」って思ってくれて（笑）、「それはなんていうコースなんですか」とか結構聞いてくれたりしますね。その辺は面白かったです。

学生

ありがとうございます。

佐々木先生

最近結構カルスタに限らず、部室棟に入れな
いとか、なんかバンドなんか特に集まってなんぼ
のものだから、そんなのができない、っていうの
を聞いて、ちょっとサークルの危機だなあという
話も聞いているので、ぜひ頑張ってください。

学生

ありがとうございます。

佐々木先生

チャットに来たかな。「横浜市を考えています、
住居の経験がありません。」

横浜市の採用試験を受ける方は、半分ぐらいが
市とか神奈川の人で、もう半分は本当に地方の人
が多いんです。で、今の職場も北海道の人が3~4
人いたりとか、秋田青森の人がいたりとか沖縄の
人がいたりとか、結構さまざまいます。しかも横
浜市は結構、いろんな地方で説明会をやっている
ので、「どこからでもいいですよ」というのをと
てもアピールしている自治体なんです。だから、
多分居住経験ないとか出身地じゃないっていうの
も全然不利じゃないと思います。

なので、逆に言えば、何で居住してないのに横
浜を選んだか、っていうことが言えるといいんじ
ゃないかなあと思います。それは多分、他の方々
も、住んでない自治体とか住んでない地域を受け
ようと考えている人は、その自治体がどんな教員
を求めているとか、どういう教師像を求めている
か、っていうのをよく調べて、こんなことを求
めていて、この自治体でこういうことをやりたい、
っていうのが言えると、採用に近づくんじゃない
かなあと思います。

「面接でアピールすること」。私、実はですね、
集団面接の時に、今後、学校にどんなことが必要
とされるか、みたいなことだったかな、そんな質
問をされまして。他の受験者は、子どもの支援の

話とかお話しされてたんですけど、私は「子ども
を受け入れる前に教員側の体制をよくしないと駄
目じゃないですかね」という話をしたんです。
集団面接の場で。さすがに面接官もぎょっとした
顔をしていたんですけど(笑)。でもちょうど「チ
ーム学校」とかが言われ始めた頃で。横浜市も結
構、中間層の教員がいないというか、とにかく人
手がほしいっていう話を説明会等でもしていたの
で、その教員側の待遇をよくすると、空気をよ
くすると。そういう風にしていかないと辞めち
ゃうし、やりづらいし、やっぱりそういう体制が
必要じゃないですか、っていうのを言いました。
はっきり。ちょっとそこは心配だったけど、受か
っているんです。しかも、ちょうど横浜市は私が採
用された年からタイムカードが導入されて、どの
自治体よりも早く、働き方改革というか、そうい
うところに何とかやっけていこうっていう姿勢があ
ったので。部活動も以前よりお金が出るようにな
ったりとか。なので、そこをはっきり話せたのが
むしろよかったかなあ、とちょっと思っているん
ですけど。そんな感じですかね。

あとは、いっぱい質問ありがとうございます。

大学3年生の今の時期には、採用試験の勉強は
0です。3年生の今の時期はですね、さっきも言っ
たんですけど就活をする予定だったので、就活と
並行していました。採用試験の勉強は実は全然し
ていなくて、就活の準備ばかりしていました。
で、大学3年の1・2・3月で就活をして、4月2
日に内定をもらって、5月から実習に行つて。実
習が終わって6月に就活を再開して、7月に採用
試験を受けて、9月に二次試験を受けて、10月に
受かりました。なので、本当にちゃんと勉強した
のは実習に行つてからです。

しかも、実習に行くまで試験を受けるかすごく
悩んでいて。内定ももらっていたし。実習に行つ

てから、試験、受けるか！っていう気持ちになったので、そこから本腰を入れて勉強しました。しかも私、横浜市以外は受けていなくて。なので、あんまりオススメできないです。けどなんだろうな、いろんなことを、いろんなところに手を出して勉強していたので、それが最終的には集約されたかな、っていうところはあります。

あとこれは、横浜市に限った話なのか分かりませんが、横浜市の、当時私が受けた時の**教職教養**のテスト。私、実は国語の結果より、教職教養の方が点数が高かったんですよ。でもそれ、滝沢先生の授業でやった内容がほとんどだったんです。なので「あ！」と思って。「本当に滝沢先生の授業でよかったな」って思いながら。本当ですよ！びっくりするぐらい出たんだから。

学生時代は本当に、「この先生（滝沢先生）、なんていうテストを作るんだろう」ってずっと思っていて（笑）。腱鞘炎になるんじゃないか、と思いつつながら学期末のテストを受けていたんですけど。採用試験の時には「あ、これやったわ」っていうのがいっぱい出てきて、「このことだったんだな」って思いながら試験を受けました。なので、本当に滝沢先生の授業もそうだし、大学の授業をぜひ大事にしてください。

大学4年の時、私は漢文の授業も受けていたんですけど、それが採用試験にも同じように出てきて。本当に大学でちゃんとやっておいてよかったなあ、と心底思いましたので。もちろん今からコツコツやってほしいんですけど、ぜひね、授業の勉強をしっかりやってください。

多くのクラスを受け持ち、クラスごとに少しずつ内容を変えていると思われるのですが、どのように授業内容を工夫していますか、担任として受け持っていないクラスをよく知るためどのような取り組みをしていますか、という質問です。

なるほどね、そうなんです。同じ授業でも、やっぱりクラスによって反応が違うので、クラスに合わせて喋る内容とか、雑談の入れ具合とかを変えているようにしています。その雑談に反応してくれるクラスだったら、ちょっと脱線した方が盛り上がりてみんな食いついてくれるのでそうするんですけど、逆に雑談に食いつかないクラスは、むしろそこで流れが止まってしまうので、あえて雑談を入れなくて、スピーディーに進めるなんてこともあります。

あとは本当に、クラスの雰囲気を見ながら授業内容を工夫したり。理想は、担当しているクラス全部が、同じレベルで指導できるのがいいんですけど。どうしても、同じ単元でも、一回目のクラスっていうのは手探りになっちゃうところがあって。そこで「ここの板書こうした方がよかったなあ」とか「この例は出さない方がよかったなあ」とかっていうのを反省して、次の授業に改善するようにしています。

たとえばこの間、ちょっと反省したのが、夏草の松尾芭蕉の授業。芭蕉が旅支度をしたんだという話をして、取引の説明をどうしようかなあと思って。今、取引なんて言わないし、でも子どもたちに馴染みがあるのって、スパッツもあんまり通じないなと思って。今って、タイツ、なんかスポーツ用のタイツとか結構あるんですよ。体育の先生とかが結構、ショートパンツの下に履いていて。「ああいうタイツとか履いてるじゃん」「イメージとしては着物の下に履いてるそういう感じなんだよね」っていう紹介をして。そこをテストに出したら現代語訳で「タイツ」って書いてきた子がいて（笑）。「うわ、（例の出し方を）間違えた」と思いましたね。まあ、一人しかいなかったんですけど、タイツなんて書いた子は（笑）。けど、それはちょっと反省しました。分かりやすくするために言った例ですけど、違う解釈に引っかかった

ので、そういうところはよく反省するようにしていますね。

担任を持ってないクラスは、そうですね、そんなに意識しなくても知れますし、やっぱり名前を覚えること。それと、私は国語科なので、プリントとでよく文を書かせて回収しているんですけど、そこでその子の特性を知るようにしています。字が綺麗とか汚いとか、文章を書くのは下手だけど喋るのがうまいとか。なんか、そんなのをよく知るようにしていけるとクラスのことが分かるし。あとは、そのクラスの担任を立てるってことですかね。それはよくやります。例えば席替えをしたら、「どうやって決めたの?」とか「担任の先生はなんて言った?」とか。何かと担任を絡めてあげると、クラスとしての一体感も出るし、先生どうしがよく連携してるんだなあ、っていうのが子どもに伝わるし、そういう風なことはよくやりますね。

「学校教育としての仕事が全くない休日がありますか。」

すごくシビアな質問が来ましたね。初任の年はほとんどなかったです。というか、やっぱり教科にもよるんでしょうけど、国語は、ワークとかそういうのを、副教材として使っている先生があまりいないので、自分で授業プリントとかを作らなきゃいけないですし、とにかく最初は慣れなくて採点とかが時間かかりすぎちゃって。全然ない日っていうのは本当に数えるほどしかなかったんじゃないかな。でも、社会科の先生もそんな感じかな。

本当に今、5年目になって、やっと2周目。3年生の授業をやるのは2回目になったので、3年前にやったことをちょいちょい思い出してやっているから、ちょっとずつ仕事の効率スピードは上がっているんですけど。最初の年、最初の3年間は

やっぱり、自分に教材や経験のストックがないので。なんにも、物理的にも知識的にもストックないので、そうですね、(休みは)なかったですね。

けど、これが良いことなのか悪いことなのか分からないですけど、教科の勉強は楽しいですよ、やっぱり。なので、授業をどう作ろうかなとか、どういうプリントを作ったら分かりやすいかなとか、ここでこの話しようかなとかって準備をしている時間は、国語のことはすごく楽しい。難しいですけどね。そこを趣味の範囲って言っちゃったらあれだし、でも仕事だし。まあそこは最近、私も常々考えていますね。でもやっぱり休みっていうか、例えば友達と遊びに行くとか飲みに行くとかいうのがあると、そこに向けて頑張るので、そういうのを設定しとくのが大事なかなと感じますね。

「教育実習先が高校生のバイト禁止なんですけどバイトの経験談はしてもいいですか。」

なるほどね、これはあんまりしない方がいいかもしれないですね。でも大学時代の話ならいいんじゃないですかね。それが、高校生がバイトするような話に助長しちゃったら困るんだけども。その学校の雰囲気にもよるのかな。そういうのがないんだったら、大学生の頃こういうバイト楽しいよ、とか、こういうことすると経験になるよ、っていうのはいいと思います。今、私は中学勤務なので、子どもはバイトの話聞いて、中にはやっぱり高校生になったらバイトしたいって言う子もいるんですけど。でもそんなに、それが直接的に全員高校生になったらバイトするに繋がるかって言ったらそうじゃなくて、本当に一教員の面白い過去話みたいな感じで聞いてくれるところがあるので。それはそうですね、生徒の雰囲気、学校の雰囲気に合わせて経験談を話してあげるとか。あとはオチがバイトの話にならないようにすると、子どもの中にバイトの話じゃなくて違うと

ころが残ると思うので、それはいいんじゃないかなと思います。

「コロナ禍で ICT 導入が急速に進んだが実際の対面での授業ではどうしていますか。」

そうですね。今、うちの学校は Chromebook が生徒に配られているので、この間、国語のスピーチではその Chromebook の Google Classroom を使って、スピーチの資料をそこで提出させて、それを学校のテレビに繋いで表示させて、それを見せながらスピーチをするっていうことをやりました。あとは私が、今日みたいに授業の PDF を作って画面で提示しながら板書を書くとか。長時間残しておきたい内容、今は古文をやっているので、余暇情報というか、本文に関係ないけど知っとくといひよ、みたいな情報を PDF にしといてテレビ画面に残しておいたりしておく、子どもたちの興味を引いているかなあ、と。あとは論説文とかだと科学的な内容とか知らない情報が結構あったりするんで、そういうのを映像で出したりしてあげると、印象に残って分かりやすいつてよく言われますね。そんな活用をしています。

「5 年間、授業以外で、生徒指導で一番大変だったことは何ですか。」

そうですね。生徒指導で一番大変だったこと。今の勤務校は割と落ち着いている方で、なんかこう、エスケープ、タバコとかお酒とか、そういうのは全然ないんですけど。どっちかっていうと内へ内へ入っていく子が多かったです。学校に来れないってなったのも、いじめとかが原因じゃなくて、本当に家庭環境の問題とか、自分のことで来れないっていう子が多いので、そういう指導が大変だった。それと、初めて持ったクラスに、最初から不登校の子がいて。その子を初任の時から 2 年間担任したんです。その子、学校には来な

いんだけど、SNS はとても使っていて。学校にいないのに、SNS で学校の子とトラブルになっていたりとかして、どこまでこっちが介入するかっていうところすごく大変だった記憶がありますね。

あとは、勢い余って手が出ちゃった、相手のこと殴っちゃった、殴られた、蹴られた、でもこっちはちょっかいのつもりだった、みたいな件で。親御さんが出てきちゃって、その子どもの話と親の話と三者三様みたいところで、収めつつ指導しつづつていうのは大変だったかな。

私、生徒指導っていうのはどこまでも慣れないなあと思っていて。オチのもっていきかたとか、どこに落としたらいいかが見えない時がやっぱりあって。そういう時に指導するのは大変なんですけど、でも大体一人で指導するのではないので。学年全体でチームになって指導にあたるし、それこそ生徒指導の先生とか、時には管理職の先生とかも出てきてくれて、「こういう場合はここに落としましょう」とか「ここに持っていきましょう」とか「こういうかたちで収束させましょう」とか「こういうのを教員全員で検討してあたるので、一人で何か抱えなきゃいけないということはないかな。

生徒と関わる上で大切にしているのは、ちょっとした変化にも、とにかく気づく、っていうところですね。前髪一つでもそうだし、声が枯れているとか風邪をひいているとか鼻水が出ているとかもそうだし。とにかくそういうところを大切に「なんかあったの？」っていう風に声をかけるようにはしています。

(チャットにて、書写の授業について指導法を教わっていないが、現場に出たらどうするのか、という内容の質問)

書写の授業ね、私も何も勉強してなくて不安でした。そうなんですよね、私もそうでした。これ

は不思議なんですけど、私の場合は現場に出てからペアの先生に教えてもらいました。どこを大事にするかとか。書写なので、“書き写す“なんですよね。だから、字のとめ、はね、はらいを黒板に書くとか、筆の使い方とかっていうのをペアの先生に教えてもらったり、現場の先生の授業を見て同じようにやったりしていました。不安ですよ、私もめっちゃめちゃ不安でした。不安ならやっぱり、実習中に聞いて勉強するのもそうだし、自分で調べるっていうのも大事かなあとと思います。

まだ他に何か質問とかあればまた後日で。

滝沢先生

今もう口頭で質問ある人いませんか？大丈夫？

佐々木先生

本当はせっかく子どもが作った映像とかも見てもらえればと思ったけど。

滝沢先生

それでは今日の講義を聞いた感想を Tpo のコメント欄の方に載せてください。それで出席を取るようになります。チャットにみんな書いてあるね、名前と番号ね。今チャットに書いてくれたことは、私の方で記録しますし、それからこの後、何かそのコメント欄で質問なんかも書いてくれれば、私の方から佐々木先生に送って、また皆さんに Tpo

で全体に配信したいという風に思っています。

あと、じゃあ質問よろしいですか。とっても大事な話を沢山聞かせてもらえたし、私の授業も褒めてもらえたので(笑)、大変良い時間だったんじゃないかと思います。

さっき採用に向けて、あるいは実習に向けての準備が不十分だということがあったんだけど、特に教採に向けての勉強っていうのはそれだけ独立してある訳じゃなくて、あくまで学科の勉強の延長なんだよね。だから、佐々木先生も言われていたけど、日頃の学科の勉強をぜひしっかりやってもらおう、と。そもそも教員免許状っていうのは、それぞれの学科の勉強をやっていれば、中学や高校の教科の大事な部分はみんな勉強できるだろう、という前提で、教職免許が取れる科目っていうのが設定されてる訳です。だから決して別々の勉強じゃない。もちろん教採用の勉強は要るけれども、そういう意味で日頃の学科の勉強、ぜひ力を入れてもらいたいなという風に思っています。

それじゃあちょうど時間がきましたので、教育実習 I の第 11 回はここまでにします。最後にみんなサインで拍手をしてもらって終わりにしましょう。

佐々木先生

ありがとうございました。

4. 論考 (1)

キャリア教育と学校経営

大正大学人間学部教育人間学科教授 高野篤子

はじめに

我が国の産業構造や就業構造の変化にともない、従来の長期雇用を前提とした企業内教育・訓練への動機づけの減退や、非正規雇用者に対する企業内教育・訓練の機会の限定化が進んでいる。2006年に改訂された教育基本法では、第2条で「職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと」が学校教育の目標の1つとして掲げられている。現行の学校教育法では義務教育の目標の1つとして、第21条にて「職業についての基礎的な知識と技能、勤労を重んずる態度及び個性に応じて将来の進路を選択する能力を養うこと」が明記されている。学校教育の現場では、様々な困難を抱える子どもたちの学習権、発達・成長権を保障するための教育実践が行われており、自己肯定感を育み、将来への見通しを持てるようになるためのキャリア教育もその1つである(勝野・村上編 2020)。学校における子どもが達成感を持てる教科指導、訪問型の家庭教育支援、福祉部門・部局と教育委員会との協働といった種々の取り組みの根底には、一人一人の子どもをケアする学校文化を育む学校経営がある(柏木・仲田編 2017)。

キャリア教育とは、2011年の中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方(答申)」によると「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」とされている。発達の段階に応じ体系的に実施され、基礎的・汎用的な能力を中心に育成される。キャリア教育は、特定の教科のみで行われる教育実践ではなく、学校における教育全体に係る実践である。本稿では、中等教育段階におけるキャリア教育とマネジメントについて、教育人間学科の筆者のゼミ生たちのこれまでの学校での経験等もふまえて、現状と課題について考察してみたい。

1. 中等教育段階におけるキャリア教育の位置づけ

まず、中学校におけるキャリア教育の位置づけを文部科学省の『中学校キャリア教育の手引き』(2011)や中学校学習指導要領(2017)等をもとに確認しておく。2017年3月に告示された小学校及び中学校学習指導要領の総則に、キャリア教育という言葉が用いられ、その充実を図ることが明示されている。中学校学習指導要領(2017)の第一章総則には「生徒が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要として各教科等の特質に、キャリア教育の充実を図ること。その中で、生徒が自らの生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、組織的かつ計画的な進路指導を行うこと」と述べられている。特定の教科等ではなく、教育課程全体にかかるということが理解できる。また、生徒に学校で学ぶことと社会との接続を意識させ、一人一人の社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育み、キャリア発達を促すとされ、学校での学びと社会をつなげられるような教育を求めているということが分かる。

あわせて各教科においてキャリア教育がどのように組み込まれているのかを簡単にみておこう。まず、国語におけるキャリア教育としては、学習指導要領で言語活動の充実が強調されており、特に話すこと、聞くことの指導内容はキャリア教育に関連が深く国語科を通じ

たキャリア教育を実践する上で重要なポイントとなっている。学習指導要領の目標においても「目的や場面に応じ、社会生活にかかわることなどについて」というような文言を冒頭に置くことにより社会との関連付けが行われているようである。数学では、数学的活動という言葉を用いてキャリア教育との関連を深めており、具体物を用いて考えたり実際に体験したりすることから、思考を中心とした活動までの幅広い範囲の活動を組み込むことがポイントとなっている。特に、説明し合う活動に重点が置かれている。続いて、外国語（英語）では、学習により言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図る態度を育成するとともに、聞くことや読むことにおいて話し手や書き手の意向を理解すること、また自分の考えなどを話したり書いたりすることを重視している。外国語（英語）の目標におけるコミュニケーション能力の基礎を養うことは、キャリア教育の充実を図るための社会的自立や職業的自立を目指したその基盤となる基礎的・汎用的能力の育成に直接的につながるものである。外国語の教育ではこれまでに触れたことのない言語や文化について触れ、その言語を用いて他者と会話をしようとすることや他の文化について積極的に知識を得ようとすることは現代社会のあらゆる場面で必要となってくることでもある。そして、理科では様々な課題に自立的に対応していくために、理科の学習で科学的な見方や考え方を養い、それが職業でも生かされることに触れる学びが重要であるとしている。また、日常生活や将来の実社会での生活とのかかわりの中で、理科を学ぶ意義や有用性を実感できるよう、職業や今後の学習との関連に触れ様々な課題に自立的に対応する力を育成していくことが求められている。社会科では、日々変化し続ける社会的事象を一面からとらえずに、様々な角度から総合的に考察したり、それらに関連付けたりする多角的な見方や考え方や社会の変化に主体的に対応して生きていくことができる能力や、自らの考えを分かりやすく他者に伝える表現力などを育成することが求められている。

続いて、高等学校におけるキャリア教育の位置づけについて、文部科学省の『高等学校キャリア教育の手引き』（2011）や高等学校学習指導要領（2019）等をもとに確認しておく。高等学校学習指導要領（2019）には「生徒が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科・科目等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。その中で、生徒が自己の在り方生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、組織的かつ計画的な進路指導を行うこと」と記載されている。

高等学校には、全日制、定時制、通信制の3つの課程があり、そして普通科、専門学科、総合学科の3種に分かれている。本稿では、全日制課程の普通科に焦点を当て検討していきたい。2009年度時点では普通科の約67%が家庭、商業といった教科を中心に何らかの職業科目を設定しているという（文部科学省 2011）。ただし、高等学校の普通科では、卒業者のうち約8割が大学や専門学校等の高等教育機関へ進学しているとされる。多くの高等学校ではキャリア教育は総合的な学習の時間として提供されており、その中の約半数の学校が社会人講話を実施しているという（文部科学省 2011）。

では、学校教育の現場では、どのようなキャリア教育が行われているのかいくつかの事例を次節より検討してみる(1)。

2. 中等教育段階におけるキャリア教育の実践例

中学校の事例として、1つ目に大阪府のA中学校での事例をみってみる。A中学校では市教育委員会や市職員といった地域人材や外部人材のゲストティーチャーを活用した地域連携を実践している。この実践では資質・能力育成を意図し、狙いにふさわしいゲストを活用しながら地域・社会の教育資源を活用した教育実践を展開している。そうした学習活動によって、生徒の職業に対する理解の深まりや意識の向上につながっているという。体験活動やゲストティーチャーなどの多様な人々とのかかわりの中で、知識の伝達のみならず生徒の主体的・対話的な学びが生まれ、将来に対する興味関心を高め、深い学びとなることが期待で

きる。学びの主体は生徒自身であり、教師はあくまでも良きアドバイザーという立場として取り組んでいるため、より生徒の主体性を高めることができるだろう。

2つ目の事例として、石川県のB中学校の事例をみている。B中学校ではカリキュラム・マネジメントを意図した授業が実践されている。この事例ではキャリア教育のかなめとなる特別活動を一人一人のキャリア形成と自己実現の中核に据え、各教科、領域との関連を意図した学習計画を実践している。働く意義を地域の多様な人材活用、社会形成、社会構造に焦点化したグループ活動から学び、各教科、領域の一連の学習活動によって深い学びへの発展を試みている。

3つ目は愛媛県のC中学校の事例である。C中学校では「自分の生き方を考えよう」というテーマを設定し、生徒の興味関心を生かした体験学習を重視しながら学校内外での啓発的職業関連活動を計画・実施する中で地域の実情や大人の生き方に直接的に触れることによって、生徒自身のキャリアや将来への意欲や態度を育てるような実践をしている。また教員側の工夫として、生徒と共に学ぶ教師の姿勢づくりや地域への啓発活動、地域の人々や企業家からの評価の取り入れ等を実践している。生徒が目指そうとするものを教員がともに探るとともに、地域の人々からも協力してもらうことで生徒一人一人の地域社会の一員として生きる力の育成をより効率的に行っている。C中学校では、企業による講演会や職業人としての心構えの研修会を経て職場体験学習を行うといったプロセスで学習を展開している。

これらの3校は、ゲストの活用場面を意図的に計画し、テーマに沿って各教科・領域をつなげているという点からも学習指導要領等が意図するキャリア教育とマッチしている。しかし、こうしたゲストティーチャーの活用は、実際に協力してくれる学外のゲストの存在がかかせない。学校と地域との連携が重要になるとともに、地域の人々の学校への協力・支援意識の向上がより一層求められることになる。

次に高等学校のキャリア教育実践事例を取りあげて考察していく。1つ目の神奈川県D高校は、いわゆる進学校で、「学力・体力・気力を充実させ、自主的精神を養い、心身ともに健康で情懷豊かな人間形成に努める」ことを教育方針として掲げている。教育課程は、第一学年では必修科目を中心に基礎学力の充実、第二学年では学習の進化による進路実現に必要な学力の充実、第三学年ではコースに分かれて進路希望の達成を目指して編成されている。キャリア教育は、総合的な学習の時間で「自分M・A・P」を活用しながら展開している。生徒は、「自分M・A・P」というノートを各自で記録している。このノートには、ワークシートがあらかじめ印刷されており、学校としての達成目標やそれぞれの活動でのポイントが示され、ポートフォリオとしての機能を果たす。大学模擬講座や大学訪問といった大学との連携事業を実施している。大学模擬講座では、10校以上の大学から提供を受けた20程度の講座を第1学年の生徒を対象に実施している。複数の講座への参加を可能にすることで生徒の視野を広げることにつなげている。大学訪問では、第2学年の生徒を対象に複数のコースを設け、生徒は自らが選んだコースで都県内の1～2校の大学のキャンパスを訪問している。訪問先では、生徒の要望に応じて入試課職員の説明、ボランティア学生によるキャンパスツアー等が行われる。

また、D高校では世代間交流やキャリア教育の充実を図り、自主的に活動する姿勢と心豊かな人間性を育むことを目的として、「未来の夢講座」を実施している。2016年度には進路・文化理解・地域連携等を目的とした多種多様な39講座が開講されており、講座への参加自体は1日あるいは半日であるが、事前学習に2コマ、事後学習に4コマを使い、単発のイベントで終わらないように工夫をしている。さらに、キャリア教育の評価を、校内評価だけでなく外部の意見も含めて学校評価実施報告書として公表しており、学校の目標、取り組み内容、課題・改善の方法等を併せて示すことにより高等学校としてのPDCAを可視化し、校内外で共有できるようにしている。

2つ目に、岩手県のE高等学校の事例をみている。E高校は1学年2学級と小規模校である。卒業後の進路希望が多岐にわたる生徒に対して多様で個別的な指導を行っている。卒業

後、就職を希望する生徒が半数以上を占めるE高校が最も注力しているのが、インターンシップである。第1学年の後半から事前学習を行い、勤労観・職業観の醸成を図り社会人としての心構えを身につけさせ、第2学年の夏季休業期間の3日間を使って、希望する業種を中心に原則1人1事業所に行っている。

E高校では、生徒自身が自分を見つめ直すために、地域の大学による出張講義や多くの講演会や見学会・学習会など、多様な機会や経験を意図的につくっている。各教科においても、新聞学習会（国語科）、金融セミナー（地歴公民科）、年金セミナー（地歴公民科）等を実施している。そして、こうした取り組みを生徒自身が可視化できるように「進路ファイル」を高校の3年間にわたって活用し、自己理解調査、成績表、インターンシップやオープンキャンパスの計画・報告・面接指導等の取り組みを含めて、自身のこれまでの学びや歩みを記録している。E高校のように、各教科特有の学習会やセミナーを各教科の時間で行うことは教科全体を通じたキャリア教育といえるだろう。

以上の2つの高等学校のキャリア教育の実践事例では、どちらの学校も教員が工夫を凝らして、生徒にとってより良いキャリア教育の機会を設けていることや、生徒や教員だけでなく学外の様々な人が教育現場に携わりながら協力し合って教育を行っていることが共通している。生徒一人一人が着実にキャリア発達を遂げていくためには、学外の人や組織・団体との連携は欠かせないものとなるだろう。次節では、特に中学校や高等学校における経験型の活動について、さらにみていきたい。

3. 中等教育段階における学校以外の場におけるキャリア教育

本節では、キャリア教育の視点から重要な役割を担う「生徒の発達段階に応じた系統的な体験活動」（文部科学省 2011）について分析してみる。

キャリア教育の核とされる職場体験は、公立中学校における実践が進んでいる。職場体験とは、生徒が事業所などの職場で働くことを通じて、職業や仕事の実際について体験したり、働く人々と接したりする学習活動である。公立中学校での職場体験の実施状況は2004年度においては全体の89.7%であったが、その後増加傾向を示し2017年度には98.6%となった（国立教育政策研究所 2021）。2018年度は0.7%下回り97.7%となったが、高止まりの状況といえよう（国立教育政策研究所 2021）。

国立教育政策研究所の生徒指導・進路指導研究センターが、キャリア教育や進路指導に関する実態を把握するために2012年に実施した中学校の生徒を対象とした調査報告書によると、「中学校に入学してからこれまであなたが学校で経験した学習や受けた指導の中で、自分の将来の生き方や進路を考える上で、役に立ったものはどれか」という設問に対して、職場での体験活動を「役に立った」、「少しは役に立った」と回答した生徒は全体の84.1%にのぼっている（国立教育政策研究所 2013）。職場体験活動は生徒にとって良い学びの機会であり、今後も中学校において欠かせない活動であると思われる。

しかし、他方で職場体験活動のみをもってキャリア教育を行ったものとしているのではないかという課題も指摘されている（文部科学省 2011）。その理由としては、事前学習における計画や研究の少なさや事後学習における振り返りの時間の少なさが挙げられる。また、場合によっては総合的な学習の時間における職場体験以外の活動がキャリア教育と関連性が薄いものとなってしまっていることも要因の一つのようである。そうした部分を改善するためには、職場体験に取り組む際の事前・事後学習に注力するとともに、学校における各々の教育活動と関連付けながら進めていく必要がある。

職場体験という活動が生徒に対してどのような影響を与えたかについて職場体験の事前・事後の実証的な研究を行った濱保・岡田（2018）によると、「自己有用感」(2)、「将来設計・展望」は増加したが、「職業観・勤労観」、「社会性」は減少したことが明らかとなっている。

「自己有用感」については職場体験で肯定的な評価を得ており、「将来設計・展望」については、職場体験の内容が家庭で話題になり、学校での学習が職場体験先でも役立つ場面があったようである。「職業観・勤労観」については、職場体験先の仕事内容が中学生にとって

充実感や役立ち感が持てるものではあったが、仕事内容が自分の将来やりたい仕事ではなかったり、学校での学習内容が将来の仕事につながるイメージを持つことができなかつたりしたようである。「社会性」については、職場体験先でのマナーの獲得や協調性は向上したものの、職場における社会人とのコミュニケーションを苦手と感じたことにより低下したと推測される。したがって、中学生に体験させる仕事内容や場・人間関係をどのように設定し、マッチングさせるかというマネジメントが職場体験活動の成功には不可欠となる。

続いて、高等学校における職場体験活動、すなわちインターンシップについてみてみよう。高等学校でのインターンシップの実施率は公立高等学校（全日制）普通科で 86.9%とこれまでと比べると比較的高くなっているが、「在学中に1回でも体験した生徒の割合」は全体で 34.9%であり、普通科においては 22.3%と低くなっている(国立教育政策研究所 2021)。換言すれば、インターンシップを実施している高校の割合が多くても、実際にインターンシップを体験している生徒は普通科では5分の1程度となっているのである(国立教育政策研究所 2021)。筆者のゼミ生たちも、高校時代にインターンシップに参加した経験を有する者はおらず、そもそも学校で実施しているのかどうかも分からないとのことであった。そのため、高等学校でインターンシップを実施していると認知する生徒が少ないということが、体験する割合が低い原因の一つにつながっていることも考えられる。

インターンシップを実施している公立高等学校（全日制・定時制）における教育課程等への位置付けの状況については、「現場実習等教科・科目の中で実施」が 13.8%、「学校外における学修として実施」が 10.5%、「総合的な学習の時間で実施」が 9.4%と多様である(国立教育政策研究所 2017)。そして、50.6%は「教育課程には位置付けずに実施」とされている(国立教育政策研究所 2017)。約半数の高等学校では教育課程には位置付けずにインターンシップを実施しており、生徒が自ら積極的に希望しない限り体験にはつながらないということになる。

おわりに

「高校生と保護者の進路に関する意識調査」(リクルートマーケティングパートナーズ 2018)によると、高校生が将来や進路について考えるときの気持ちについて質問したところ、「楽しい気持ち」は約 6%、「どちらかという楽しい気持ち」は約 17%であった。一方、「どちらかという不安」が約 41%、「不安な気持ち」が約 30%となっており、進路に不安を感じている高校生は7割にのぼる。同調査では、生徒が進路に関する情報提供や、進学や就職に関する具体的な指導を期待していることや、職業に関する知識をもって適性や可能性に気づかせてくれる指導を望んでいることが明らかになっている。つまり、中等教育段階におけるキャリア教育の充実が学校経営上の重要なファクターの1つである。

望月(2018)は、高校生のキャリア発達段階や高校生を取り巻く社会環境に応じた「縦」の連携をより一層活性化し持続させていく必要があると述べている。「縦」の連携とは、学年間・学校種間の緊密な協力や円滑な接続としている。インターンシップを含む様々な活動を記録し蓄積するキャリア・パスポートといった教材を活用し、中学校との接続や高等学校卒業後の教育や職業との接続が求められる。同時に、様々な教育力を生かす「横」の連携(3)として地域社会や家庭との連携・協力も必要であるとされる(望月 2018)。筆者の出身の高等学校では、同窓会の事務局と連携し、卒業生によるキャリア・ガイダンスが第2学年の終わりに実施されている。校務分掌でキャリア教育を担当するグループリーダーの教員が中心となって、コロナ禍ではオンラインにて行われている。筆者が在学中から、すなわちキャリア教育が声高に推奨される以前から、継続して実施されている。こうしたキャリア・ガイダンスをはじめ職場体験学習、インターンシップは、学校の外の人々のボランタリーな協力が無くては成り立たず、マネジメントには相応の労力と時間がかかることは否めない。学校の立地や規模により活動に制約が生じる可能性もある。だからこそ組織としての学校が行政機関・地域社会と協働するシステムの充実が一層求められる。

注

(1) 中学校や高等学校におけるキャリア教育の事例については、県レベルでの教育実践をはじめ、澁澤(2000)や山岡(2017)らの紹介・報告が数多く蓄積されている。

(2) 自己有用感とは、「人の役に立った」や「人に喜んでもらえた」など相手の存在なしには生まれてこない感情である。

(3) 学校と、家庭や地域社会、企業、勤労支援諸機関、職能団体・労働組合等の関係機関、NPO との協力や協同。

参考文献

一般社団法人全国高等学校PTA連合会・株式会社リクルートマーケティングパートナーズ, 2018, 『第8回 高校生と保護者の進路に関する意識調査 2017年 報告書』。

柏木智子・仲田康一編, 2017, 『子どもの貧困・不利・困難を超える学校 行政・地域と学校がつながって実現する子ども支援』学事出版。

勝野正章・村上雄介編, 2020, 『新訂 教育行政と学校経営』放送大学教育振興会。

国立教育政策研究所, 2013, 『キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書』。

国立教育政策研究所, 2020, 『平成30年度職場体験・インターンシップ実施状況等結果(概要)』。

澁澤文隆, 2000, 『中学校総合学習開発事例集』東京法令出版。

望月由紀, 2018, 「第10章 高等学校におけるキャリア教育実践の在り方」吉田武男監・藤田晃之編『キャリア教育』ミネルヴァ書房: 115-145頁。

文部科学省, 2018, 『中学校学習指導要領(平成29年告示)』。

文部科学省, 2019, 『高等学校学習指導要領(平成30年告示)』。

文部科学省, 2011, 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」。

文部科学省, 2011, 『中学校キャリア教育の手引き』。

文部科学省, 2011, 『高等学校キャリア教育の手引き』。

山岡昭吉, 2017, 「キャリア教育の理論と実践事例ー総合的な学習の時間の一指導事例ー」『千葉経済大学千葉経済論叢第57号』35-58頁。

濱保和治・岡田 大爾, 2018, 「キャリア教育における教育効果の測定に関する実証的な研究ー職場体験活動における生徒の意識に関する効果測定を通してー」『広島国際大学教職教室教育論叢第10号』121-130頁。

4. 論考 (2)

実用面に焦点化した英語能力評価の課題： 大学入学共通テストを事例に

大正大学文学部人文学科講師 行森まさみ

1. はじめに

2021年からスタートした大学入学共通テストでは、単に知識理解を問う出題ではなく、思考力、判断力、表現力を試すことが意図され、これまでの大学センター試験からの出題様式の変更が話題となった。2020年に発表された問題作成方針によれば、「どのように学ぶか」を踏まえた問題の場面設定を重視し、以下のように記述されている。

高等学校における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善のメッセージ性も考慮し、授業において生徒が学習する場面や、社会生活や日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する場面、資料やデータ等を基に考察する場面など、学習の過程を意識した問題の場面設定を重視する。¹

つまり、高等学校までで学習した知識量を問うというより、実際の授業で学習する場面そのものであったり、生活の中での課題発見・解決といった学習者にとってより身近な場面が想定された出題となっている。現行の学習指導要領では、英語の授業内では英語の音声、語彙、文法等の知識を習得するだけでなく、それを授業内で実際に活用できる場面等を想定し、コミュニケーション活動を通じて適切に使用することに主眼が置かれており、高等学校の授業と共通テストの連動が強化されたかたちである。

さらに、外国語（英語）の問題作成方針では、以下の変更について言及されている²。

- (1) 発音・アクセント・語句整序を単独で問う問題は削除
- (2) 実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視
- (3) 「リーディング」では概要や要点を把握する力や必要とする情報を読み取る力等を問う
- (4) 「リスニング」では生徒の身近な暮らしや社会生活に関わる内容について、概要や要点を把握する力や必要とする情報を聞き取る力等を問う
- (5) 音声については、多様な話者による現代の標準的な英語を使用
- (6) リスニングの読み上げ回数は、当面は1回読みと2回読みの両方の問題を含む構成で実施する
- (7) 「リーディング」と「リスニング」の配点を均等とする
- (8) ヨーロッパ言語共通参照枠のA1からB1レベルに相当する問題を作成する

上記の各変更点について、その趣旨と変更の内容の詳細を以下に考察していきたい。

2. 削除された問題形式

まず(1)については、英語という言葉そのものの知識を測る従来の設問が削除されたことになる。発音・アクセント問題の削除では、英語音声の体系的学習の機会を奪ってしまうのではないかと危惧する見方もあるが、現代の国際共通語としての英語の地位を考えれば、多様な発音・アクセントへの寛容性を養うためにも、ひとつの規範を強要する発音・アクセント学習を回避できることにはメリットがあるといえるのではないだろうか。母語話者英語の中でも地域・階級・コミュニティ等による違いがあるのはさることながら、国内共通語、あるいは国際共通語においては母語からの音声的転移があることは否めない。母語話者英語の中では地域方言および社会方言として、母音の発音が特に大きく異なるとされている。また、インド地域で使われる英語では、英米アクセントとはまったく異なる位置にアクセントが置かれる語彙がありながらも、それが国内共通語として十分に機能している。世界のあらゆる場面において、必ずしも英米規範に則った英語のみが話されているわけではないのは自明の理であり、日本語を母語とする英語話者自身もその規範からある程度の精神的解放があったほうが、より積極的な英語の発話に繋がることも予想できる。その意味においては、この発音・アクセント問題の削除は、英語音声に対する学習者の寛容で多様性に肯定的な態度に良い影響を及ぼすことを期待できるのかもしれない。

同様に(1)の語句整序問題の削除であるが、これはいわゆる文法の辞書的知識を直接的に問う問題がなくなったことを意味する。これまでの大学入試センター試験では、会話場面を想定し、文脈に沿ったかたちで文法的知識を問う出題がなされていた。短いやりとりの流れの中で発話の意図を解釈し、話すために必要な英作文力を問うものであった。実際の会話やり取りでは、単語を羅列して通じ合うコミュニケーションも状況によっては可能であり、必ずしも否定されるべきものではないが、伝達したい内容を誤解なく伝えようとするためには(また、相手の意図を理解するためには)一定の文法力が必要であるのはいままでもない。英語教育がコミュニケーション重視の方向に進んでから特に、「英会話」が出来るようになるためには「文法」は必要ない」といった極端な見解も散見され、英語の授業においても、コミュニケーション活動が重視される一方で、文法指導は必要以上に忌避される「会話 VS 文法」という単純な二項対立構造も看取される。ただ本来は基本的な文法力や語彙力が土台になれば、英語でのやりとりは難しいわけであり、相互に補完し合いながら習熟していくことが求められる。その点においては、この会話場面における整序問題は、発話に繋がる英作文力を測れる数少ない問題形式であり、その削除は惜しまれるところであるといえる。

3. 意図された「高校の授業との連携」

次に(2)の「実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視」については、共通テストの特徴として言及すべき大きな変更点である。例えば、2022年実施のリーディングの第1問は、以下の問題文で始まる。

You are studying about Brazil in the international club at your senior high school. Your teacher asked you to do research on food in Brazil. You find a Brazilian cookbook and read about fruits used to make desserts.

主語を“You”（あなた）とし、受験者本人がある状況に置かれていることが想定され、実際の授業などでの活動としての読解力が試されている。この設問は、ブラジルについてリサーチをすることになり、ブラジルの料理本を読むという設定である。また、別の設問では、カナダのトロントの動物園のウェブサイトをみて面白いサイトを見つけ、さらに情報を読み取るという設定がなされている³。第3問では、他国で日本文化がどのように紹介されているかに興味を持ち、イギリス人のブログの投稿記事を読む設定がある⁴。さらに第4問では、アメリカの大学に入学したばかりで、生活に必要なものをどこで買ったらいいか調べるために学生のブログを読むという設定⁵、第5問では、英語の授業で偉大な発明家についてプレゼンテーションをすることになり、ある記事を見つけ、その人物についてメモをまとめるという設定がなされている⁶。いずれも高校生にとって身近で、あまり無理のない状況設定であるといえる。

2021年6月発表の『大学入学共通テスト問題評価・分析委員会報告書』（2021, p. 357）⁷によると、「授業内での活動を意識した設定で、プレゼンテーション、スライド作成、ポスター発表、問題解決など、ただ単に読んで内容を理解するだけにとどまらず、発展的に情報を発信したり、誰かに情報を伝えたり、表現するといった様々な設定の下に設問が作られている。」と分析されている。さらに同報告書では、より現実に近い設定を与えることで、読解力を測るためだけでなく、発展的に思考・判断する力を問う出題であると評価している。そのうえで、高等学校における授業との連携について以下のように示唆した。

日々の授業において、情報や考えなどを理解したり、概要や要点を捉えたりすることを意識して言語活動を行う必要がある。また、ポスターの作り方、プレゼンテーションの仕方、スライドの構成など、実際に社会に出た時にも役に立つ内容を授業でも行うことで、授業での活動の幅が広がることが期待される。

これまで高等学校の英語授業では、英語によるスピーチやプレゼンテーション、ディベートといった活動を取り入れ、習得した英語の知識を活かす場を教室に設定することが求められてきた。各社の検定教科書にも、それらの活動を扱う単元項目が多く見受けられる。しかしながら、実際に授業でプレゼンテーションやディベートが行われてきたかどうかという点、その実施状況は期待されていたほどではなかった。ベネッセ教育総合研究所の2015年の調査⁸では、指導方法・授業内活動の頻度として「文法の説明」が89.4%⁹、「教科書本文の内容読解」が86.5%¹⁰であるのに対して、「ディスカッション」は9.1%¹¹、「ディベート」は5.1%¹²しか実施されていないことが報告されていた。この原因としては、ディスカッションやディベートを授業内で実施したところで大学入試のための英語能力が身につかない、あるいはその時間を文法解説や長文読解に充てたほうが入試対策に有益であるという考えが根底にあったことが十分に予想できる。また、高等学校の「英語表

現」¹³という科目では、その趣旨を「話すこと」や「書くこと」を通じて英語で発信できるような思考力、判断力、表現力を身につける」としながらも、実態としては文法演習が行われていることもあるという。このように、コミュニケーション活動を主軸とした高等学校の英語授業という前提を形骸化させないために、大学入学共通テストの出題との連携を図ったわけであるが、これがどこまで実際の授業に影響を及ぼすかについては注視していかなければならないところである。

4. リーディング問題でどのような能力を測るのか：CALP と BICS

次に、(3)の「リーディング」では概要や要点を把握する力や必要とする情報を読み取る力等を問う」についてみていきたい。これまでのセンター試験では、大学入学後のアカデミックな内容の英文読解に耐えうるべく、一定の思考レベルが必要な読解問題が出題されていた。ただ、その傾向も鈴木(2021, p. 30)によれば、2007年度のセンター試験あたりから「英語による情報処理能力の考査」という側面が顕在化してきていたという。2021年度からの大学入学共通テストからは、英文の分量が増えたものの、高度な読解力は必要とせず、一定の語彙力と情報処理能力だけで正解が得られる問題が多いのではないかという見方もある。

2022年度の第2問Aは、図書館案内の資料を題材に、必要な情報を拾い読みすることが求められる出題であった。IDカードを利用したコピー機の使用や、学習スペースにおけるPCの利用といった「図書館でできること」を選ぶ問題や、現在地は何階なのかを読み取り、さらに別のある部屋に行くには何階上がったらいいかを考えさせる問題など、文章から適切に情報を把握して対応するための情報処理能力を試している。これまでのリーディングテストでよく見られていたような、因果関係の把握や、論理的整合性などを問う問題ではなく、生活に即した場面において様々な情報を整理し、必要なものを検索する能力を試しているのである。さらに、2022年の第4問では、大学生のブログ記事を読みながら、最も安く電子レンジとテレビを購入するには、それぞれどの店で買ったらいいかといった出題がなされており、高度な思考力というよりは、一定の語彙力さえあればあとは生活に即した能力で解答できる問題となっている。

この点においては、これまでのセンター試験におけるリーディングの出題傾向がCALP (Cognitive Academic Language Proficiency : 認知・学習言語能力) を測るものであったとするならば、この共通テストにおける傾向はBICS (Basic Interpersonal Communicative Skills : 対人伝達言語能力) を測るものなのではないかと考えることができる。Cummins (1980, 1982) が提唱した言語能力に関するこの2つの区分は、言語能力全般を対人交渉場面における言語の表出 (BICS) と、そうしたコンテキストのない学術的状況で行われる言語の操作 (CALP) とに分けたものである。言語を使って生活するために必要な言語能力がBICSであり、これは場面に強度に依存し、その言語のコミュニティで生活している等、日常的に頻繁に触れていれば自然に身につくことも大いに考えられる能力である。その一方でCALPは、実際の場面が存在しない状況と各自の高度な思考能力によって決まるものであり、学習によって習得される側面をもった能力である。両者は相互に密接に関係しており、その区分もはっきりと分断できる性質のものではないが、生活のための言語能力と学習のための言語能力という違いがあるのは明白であ

る。共通テストのリーディング問題の新傾向が、場面に依存した生活のための言語能力を試そうとしているのは、やはり近年の英語教育の傾向が実用を重視している点に起因しているといえる。

大学入学のための英語能力試験として、このような実用的側面ばかりが焦点化されているのは適切なのかという議論もある。それには大学における認知的に高度な専門分野の英語読解に耐えうるのかという懸念などが挙げられるが、大学はそれぞれに二次試験を課しており、私立大学も個々に試験を行っていて、それらのテストでは大学の方針で CALP を試す問題が出題されていたりする。つまり、大学入学共通テストでは実用面としての BICS が試され、二次試験やその他のテストでは CALP が試されることもあるとすれば、受験生にとってはこれまでにない負荷がかかっているかもしれないが、異なる英語能力を測定し総合的に評価ができるシステムであるともいえる。

また、CALP が試されるテストと比べて、BICS が試されるテストにおいては、純粋に英語での情報処理能力を測れる可能性が高いという見方もある。情報検索や情報整理について、母語で行った際にはあまり差が出ないような問題を、外国語である英語で行った際に生じる差は純粋に言語処理能力の差と言えるのではないだろうか。一方で CALP が試されるテストでは、英語を通じた単純な情報処理能力だけではなく、さらに（場合によっては母語も介入した）高度な認知能力や思考力が必要とされる。同じ問題を母語で行った際にも結果に差が生じることがあれば、それは外国語を通じた処理能力だけではなく、さらに高次の思考力等も測っていることになる。大学入学共通テストは「思考力・判断力・表現力」を試すテストとされているが、BICS を試す問題が中心となる中で、英語科目における「思考力」はいったい何を指しているのか、検証する必要があるのではないだろうか。

5. リスニング問題の変更点

続いてリスニング試験の（4）内容、（5）音声、（6）読み上げの回数について考えていきたい。

まず（4）では「生徒の身近な暮らしや社会生活に関わる内容について、概要や要点を把握する力や必要とする情報を聞き取る力等を問う」とされているが、実際にかなり生活に密着した内容で出題されている。2022年の第1問では、モノローグや対話による状況説明を理解し、英文を読んで正解を選ぶもの（「バスで座席に座れた」、「携帯電話を忘れた」等）と絵図を見て正解を選ぶもの（「ピザはどれだけ残っているか」、「鳥がいる位置関係」等）で高校生に無理のない内容となっている。続く第2問でも、物の位置関係や記号の読み取り、映画館の座席についての聞き取りなどが出題されている。いずれも高校の授業内でも扱いそうな内容で、英語の難易度や読み上げるスピードも高校の教科書から大きく逸脱するものではない。

その中で、2022年のリスニング問題では、第5問の内容だけが他とは異なっていたといえる。「働き方」について大学での講義を聞きながら、内容をワークシートにまとめているという設定である。単語レベルは他の設問よりも高度でありながら、一定の長さのある講義形式の発話を処理し、鍵概念を把握しなければならない。さらには、その講義全体的な内容と図表から読み取れる情報を結びつけて正答を導き出す問題が設定されており、こ

れについては英語の言語的処理能力を測りながらも、情報から判断する思考力も測っている問題であるといえる。

また、(5)の「音声については、多様な話者による現代の標準的な英語を使用」という点では、問題作成方針通りにアメリカ英語とイギリス英語の両方が使用されていた。大学入試センターの問題作成方針(2019)には、「現在国際的に広く使用されているアメリカ英語に加えて、場面設定によってイギリス英語を使用することもある。¹⁴⁾」と明記されている。英語発音の多様性理解の重要性については既述のとおりであるが、大学入学共通テストで突然導入するのではなく、高校での授業内等で学習者にその多様な音声のある程度提示しておくなど、テストと授業との連携が必要なのはいうまでもない。TOEICテストでは、アメリカ英語、イギリス英語に加えて、カナダやオーストラリア、ニュージーランドの英語変種でも問題の読み上げがあり、それぞれのアクセントへの対応もリスニングのポイントのひとつとなっている。大学入学共通テストではそこまでの多様な変種を導入する必要はないだろうが、センター試験からのこの変更は、英語が国際共通語であることへの認識とそれに対応できる英語力の育成に舵が切られたことを示している。

イギリス英語の音声導入にちなんで、リーディングテストのほうでもイギリス式のスペル(realise)や、イギリス式の建物階の表現(the ground floor(1階))などが使われていることにも言及しておきたい。これらはいずれも設問に直接的な関係はないが、英語の音声のみならず、綴り字や文化的背景からくる表現の違いを提示する新たな方向性である。

(6)のリスニング問題の読み上げ回数は、1回の問題と2回の問題に分かれているが、状況を短い文で説明する、比較的平易な第2問までは2回読まれ、第3問以降の少し長めの問題文はすべて1回ずつになっている。実際のコミュニケーション場面では、聞き手が聞き取れない部分があれば、その場で聞き返し、再度の発話を求めることが自然に起きるが、第5問のような大学の講義形式であったり、第6問のような複数名の会話においては、実際には全文の繰り返しの依頼は難しいわけであり、これも実際の場面に沿った出題といえるのかもしれない。

6. リスニング問題における英語と日本語の混在

リスニング問題の特性を勘案した以上のような変更点があったが、リーディング問題との共通点は、各設問において場面・状況を明確化していることである。リーディング問題同様に、コンテキストを受験者にはっきりと理解させるべく、どの設問にも文脈説明が記されていた。場面をはっきりと想定したリスニング問題は、実際のコミュニケーションに沿ったものであるといえる。実際には起こりえないと批判を受けるリスニング問題の中には、例えば問題文として、空港の搭乗アナウンスが英語で流れ、設問で「ここはどこでしょう」といった場所を判断させる形式の問題などがある。この場合、実際の状況として考えると、当事者は一時的な記憶喪失かなにかになって自分がどこにいるかもわからず、英語で搭乗アナウンスが突然聞こえてきたので空港にいることを認識するという、現実的にはあまり想定できない聞き取り活動であるといえる。それと比較すれば、発話の場面設定が明示された問題は、実用向きである。

しかし、その説明提示の仕方について問題を提起したい。2022年の試験では、第3問の対話を聞いて英語の設問に答える問題で、以下のように日本語で状況説明の文が書かれている。

問 16 コンピューターの前で、生徒同士が話をしています。

Why is the boy having a problem?

- ① He didn't enter a username.
- ② He didn't use the right password.
- ③ He forgot his password.
- ④ He mistyped his username.

英語で対話の流れ、英語の問題文を読み、英語の選択肢から選ぶ問題であるが、状況説明だけが日本語である。これは受験者の負荷を下げ、すばやく状況を理解してもらうことを意図した日本語表記なのかもしれないが、日本語から英語へのコードスイッチングに対する負荷を考慮していないといえる。一度日本語で読んでから、また英語に切り替える負担が生じることになる。この問題形式は6問続くが、常に一度日本語で状況説明を読み、次に英語モードにスイッチするという二言語間の行き来が短時間で求められるのである。

第4問Bでは、4人の対話を聞き、示された条件に最も合うものを選ぶ形式の出題がなされているが、この状況説明と条件説明も日本語で非常に詳細に書かれている。

状況

あなたは、来月の読書会で読む本を一冊決めるために、四人のメンバーが推薦する本の説明を聞いています。

あなたが考えている条件

- A. 長さが250ページを超えないこと
- B. 過去1年以内に出版されていること
- C. ノンフィクションで、実在の人物を扱っていること

これを読んだ後で、英語の対話と英語の問題に答える設問である。英語のリーディング問題との区別を図り、リスニング問題では状況や設定は英文を読ませるのではなく日本語で、との意図を感じるが、「英語の授業は英語でおこなう」や「英語は英語で考えさせよう」などといった、これまでの中学高校の授業改革の動きとは逆行しているように思われる。リーディング問題は問題指示もすべて英語であり、紙面上では一切の母語の干渉がないが、リスニング問題では日本語の場面説明や注意書きなど、日本語の分量が多い。複雑な問題形式の説明や状況の詳細記述の必要性があるとしても、もう少し設定を単純化して日本語の分量を減らす方策を取るべきではないだろうか。

7. 4技能の完全なバランスは大学入試に必要か

(7)のリーディング問題とリスニング問題の配点については、ともに同じ100点配点となっている。これはリーディングばかりに偏重する授業や試験を改善すべきだという

理念のもと、4技能（読む・書く・話す・聞く）のバランスを考えた指導や評価を取り入れようとする立場の意見を反映しているものである。問題作成方針には、「グローバル人材の育成を目指した英語教育改革の方向性の中で高等学校学習指導要領に示す4技能のバランスの良い育成が求められていることを踏まえ、「リーディング」と「リスニング」の配点を均等とする。」¹⁵とある。具体的にどちらの技能にどの程度の比重を置くかは、各大学の判断となっている。

4技能については、いずれかひとつだけに偏ることは問題視されるべきかもしれないが、そもそも全てバランスよく指導・評価が可能であるかについても再考が必要といえる。中止となった英語民間試験の大学入試への採用は、スピーキングやライティングの試験も導入すべきとの見方に端を発したものだ。大学入学試験に英語を話したり、書いたりする問題が課されないために、高校の授業ではそうした発信する活動に時間を割かず、言語習得の観点からはアンバランスであるとされてきた。しかしながら、テストとしてその技能を試す場合、リスニング力やリーディング力を測るのと同様に測ることができるのか疑問が残る。文部科学省（2019）による「英語の4技能に関する現状・課題・今後の方向性」では、スピーキングには一人である程度のまとまったスピーチをする「発表」と、一人以上の相手との会話である「やり取り」の2種類があると区分されている。

【4技能の「話すこと」についての2領域】¹⁶

発表	多様な考え方ができる話題や時事問題・社会問題などについて話して説明するとともに、自分の意見や考えなどをまとめ、適切な語彙・表現・文法を用いて論理的・批判的に話して伝える力
やり取り	身近な話題や知識のある話題について、情報や意見について交換するとともに、自分の意見や考えをまとめ、適切な語彙・表現・文法を用いて伝え合う力

このうちの「発表」についてはテストでその能力を測る際に、あるテーマが与えられ、それについてのスピーチをするといった形式で、ライティングテストと同様に、文法・語彙・発音・表現が意味伝達に十分なものであるか、文章構成は適切か等の採点基準が設定できる。しかし、もう一方の「やり取り」については、それほど単純に採点の基準設定ができるとは考えられない。相手があつての言葉のやり取りの力を測るということは、一方的に情報伝達ができるかだけでなく、その場に応じた適切な情報量と表現が必要とされ、相手からの反応・メッセージを理解する努力をもって、その場のやり取りを構築していく一連の談話を把握することである。4技能の中でもこの領域は、テストで一律に評価基準を設けて測るには、あまりにも複雑であるといえる。

授業でこの「やり取り」の活動を積極的に取り入れていくことは必要であるが、それをテストとして測るかどうかは別問題である。大学入学共通テストでも、言語の性質を考慮し、一律な4技能の測定を前提としたテスト運用は避けるべきだと考える。

8. おわりに

これまで、大学入学共通テストの英語試験について、変更点の趣旨と内容をみてきたが、問題作成の意図である「生活に結びついた場面設定」を確認することができた。その上で、英語試験で試される「思考力」とは何を指すのか、また、「英語で英語を理解させる」と謳った中学高校の授業方針は大学入学共通テストと連動しているのか、さらには、リーディング、リスニングを含めた4技能の能力はテストでもバランスを重視する必要があるのか等について議論した。大学全入時代にあたって共通テストがもつ意味合いも変化を余儀なくされているが、言語教育が持つ性質から離れた「テストのためのテスト」であってはならないと考える。

注釈

- ¹ 大学入試センター（2020）『令和3年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針』p. 10
- ² 大学入試センター（2020）同上, p. 14
- ³ 第1問Bの問題設定
“You are looking at the website for the City Zoo in Toronto, Canada and you find an interesting contest announcement. You are thinking about entering the contest.”
- ⁴ 第2問Aの問題設定
“You are on a Future Leader summer programme, which is taking place on a university campus in the UK. You are reading the information about the library so that you can do your coursework.”
- ⁵ 第4問の問題設定
“You are a new student at Robinson University in the US. You are reading the blogs of two students, Len and Cindy, to find out where you can buy things for your apartment.”
- ⁶ 第5問の問題設定
“In your English class, you will give a presentation about a great inventor. You found the following article and prepared notes for your presentation.”
- ⁷ 大学入試センター（2021）『大学入学共通テスト問題評価・分析委員会報告書』
- ⁸ ベネッセ教育総合研究所（2015）『中高の英語指導に関する実態調査2015』
全国の中学校英語教員（1,801名）、高等学校英語教員（2,134名）を対象に実施された郵送法による質問紙調査
- ⁹ 「文法の説明」を「よく行なう」が46.8%、「ときどき行なう」が42.6%
- ¹⁰ 「Q&A（質疑応答）による教科書本文の内容読解」を「よく行なう」が55.2%、「ときどき行なう」が31.3%
- ¹¹ 「ディスカッション」を「よく行なう」が1.7%、「ときどき行なう」が7.4%
- ¹² 「ディベート」を「よく行なう」が0.8%、「ときどき行なう」が4.5%
- ¹³ 現行の「英語表現」は2022年度より「論理・表現」に変更される。

-
- ¹⁴ 大学入試センター（2019）『大学共通テスト英語におけるイギリス英語の使用について』
- ¹⁵ 大学入試センター（2020）p. 14, 1に同じ
- ¹⁶ 文部科学省（2019）『英語の4技能に関する現状・課題・今後の方向性』
参考文献
- Cummins, J. (1980). The entry and exit fallacy in bilingual education. NABE Journal, 4, 25-60. Washington DC: National Association of Bilingual Education.
- Cummins, J. (1982). Tests, achievement, and bilingual students. Focus, 9, 1-7. Washington, DC: National Clearinghouse for Bilingual Education, George Washington University.
- 鈴木貴之（2021）「予備校講師から見た大学入学共通テスト」『英語教育』2021年3月号, 30-31頁
- 大学入試センター（2019）『大学共通テスト英語におけるイギリス英語の使用について』
<https://www.dnc.ac.jp/albums/abm00037500.pdf>
- 大学入試センター（2020）『令和3年度大学入学選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針』
<https://www.dnc.ac.jp/albums/abm.php?f=abm00040459.pdf&n=%E5%95%8F%E9%A1%8C%E4%BD%9C%E6%88%90%E6%96%B9%E9%87%9D.pdf>
- 大学入試センター（2021）『大学入学共通テスト問題評価・分析委員会報告書』
<https://www.dnc.ac.jp/albums/abm.php?f=abm00040477.pdf&n=%E8%8B%B1%E8%AA%9E%EF%BC%88%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%83%87%E3%82%A3%E3%83%B3%E3%82%B0%EF%BC%89.pdf>
- ベネッセ教育総合研究所（2015）『中高の英語指導に関する実態調査 2015』
https://berd.benesse.jp/up_images/research/03_Eigo_Shido.pdf
- 文部科学省（2019）『英語の4技能に関する現状・課題・今後の方向性』
https://www.mext.go.jp/content/20191224-mxt_daigakuc02-000003411_6.pdf

4. 論考 (3)

特別支援学校における性被害予防教育の実態把握

東京農工大学准教授 三浦巧也

I. はじめに

本研究では、特別支援学校における性被害予防教育への意識および、実践を把握することを目的とした。

II. 方法

2-1. 調査時期

2021年8月に郵送法にて実施した。回答は、書面および Google フォームにて求めた。

2-2. 調査対象者

特別支援学校に勤務する養護教諭を対象とした。全国の知的障害・肢体不自由・聴覚障害・視覚障害・病弱の特別支援学校 1182 校に調査を依頼した。不備のある回答を除き、411 校の養護教諭より回答を得た(34.8%)。養護教諭の教員歴は、平均 16.0 年であった($SD=11.3$)。また、特別支援学校での勤務年数は、平均 8.8 年であった($SD=8.1$)。現在の勤務校(障害種)について複数可による回答で求めたところ、知的障害 278 名(52.3%)、肢体不自由 110 名(20.7%)、聴覚障害 57 名(10.7 名)、視覚障害 50 名(9.4%)、病弱 33 名(6.2%)であった。

2-3. 調査項目

性被害を予防する教育の意識について、「積極的に取り組むべき」「必要に応じて取り組む」「どうしたらよいか分からない」「その他」「該当選択し無」の選択肢を設けて質問した。また、性被害を予防することを目的とした教育実践の有無をたずね、経験がある場合は自由記述で具体的な内容を自由記述で質問した。

2-4. 分析方法

性被害を予防する教育の意識については、障害種別に 5 つの選択肢の人数と割合を算出

した。

性被害を予防することを目的とした教育実践の事例については、計量テキスト分析システム KH Coder による共起ネットワーク分析を行った。共起ネットワーク分析は、抽出語の関連性を把握するために用いる分析方法である。この分析では、出現数の多い語ほど大きい円で示され、強い共起関係ほど太い線で示される。本研究では、抽出された語の最小出現数を 8 とした。そして、描画する共起関係について、Jaccard 係数を用いて算出した。なお、本研究では、障害種を外部変数にした検討も行った。

III. 結果と考察

3-1. 性被害予防教育に関する意識

分析の結果、「必要に応じて取り組む」の回答が最も多く、264 名であった (50.0%)。次いで、「積極的に取り組むべき」の回答が、247 名であった (46.8%)。性被害を防止する教育については、回答した養護教諭の約 5 割程度が肯定的な意識を抱いており、一方で「どうしたらよいか分からない」といった、教育方法に困難さを抱いている養護教諭は少ないことが示された (14 名、2.7%) (表 1)。

表 1. 性被害予防教育に対する意識 (n=528)

	視覚		聴覚		知的		肢体 不自由		病弱		計	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
積極的に取り組むべき	13	2.5	31	5.9	143	27.1	46	8.7	14	2.7	247	46.8
必要に応じて取り組む	33	6.3	24	4.5	128	24.2	61	11.6	18	3.4	264	50.0
どうしたらよいか分からない	3	0.6	0	0.0	7	1.3	3	0.6	1	0.2	14	2.7
その他	1	0.2	1	0.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	0.4
該当選択肢なし	0	0.0	1	0.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.2
計	50	9.5	57	10.8	278	52.7	110	20.8	33	6.3	528	100.

3-2. 性被害予防教育の実践

性被害を予防するための教育を実際に取り組んだ経験があると回答したのは、193 名であった (47.0%)。そして、具体的な取り組みについて、189 名 (97.9%) から記述を得た。分析を行う前に、記述内容が多岐にわたっている場合は、意味が理解できる最小限の内容に分割処理を施した。

記述内容全体を共起ネットワーク分析した結果、図 1 となった。「他人との距離の取り方」「嫌だと主張することについて」「パーソナルスペースについて」「異性との交際について」「個別指導の充実化」「女子生徒への対応の連携強化」「保健授業による実践」「デート DV

について」「外部講師による講演」が抽出された（図1）。

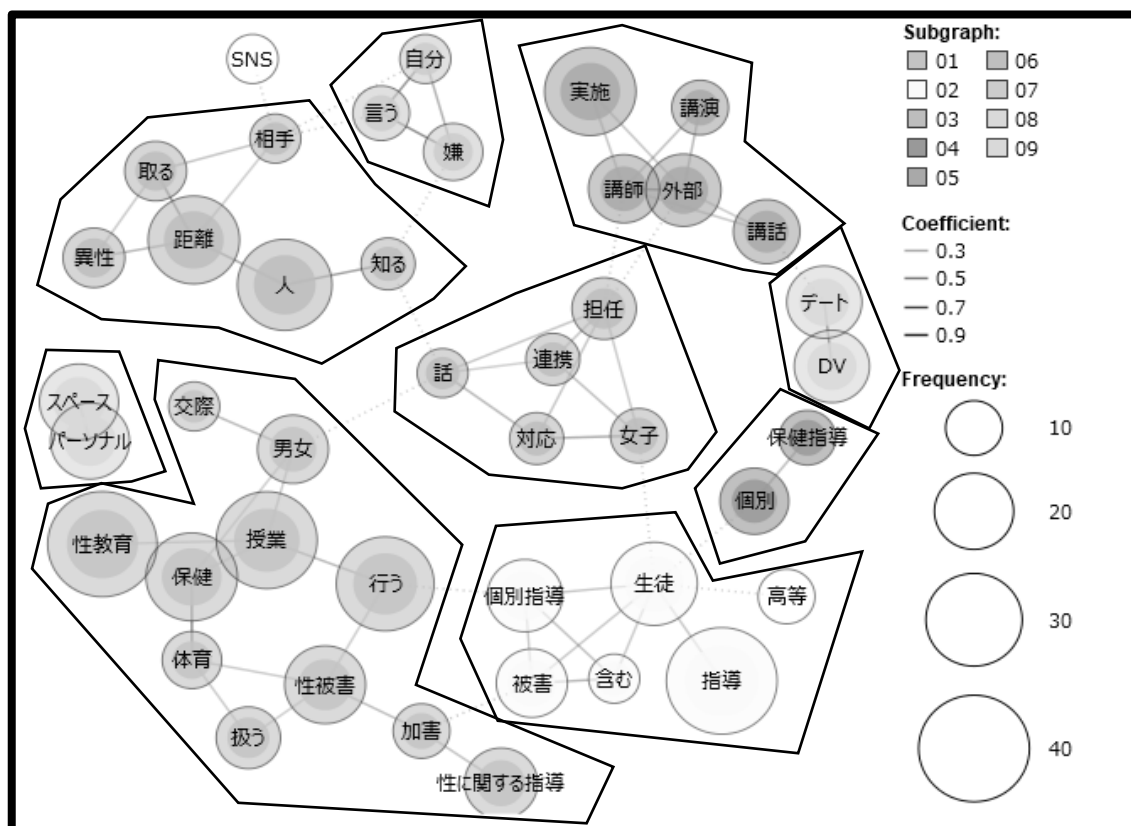


図1. 性被害予防教育の取り組み

次に、5つの障害種を外部変数として、共起ネットワーク分析を行った（図2）。視覚障害は「加害にもなる」「SNSによる被害」、聴覚障害は「デートDV」「相手に嫌という」、病弱は「連携強化」「講師による指導」、知的・肢体不自由は共通して「プライベートゾーン」が特徴的なキーワードとして抽出された。知的発達水準や障害種別に応じて、性被害を予防する取り組みにおける重点に相違があることが示唆された（表2）。

IV. まとめ

本研究では特別支援学校に勤務する養護教諭の約半数が積極的に予防的な性教育に取り組む意欲を示していた。また、教育実践として知的発達水準や障害種別に応じて、性被害を予防する取り組みにおける重点に相違があることが示唆された。

表2. 特徴的なキーワードと障害種別との関連

- ・視覚障害：「加害にもなる」「SNSによる被害」
- ・聴覚障害：「デートDV」「相手に嫌という」
- ・病弱：「連携強化」「講師による指導」
- ・肢体不自由：「性に関する授業」
- 知的・肢体不自由に共通：「プライベートゾーン」
- 知的・視覚障害に共通：「性被害への個別指導」
- 肢体不自由・病弱に共通：「パーソナルスペース」
- 聴覚障害・病弱に共通：「外部講師の授業」
- 聴覚障害・視覚障害に共通：「男女関係による被害」
- 視覚・聴覚・知的障害に共通：「距離の取り方」

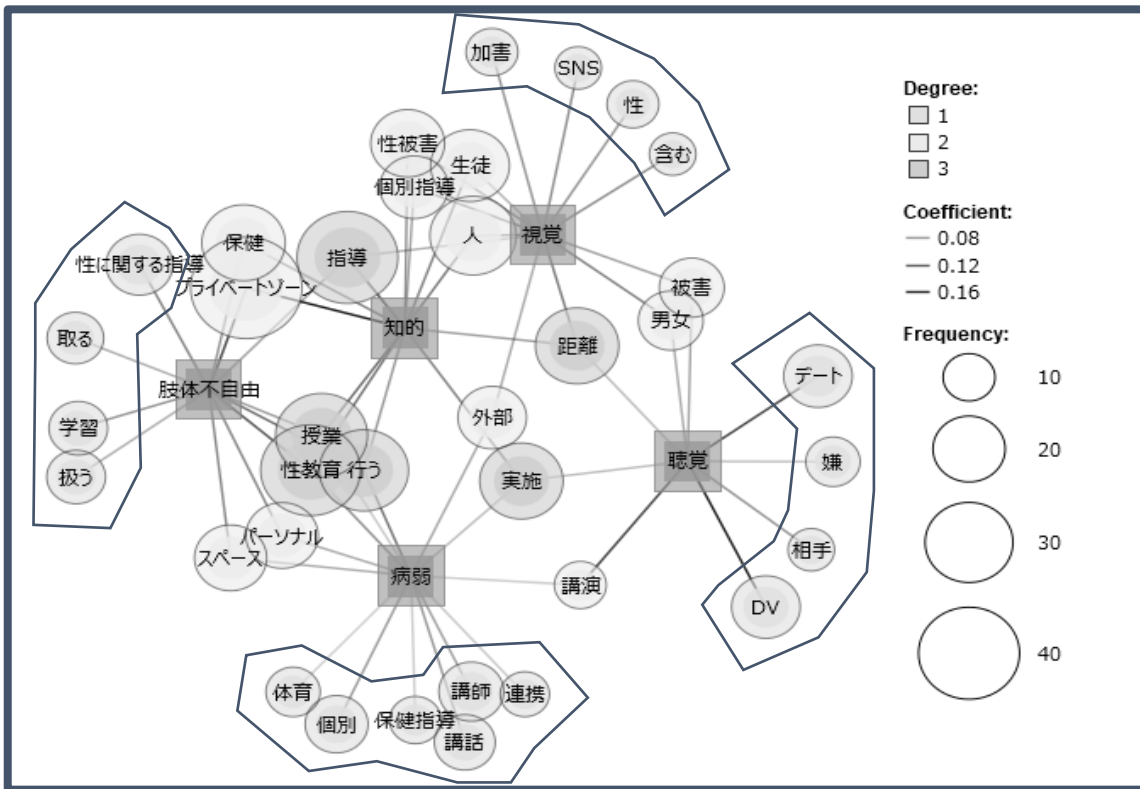


図2. 性被害予防教育の取り組み（障害種別）

5. 現場からの報告

都立高校における生徒指導・進路指導の現場より

東京都立葛飾総合高等学校主任教諭 浦部ひとみ

はじめに

東京都立葛飾総合高校に赴任後4年目を迎え、現在進路指導部の主任を務めております、浦部と申します。本校は平成17年に東京北東部地区で初めての総合学科高校として東京都立本所工業高等学校内に開設準備室が設置され、平成19年に第1期生を迎えて開校しました。そして今年4月に第16期生が入学します。総合学科高校とは、一人ひとりの興味・関心や希望進路に応じて、普通科目・専門科目・学校設定科目等の多様な選択科目の中から、自分で科目を選択し、時間割を組み立て、学習することによって、自分自身の能力や可能性を伸ばすことを主眼とした高校です。



本校では「自分の可能性を最大限に引き出す」として、校訓は「進取創造」（自ら進んで物事に取り組み、新しい物をはじめて作り出す）「自主自律」（自ら立てた規範に従って、自ら厳しく行動する強い気持ち）となっています。また、教育目標は「人間尊重の精神を基盤として、心豊かに、たくましく生きる生徒を育てるために、①社会の変化に主体的に対応し、時代を切り拓いてゆく豊かな創造性と個性をもつ生徒（創造）、②自らの在り方生き方を考え、明確な目的意識をもって意欲的に挑戦する生徒（立志）③思いやりのある心と規範意識を身につけ、高い知性をもつ社会に貢献できる生徒（貢献）の育成に向けた教育を推進するとしています。特色ある教育活動として(1)充実したキャリア教育と「総合的な学力」(＝「葛総力」:基礎的汎用的能力)の育成、(2)学力向上の取組、(3)部活動・委員会活動の推進と生活指導の徹底:『時を守る 場を清める 礼を正す』、(4)地域連携の推進としています。生徒の卒業後の進路は、四年制大学50%、短期大学3.1%、専門学校38%、就職11.5%(令和2年度)となっています。



私の教職経験は、初任の夜間定時制高校に始まります。右も左もわからずに飛び込んでいった夜間定時制高校でしたが、結果定時制高校2校で15年間の教員生活を送ることになりました。その後地元である足立区内の全日制のいわゆる進路多様校3校で教育活動に携わってまいりました。その間学校における教育活動に加え、一昨年度まで事務局長を務めた(現在は事務局次長)東京都教育委員会の研究推進団体である、東京都高等学校進路指導協議会(都高進)の活動に関わることになりました。

都高進は設立以来65年の歴史をもち、全国高等学校進路指導協議会の1ブロックおよび関東地区高等学校進路指導協議会の一員として、都立高校および都内約250校の私立高校により組織されております。大学、専門学校、就職、進路学習の4部会をもち、総会を初め、各研究協議会や新規高卒者就職問題連絡会議のための都内アンケートの集約、厚生労働省、文部科学省との定例会などをもっています。令和3年11月には、関東地区高等学校進路指導研究協議大会東京大会をオンラインで開催したところです。



生徒指導と進路指導、キャリア教育

先に述べましたように、夜間定時制高校および進路多様校における経験から、高校現場における生徒指導と進路指導、キャリア教育は多くの点で連動していると実感しているところです。東京都教育委員会による「都立高校中途退学者等追跡調査」（平成25年）によると、「中途退学した理由」および「どのようなことがあれば、中途退学しなかったと思うか（本人の考え）」は以下の図表のようになっています。

(4) 主な調査分析

ア 中途退学した理由

①退学した時の本人の状況〔調査票 問4-(1)に該当〕

(単位 96)

退学した時を振り返ると、次のようなことはあなたにどのくらいあてはまりますか。それぞれについて、あてはまる番号に120をつけてください。(4件法による質問)	学校	学習意欲	正社員	フリーター	家事育児	ニート
A勉強についていけなかった	29.6	36.9	29.0	28.9	33.4	32.2
B遅刻や欠席などが多く進級できそうになかった	59.1	65.5	63.2	68.8	70.8	57.6
I通学するのが面倒だった	55.4	45.8	64.5	62.1	60.4	52.5
F自分の生活リズムと学校が合わなかった	43.2	37.5	31.6	41.1	33.4	35.6
D友人とうまくかわれなかった	44.6	38.7	19.7	28.7	22.9	47.4
E精神的に不安定だった	46.9	51.8	23.7	36.2	31.3	57.6
H問題のある行動や非行をしてしまった	20.7	16.0	44.8	23.6	18.8	11.9
I学校から校則違反を注意されていた	24.9	20.8	43.4	29.5	20.9	18.7
L学校とは別に他にやりたいことがあった	30.6	29.8	48.7	29.2	35.4	15.3

※「とてもあてはまる」、「まああてはまる」の合計の割合を指す。

※60%以上＝濃い網掛け 40%以上＝薄い網掛け

②どのようなことがあれば、中途退学しなかったと思うか（本人の考え）

〔調査票 問4-(5)に該当〕

(単位 %)

今、振り返ってみて、どのようなことがあれば退学しなかったかと思えますか。あてはまる番号にすべて○をつけてください。	学校	学習意欲	正社員	フリーター	家事育児	ニート
人付き合いがうまくできること	36.2	38.7	9.2	27.7	18.8	39.0
友人や仲間からの手助けがあること	16.0	17.3	6.6	11.4	8.3	16.9
先生の理解や応援があること	16.0	22.0	15.8	19.7	12.5	20.3
規則正しい生活ができること	31.9	29.2	26.3	31.1	27.1	32.2
通学しやすいこと	22.1	24.4	30.3	26.5	27.1	18.6
働くための知識や経験が学校で身につくこと	9.9	11.3	23.7	12.2	6.3	16.9
勉強することの意味がわかったこと	20.2	22.0	15.8	26.5	20.8	25.4
学校に自分の居場所があること	31.9	29.8	7.9	20.9	16.7	32.2
何があってもやめていた	14.6	13.1	22.4	15.8	18.8	25.4

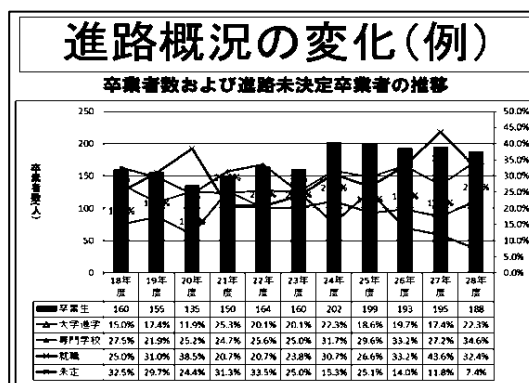
※類型ごと、上位3つを網掛け

東京都教育委員会「都立高校中途退学者等追跡調査」報告書（平成25年）

また、調査の分析から見てきた特徴として以下のように示されています。

- (1) 「フリーター層」「ニート層」等は中学時代の出席状況や成績が悪く、中学からのつまずきがある。
- (2) 中途退学理由では「遅刻や欠席が多い」「通学が面倒」が見られ、基本的な生活習慣の確立がされていない。（下線浦部）
- (3) 「学習層」「ニート層」では、「精神的不安定」「友人とうまく関われなかった」が多く、メンタル面での課題がある。
- (4) 全体的に、中途退学後の支援機関の利用が著しく低く、既存の就労や就学に関するサービスが当事者に届いていない。

以上の分析結果から、基本的な生活習慣が確立されていないことが不登校や中途退学に繋がっている状況が把握できます。なお、右図に示しているグラフは、前任校の卒業生内訳および進路内訳の経年変化をグラフに示したものです。棒グラフが卒業生数、折れ線グラフが進路未定卒業生数を表しています。一時期240名入学135名卒業、すなわち3年間で100名以上の生徒が中途退学し、しかもその三分の一以上が進路未定のまま卒業するといった厳しい状況がありました。



この事態を打開すべく新たな取組を実践していく中でポイントとしたのは、学校をプラットフォームにとらえ、社会という大きな枠組みのなかで外部資源を最大限に活用し社会全体で子どもたちを育てるという視点です。真の意味での「開かれた学校」をイメージし様々な取組を重ねていく中で、生徒のそして教員の意識に徐々に変化が表れてきたと言えます。なかでも東京都教育委員会の都立学校自立支援チーム派遣事業の活用は、学校を大き

く変化させました。それは教育委員会が都立高校等と連携し、中途退学の未然防止、不登校生徒への支援、生徒及びその家族が抱える課題への福祉的支援、都立高校を中途退学した生徒への 就労・再就学支援などを行う事業です。「自立支援チーム」は、ユースソーシャルワーカー (YSW) と、ユースアドバイザー (YA) によって構成されます。YSW とは、若者の自立を支援する「ユースワーカー」の役割と「ソーシャルワーカー」の役割を一体化したものであり、YA は、YSW をマネジメントするとともにスーパーバイザーとしての役割を果たすとされます。また、ユースワークの役割は、「若者の個人的及び社会的成長と彼らの社会的包摂」であり、ソーシャルワークの役割は、「若者を取り巻く生活、家族等の様々な問題の解決と軽減」となっています。また加えてハローワークやNPO、自治体などとの連携のもと、生活指導、進路指導、キャリア教育、学習支援など様々な取組を展開していくこととなりました。このように学校における教育活動においては、子どもたちの学ぶことへの意欲を導き出す工夫とともに、生徒指導と進路指導そしてキャリア教育とが連動し、相互に関わりあうことに意味があると考えます。

若者の社会的・職業的自立を目指す

都立学校「自立支援チーム」派遣事業

東京都教育委員会は、平成26年度から都立高校等における不登校・中途退学未然防止対策として、都立学校「自立支援チーム」派遣事業を実施しています。

都立学校「自立支援チーム」とは

自立支援チームの役割は、都立高校等と連携し、①中途退学の未然防止、②不登校生徒への支援、③生徒及びその家族が抱える課題への福祉的支援、④都立高校を中途退学した生徒への就労・再就学支援を行うことです。

自立支援チームは、ユースソーシャルワーカー(YSW)と、ユースアドバイザー(YA)によって構成されます。YSWとは、若者の自立を支援する「ユースワーカー」の役割と「ソーシャルワーカー」の役割を一体化したものであり、YAは、YSWをマネジメントするとともにスーパーバイザーとしての役割を果たします。

ユースワークの役割は、「若者の個人的及び社会的成長と彼らの社会的包摂」であり、ソーシャルワークの役割は、「若者を取り巻く生活、家族等の様々な問題の解決と軽減」です。若者(高校生)の成長を阻害する諸要因の解決を図りながら、自立した社会人へと成長していくための支援(ハローワークと教育を統合させた若者への支援)がYSWに期待されているのです。

就労支援系、福祉支援系のYSWが都立学校を支援します

今年度、東京都教育委員会が採用したYSWには、①キャリアコンサルティング技能士やキャリアカウンセラー等の資格を有する就労支援系のスタッフと②社会福祉士、精神保健福祉士、臨床心理士等の資格を有する福祉支援系のスタッフが含まれます。

都立高校への支援方法には、二つの方法があります。一つはYSWがチームを編成して、特に中途退学等の課題のある都立高校を継続的に訪問し、生徒を支援していく(継続派遣型として都立高校34校を指定)というもの、もう一つは都立学校(都立特別支援学校を含む。)からの要請を受け、その要請内容に応じてYSWを派遣するというものです。

地域にある社会的課題とのネットワークを進めます

自立支援チームは、高校生や中途退学者の社会的・職業的自立を支援するため、地域にある社会的資源とのネットワークづくりにも取り組みます。

具体的には、地域にあるハローワークや地域若者サポートステーション、職業能力開発センター等の雇用・就労支援機関を始め、子供発達支援センターや福祉事務所等といった福祉関連機関、そして精神保健・医療機関等と都立高校関係者が連携を図るためのプラットフォーム(「橋」)づくりを目指しています。

継続派遣校における事業実施体制

ユースソーシャルワーカーとスクールカウンセラーの違いは？

	スクールカウンセラー SC	ユースソーシャルワーカー YSW
主な目的	不登校をはじめとする生徒の課題行動の未然防止と早期発見・早期対応	中途退学未然防止、不登校対応、進路決定など生徒の社会的・職業的自立
主な役割	生徒の悩みや不安を受け止めて相談に当たったり、関係機関と連携して必要な支援を実施	生徒の課題を個別に把握し、就労機関や福祉機関等との連携により生徒が自立した社会人へと成長していくための支援を実施
具体的な職務	<ul style="list-style-type: none"> 生徒や保護者へのカウンセリング活動 教職員、教職員に対する支援・相談・情報提供 生徒へのアセスメント活動 学校内におけるチーム体制の構築 関係機関等の紹介 等 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の抱える課題のアセスメント 就労、福祉、医療機関等機関との相談、仲介、代行 個別の支援プランの作成への支援 保護者、教職員に対する支援、相談、情報提供 等
活動場所	主に学校内	学校内外

東京都教育委員会生涯学習情報ホームページより

高等学校新学習指導要領と探究活動

一方 2022 年度より実施される高等学校新学習指導要領においては、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を、学力の 3 要素（「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」）「学びに向かう力、人間性等」とし、「生きる力」はより具体化されました。育成したい資質・能力を明確にしたカリキュラム・マネジメントが求められ、「学びの地図」として

学校と社会が共に人材育成を行うという共通のスタンスが確認されました。「総合的な探究の時間」により、これまでの学校教育における「アクティブラーニング」の手法が一段と加速されていきます。正解は一つではなく、様々な可能性が想定され、学校は生徒が自ら学ぶ姿勢を培う場となり、教師が生徒を「指導」することが馴染まない場面も増えます。また集団の中で、一人ひとりが主体的に行動する力を養い、具体的な役割意識を明確にもつことも求められます。

一方探究活動は、子どもたちが今後想定外の未知の事態に遭遇したときにどう対処するかを考える活動でもあります。先人のこれまでの知識や経験を踏まえ、さらにはそこから新たな発想を導き出していきます。そのためには研究成果を共有し、広い視野から課題の解決に繋げていく必要が生じていきます。答えは幾通りもあったり、あるいは答えが見出せないこともあります。肝心なのは、人と人が互いに手を携え、一人ひとりが課題に向き合ってその人の可能性を最大限に発揮していくことです。また一方、それは多様な発信の仕方をも意味します。いわゆる人前に出るのが得意な生徒だけではなく、ごく一般的な生徒であっても自ら主体的に考え、取り組み、発信していく姿勢を身に付けていくことを目指します。

今後の課題と展望

2020、2021年はコロナ禍に明け暮れ、翻弄された年になりました。本校でも昨年度当初の休業期間に始まり、学校生活のあらゆる場面でさまざまな影響を被ってきました。オンラインによるホームルームや授業など、新たな要素も取り入れられましたが、授業、部活動、学校行事など、学校生活は大きな制約と新たな計画の立案、見直しの連続となりました。

それと同時に昨年は高大接続改革の大きな変革の年でもありました。総合型選抜、学校推薦型選抜、一般選抜と入試形態の名称が変わり、「センター試験」は「大学入学共通テスト」へと移行しました。それらに加え、記述式問題、大学入試英語成績提供システム導入の見送りなど、受験対策に影響する変更現場は混乱しました。また昨年度の3年生は、1年生のときに主体性の評価が大学入試の可否にも関わる可能性があるとのことから、一時期学習履歴の蓄積も新たな「入試対策」の要素として加わるとされました。結果としてそれも見送られましたが、いずれにしても、昨年度、今年度の3年生のなかには、混乱の中で迎えた高校生活の集大成としての最後の1年間、達成感、充実感が十分に得られないままであった生徒も多かったのではないかと感じています。

そして現在、とりわけ現場の教員として懸念しているのは、生徒が自らの将来を見定めていくべき大事な高校時代に、従前のようにその拠り所となっていた知識や経験の習得機会が失われ、その代替がまだ十分に機能しているとは言えない点です。また、以前からの生徒、保護者、教員同士のつながりや、大学・専門学校、事業所、NPOなど外部との連携なども思うように保てなくなり、ともすると今後が見通せないとして、教育活動にあたる教員自体が孤立感を深めてしまうケースもあります。では今後を見通した際に、教員は一体いま何に向き合い、どのように取り組んでいけばいいのか、そして従前からの知識やネットワークを、どのように維持し次世代に繋いでいけばいいのか、ということについて考えていきたいと思えます。

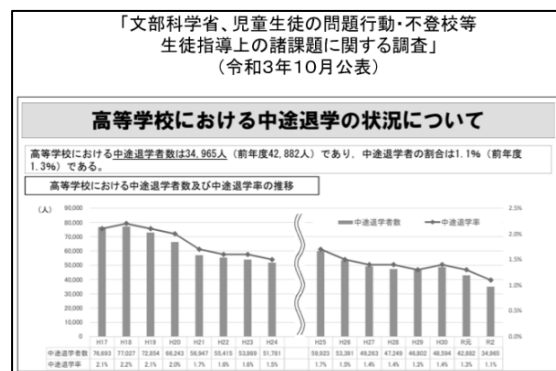
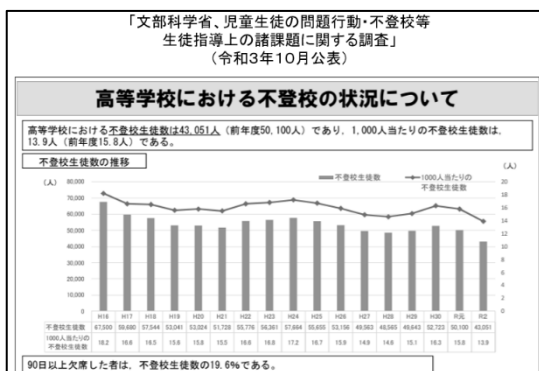
まず具体的に生徒指導・進路指導に関しては、知識や体験の共有のために、若者の人材育成に関わっている多くの方々からの正確な情報を得たいと考えます。例えば大学において、

学部・学科の統合や新設の意図、入試の変更点等の周知、現状アルバイトやサークル活動なども含め学生生活がどう展開されているのか、などについてです。対面授業とオンライン授業をどう組み合わせる実施しているのか、インターンシップや就職活動にはどのような影響があるのか、学生の声はどのように集約し、反映されているのか、などの点です。またそうした学生生活を支援するトータルフォローアップ体制はどのように構築されているかといったところにも関心があります。好事例のみならず、学生生活の破たんに関わりかねない実際例や、残念ながら中退を余儀なくされた例なども参考になります。そうした情報共有がお互いの信頼関係や共有、協力体制へと繋がるのではないかと考えます。

また一方高校側の実情ですが、とりわけコロナ禍にあって経済状況や家庭環境が生徒の学習状況や進路活動に少なからぬ影響を与えていること、高校での進路活動や学習環境、学校でのコミュニケーションの取り方も以前とは様変わりしていること、オンライン環境一つ取り上げてもかなり学校間、生徒間格差が生じていることなどが挙げられます。さらには逆に、大学から見て高校での教育活動の見えにくい点や高校の教員に対しての要望などを聞かせていただければと思います。そして双方で情報のすり合わせを行い、生徒、学生の学びが決して途切れないような仕組みづくりへと繋げることができればと考えます。実際学び方が多様化していくなかで、特にコロナ禍で見えにくくなっている、課題を抱えた高校生の在学中および進学後に向けたサポートは、今後ますます重要になってくると思います。そしてそうした一連の流れが、実質的な高大連携の仕組みへと繋がっていくのだと考えます。

最後に

高等学校新学習指導要領の「予測不能な場面に遭遇したときに生き抜く力」、「知識を活用して新たな価値を生み出す力」は、今まさに求められているものです。この力は従前からの知識や経験を総動員し、コミュニケーションの原点にかえて人と人との繋がりをあらためて見直すことから導き出されていくものと考えます。このコロナ禍のなかで、若者、特に高校生はまだ経験が少ない分、どうしても目の前のことに大きく目を奪われてしまいがちです。こちらの表をご覧ください。これは文部科学省より昨年10月に発表された、高等学校における不登校生徒と中途退学者の推移を表わしたグラフです。このコロナ禍を経て、今後このグラフがどのように推移していくか、注視していく必要があると考えています。次世代を担う若者が、仲間と共に活動し、学ぶことの楽しさを発見して自ら動き出すまで支えることが、周りの大人の責務であると考えています。人材育成は何よりも優先されるべきものです。学校と社会が目線を共有し、外部資源を取り入れながら有機的に繋がり合い、新たな連



携の仕方を模索していくことが求められます。孤立しがちなこの時代に、既成概念や枠を超え、たくさんの人の力が結集し、本音を語り合え、発信する場となるプラットフォームの構築が求められると考えます。

参考文献

- 東京都生涯学習情報、2013、「都立高校中途退学者等追跡調査」報告
(<https://www.syougai.metro.tokyo.lg.jp/sesaku/ysw/research.html/2013.3>)。
- 労働政策・研究研修機構、2018「都立高校における不登校・中途退学の未然防止に向けた取組－都立学校自立支援チーム派遣事業－」(https://www.jil.go.jp/event/ro_forum/20180123/houkoku/06_jirei3.html2018.1.23)。
- 東京都教育委員会、2021、「教職員・保護者向け冊子『不登校の子供たちへの支援のポイント』について」(<https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/hodohappyo/press/2021/01/14/07.html>2021.1.14)。
- 文部科学省、2021、「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」(https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf /2021.10.13)。
- 文部科学省、2021、「令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要について」(https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf/2021.10.13)。
- 会沢信彦・渡部昌平『生徒指導・進路指導の理論と方法』(北樹出版、2021年)、pp.112-119。
- 藤田晃之『キャリア教育基礎論—正しい理解と実践のために—』(実業之日本社、2014年)、pp.268-292

5. コラム (2)

【滝沢前センター長のおすすめ図書】

大正大学人間学部教育人間学科教授

滝沢和彦

本年度も10月いっぱいまでセンター長を退任するまで、月2回配信の「教職支援センターメルマガ」に【滝沢センター長のおすすめ図書】を連載させてもらったので、これを再構成して以下再録する。

I 教育論・教育方法関係

●バトラー後藤裕子『デジタルで変わる子どもたち-学習・言語能力の現在と未来』ちくま新書。著者は「子どもの第二言語習得・言語教育および言語アセスメント」を専門とするペンシルバニア大学教授。2000年以降に生まれた「デジタル世代」がデジタル・テクノロジーの発展の下で、その言語発達・言語能力にどのような特質が見られるか、乳幼児期における言語習得や学齢期（学生を含む）におけるデジタル絵本、デジタル教科書との関わりから論じる。また、SNSやデジタルゲームについても最新の心理学の研究成果が紹介され、その功罪を解説している。そして最後に、「デジタル時代の言語能力」においては、「言語習得・言語使用」の本質を、その「身体性」（言語の身体化）、「社会性」（他者との関係性）、「感情・情緒の伝達」（言語は、思考だけでなく感情・情緒も伝達する）の3点に求め、デジタル時代に必要な言語コミュニケーションの在り方を展望している。ここまでの紹介では、特に最終章に関わって難解な言葉（概念）を使ってきたが、この最終章にいたるまで、本書には多くの具体例、例えば、幼児期における絵本や幼児向け番組、学齢期におけるデジタル教科書の実際に即しての議論が展開されており、そうした具体例の記述と、議論を展開整理するための概念とを常に突き合わせつつ読み進むことで本書の内容は理解されることと思う。これは、紙媒体での（現在求められる）読解技術であると思われる。免許教科に関わらず、教職課程を履修する全ての学生諸君に一読をすすめたい。

(2021年10月13日)

●佐藤浩章『高校教員のための探究学習入門-問いから始める7つのステップー』ナカニシヤ出版。著者は高等教育開発が専門で、本学にも教職員研修（FD・SD）の講師としてしばしば来学している。著者は探究学習を「学習者が問いに答える活動を通して、知識創造を行う学習方法」と定義し、「社会環境の複雑性が増し、次々と想定外の出来事が起こる予測困難なVUCA（Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity）の時代において、自ら問いを立て、その答えを創造していく能力は不可欠」であり、「探究学習はまさにこれからの時代に合致した

教育方法」であるとしている。「テーマ・課題を見つける」「問いをつくる」「目標を立てる」「計画を立てる」「問いを探求し答えをつくる」「学びを評価する」「学びを振り返る」の7つのステップから

探究学習全般のデザインと実施、評価について概説しているが、書名にあるように探究学習に取り組もうとする高校教員だけでなく、管理職や教育行政関係者もちろん、大学生や大学院生も読者として想定されている。必ずしも具体例は豊富ではないので、読者は、自身の専門教科や総合の学習内容をこの本の記述に代入しながら読むことが必要である。その意味で、読者の側の能動的な姿勢が求められる本である。

(2021年6月9日)

●新しい学習指導要領のもとで、「総合的な学習の時間」や「総合的な探究の時間」のみならず、各教科等においても「探求型の学習」の場面は今後ますます重視されていくと思われる。本マガでは既に佐藤浩章『高校教員のための探究学習入門-問いから始める 7つのステップ』（ナカニシヤ出版）を取り上げたが、今回は河野哲也『問う方法・考える方法-「探求型の学習」のために-』（ちくまプリマー新書）を紹介したい。プリマー新書ということで、高校生から大学初年次生を主たる対象に書かれたものである。大きく変化しつつ現代社会においてなぜ探究学習が必要なのか、から説き始め、探究的な学びの一般的な手順について、テーマと問いの発見、文献収集からプレゼンテーション、レポートの書き方まで具体的・段階的に説明してくれている。読者に特に注目してほしいのは、哲学を専門とする著者の言う「哲学的対話」の提案である。「哲学はさまざまな人が集う対話によって、専門化による分断を縫い合わせようとする試みなので。あらゆる現代の知の中に対話を組み込み、社会の分断を克服しなければなりません。」本書の通読を通して、この言葉の含意を味わってほしいと思う。

(2021年9月29日)

●武田信子『やりすぎ教育-商品化する子どもたち-』ポプラ新書。「自分の子を善くしたいと思わない親はいない。自分の生徒を善くしたいと思わない教師もいない。」著名な教育哲学者だった村井実『道徳は教えられるか』の言葉である。虐待は論外だが、村井の言う通り、親も教師も、子どものために良かれと思って教育を行っている。しかし、その教育（や養育）が真に子どものためになっているのか、子どもたちの人権は本当に守られているのか、を本書は問っている。本書のキーワードは「エデュケーション・マルトリートメント（educational maltreatment）」である。maltreatmentは虐待と訳されるが、著者の言う「エデュケーション・マルトリートメント」とは「親による教育虐待だけではなく、社会全体の歪んだ教育によってなされる、大人から子どもたちへの不適切な行為のこと」である。「ゆがんだ」「不適切な」といった価値判断を含む定義については、著者が挙げている多くの具体例についてこの価値判断の是非を読者自身に考えてもらう必要がある。特に、第2章「不適切な日本の養育・教育」にある「子ども想いの大人たちがなぜ商品化という子どもに対するマルトリートメントを

継続してしまうのか」を吟味し、その上で子ども本来の育ちとは何か（第3章）、「遊ぶ権利」とは何か（第4章）を経て、最終章で、社会で「やりすぎ教育」をどう予防するか（第5章）を論じる著者の主張の全体像をつかんでほしい。海外の（日本人から見ると）大変ユニークな事例も示唆に富んでいる。

（2021年5月26日）

II 教育と格差

●松岡亮二（編著）『教育論の新常識-格差・学力・政策・未来』中公新書ラクレ。編著者は『教育格差：階層・地域・学歴』（ちくま新書）が話題になった教育社会学者。総合雑誌に掲載された論文20本からなる「近年の教育論をまとめた論考集」である。内容は副題にもある「格差・学力・政策・未来」の4つのカテゴリーに分けられ、「I 格差」では「①社会経済的地位」「②子どもの貧困」「③デジタル化」「④ジェンダー」「⑤国籍・日本語教育」が、「II 『学力』と入試改革」では「⑥国語教育」「⑦英語入試改革」「⑧英語教育」「⑨共通テスト」「⑩大学教育」が、「III 教育政策は『凡庸な思いつき』でできている」では「⑪EdTech」「⑫九月入学論」「⑬学費」「⑭教員の働き方」「⑮教員免許更新制度改革」が、「IV 少しでも明るい未来にするために」では「⑯審議会」「⑰EBPM（エビデンスに基づく政策立案）」「⑱全国学力テスト」「⑲埼玉県学力調査」「⑳教育DX」といった興味あるテーマが並ぶ。いくつかの論考で雑誌発表時以降の経過について「追記」が付されていることも読者の理解を助けてくれる。編著者による「まえがき」が本書全体への適切な導入の役割を果たし、「あとがき」では本書の全体を受けて、これまでの「やりっ放しの教育行政」から「どんな現場支援ができるのかデータと研究に基づいて『結果にこだわる教育行政』への転換を展望している。特に、教職課程で「教育格差」を必修化せよ、との編著者の提案は、本学を含めこの問題が必ずしも正面から扱われることの少ない現状を見ると、なるほどと思わされる。教職課程の学生諸君には、中村高康、松岡亮二（編著）『現場で使える教育社会学：教職のための「教育格差」入門』（ミネルヴァ書房）をあわせすすめたい（本学の日下田岳史先生も執筆している）。

（2021年10月27日）

●澁谷智子『ヤングケアラー-介護を担う子ども・若者の現実-』中公新書。今年の24時間テレビのドラマ「生徒が人生をやり直せる学校」を視た諸君も多いと思うが、原作は以前このメルマガでも紹介した黒川祥子『県立！ 再チャレンジ高校-生徒が人生をやり直せる学校-』講談社現代新書、である。実在するいわゆる「課題集中校」での取材に基づいて、貧困（生活保護）、虐待、ひとり親といった様々な困難を抱えた子どもたちに教師がどう向き合っていたのか、を感動的に描いた作品だった。今回のドラマはモデルとなった学校を「格差社会の吹き溜まり」ととらえ、親からの虐待や生徒の妊娠、幼い兄弟の世話をするヤングケアラーの実情を丁寧に描いていた、との番組評があった。本書『ヤングケアラー』はもう3年前の刊行だが、高齢化の進展と世帯人数の減少、共働きやひとり親、相対的貧困家庭の増加といった社会情勢

の説明から、家庭内の介護に従事する内外のヤングケアラーの実態を紹介、そして先進国イギリスの事例から今後のヤングケアラーへのサポートの在り方を展望している。「チームとしての学校」に向けての改革が進む中、教師の仕事とスクールソーシャルワーカー（SSW）の仕事は区別されるべきだが、ヤングケアラーの子どもの生活についての認識は教師にとって必須のものと思われる。全ての教職課程履修者に一読をすすめたい。

(2021年9月8日)

Ⅲ 教材研究（社会）

●今回は趣向を変えて、最近の私が興味関心の向くままのように読み進めたのかを紹介する。

ゼミで昔話を教材化できないか報告した学生がいたので、有田和正氏の有名な『「一寸法師の授業」（社会科「一寸法師」「台風とさとうきび」-有田和正の授業（写真で授業を読む）』を紹介してやった。そんな時にたまたま書店で目にしたのが大塚ひかり『くそじじいとくそばばあの日本史』ポプラ新書。著者は源氏物語の全訳もしている歴史エッセイスト。様々な古典文学に登場するおじいさん、おばあさんたちの力強い生き様をユーモアあふれる筆致で描いている。同じ著者の『昔話はなぜ、お爺さんとお婆さんが主役なのか』（草思社文庫）を続けて求める。前者には「科学じじい」杉田玄白の話も出てくるが、『蘭学事始』が書かれたのは玄白が83歳の時のことだった。『解体新書』になぜか前野良沢の名前が記載されていない事情については、吉村昭『冬の鷹』（新潮文庫）を読むとよく分かる。この歴史小説は主に前野に焦点を当てながら、研究書や当時の関係者の書簡等の資料に丹念にあたることで杉田と前野の学問観や生き方を対比的に描いている。同時代を生きた平賀源内や高山彦九郎（江戸後期の尊王思想家）との関係も興味深く、江戸時代後期という時代の雰囲気を感じさせてくれる。

(2021年8月18日)

●木村昌人『渋沢栄一-日本のインフラを創った民間経済の巨人-』ちくま新書。大河ドラマに新1万円札と、今年は渋沢栄一の話に接することが多いが、その生涯や業績の詳細については紹介者もこれまでほとんど知らず、書店で平積みになっている渋沢関係の書物から選んだのがこの本である。本書のプロローグで著者は、これまでの渋沢の評伝や研究書が「経済、経営、思想、民間（国民）外交、福祉、教育などの分野別に彼の人生を語るものが多かった」ため「渋沢の全体像を見えにくくしていた。」そこで、彼の91年の人生を編年体で俯瞰することにした、という。こうすることで「あらゆる事象に関心を持ち、同時並行的に粘り強く実行した」彼の事績が、同時代の国内外の人物との比較の視点も相まって立体的に描かれている。7月11日放送の大河ドラマではようやく幕末のパリ万博の様子が描かれていたが、この箇所は全350ページほどの本書のうちの50ページめあたり。やはり、明治期における多彩な業績を具体的に知ること、渋沢という人物のスケールの大きさが明治の時代背景をともなって理解される。特に、教科書では人物名はともかく個々の企業名（大学名）とかはあまり出てこない

が、渋沢の関わった多くの企業の実名を確認しながら本書を読むことで、政治史に偏りがちな明治時代の流れがより身近に感じられることだろう。なお、本書のもとになった論文で著者が取得した学位は「文化交渉学」だそうである。「交流」ならぬ「交渉」に着目することで、様々な当事者（個人、企業、国家）間の立場の違いや駆け引きをよりダイナミックに捉えよう、という著者の試みは十分成功しているように思われる。

(2021年7月14日)

IV 教材研究（国語）

●橋本武『橋本式国語勉強法』岩波ジュニア新書。著者は1912年生まれ、東京高等師範学校を卒業後、50年間にわたって灘高校の国語教師として教壇に立ち続けた伝説の人である。本書はもともと1968年に「灘高式勉強法」シリーズの一冊として刊行されたもので、これが2012年に加筆修正の上岩波ジュニア新書で復刊された。高校生対象の勉強法の本であり、受験参考書との付き合い方や大学入試対策についても少しだけ述べているが、あくまで、「勉強する基本」をまとめたものである、と著者は言う。全編、著者の深い学識を感じさせる記述にあふれている一冊であるが、紹介者は、「1 心構え」にある次の一文に見られる著者の国語観、国語教育観に強くひかれた。「世界中の人間が、ことばを生活に密着させて今に伝えています。民族や地域によって、考え方も生活のしかたも違うように、ことばも千差万別です。日本人は遥かに遠い祖先の時代から、日本語と共にその歴史を過ごしてきました。日本語の中にこそ日本人のすべてがあったと言えるのです。従って、私たちの国語を尊重するということは、自らの歴史を尊重し、自らの生活に誇りを持つことであると言えます。」もう一点、著者が「現代文」として小説と論説文を同様の論理のもとにその読解について論じていることを指摘しておきたい。日本文学科の学生諸君は「国語」という教科の免許状を取得するのであって「文学」の免許状ではない。国語（文章）を読むとはどういうことか、その指導とは何をすることなのか、本書を通して考えてみてほしいと思う。

(2021年5月12日)

●猪木武徳『文芸にあらわれた日本の近代-社会科学と文学のあいだ-』有斐閣。この欄で紹介する本はなるべく学生諸君が簡単に手に取ることができるよう、比較的新しい新書や文庫としてきたが、今回の本は初版2004年、既に古本屋でしか入手はできない。が、特に文学部の諸君にぜひ一読してほしいと思って取り上げることにした。いわゆる歴史小説は歴史を具体的なイメージを思い浮かべながら学ぶことができるので、ここでもこれまで司馬遼太郎『坂の上の雲』や吉村昭（『ポーツマスの旗』、津本陽『椿と花木木』等を紹介してきた。今回の著者は著名な経済学者だが、本書では「文学作品そのものを用いて、時代の「良質な観察者」としての文人が描く人々の内面的な部分を、ストーリーの流れの中から読み取るという手法」を用いて、経済だけでなく近代日本における様々な制度、社会問題や事件、思想を縦横に論じている。取り上げられている作品は、年代順に、夏目漱石『文芸の哲学的基礎』（1907年）、永井荷

風『あめりか物語』(1908年)、谷崎潤一郎『痴人の愛』(1925年)、横光利一『上海』(1928～31年)、小林多喜二『蟹工船』(1929年)、山田風太郎『戦中派不戦日記』(1945年)、太宰治『斜陽』(1947年)、大岡昇平『野火』(1952年)、武田泰淳『鶴のドン・キホーテ』(1958年)、三島由紀夫『絹と明察』(1864年)の10編である。有名な作品ばかりで、読んだことのある作品も多いだろうが、著者の該博な知識に裏付けられた論述に触れることで、新しい読み方に目を開かれる思いがするに違いない。社会系の免許状取得希望者はもちろんだが、特に、日本文学科の学生諸君にすすめたい作品である。

(2021年4月14日)

7. 教職鴨台会会員の広場

—活躍する卒業生たち—

大正大学同窓会「鴨台会」の中の職域同窓会の一つに「教職鴨台会」がある。本学教職課程で学び、各地の教育現場で教員として、また事務職員として活躍する卒業生が集う場として、本誌平成元年版からこの欄を設定した。ここ2年間、コロナ禍のため開催されてはいないが、鴨台祭（学園祭）当日に教職鴨台会を開催もしてきた。同窓生と同窓生、同窓生と大学教職員、そして同窓生と現役学生との交流・情報交換のために、教職鴨台会とともに本欄を活用していただきたい。同窓生諸氏からのご投稿をお待ちしている。

■教職関連の懐古

—滝沢先生の第1期生・教え子として—

常磐短期大学 幼児教育保育学科准教授 渡辺賢治

私が大正大学に入学したのは1999（平成11）年であり、当時、教員免許取得はほとんど考えていなかった。その後、大学での学びを通して進路が具体化し、いつの間にか研究者を志すべく大学院進学（国文学）という道を選択していた。

修士課程1年次の折、当時、指導教授であった千葉眞郎先生から「この先、研究者を目指すならば国語の教員免許は取っておいた方が良い」というアドバイスを受け、科目等履修生として教職関連の授業を受け始めた。その時に初めて受講したのが滝沢和彦先生の「現代教職論」（当時の名称）であったと記憶している。2003（平成15）年4月のことだが、この年は滝沢先生が大正大学に着任された初年度にあたり、つまり私は大正大学における滝沢先生の第1期生・教え子になったわけである。

当時、教職関連の授業は基本的に旧3号館（現在の3号館の前身）の大教室での受講がほとんどであり、私は常に最前列の席に座っていた（今も覚えているが、教壇から見て左手側の席に座っていた）。滝沢先生の授業の第一印象は「わかりやすい」という印象であった。また、初回の授業では前年度、

新潟県の長岡の大学で教鞭を執っていたということも話されていたのを記憶している。

その後、滝沢先生始め福田典雍先生の授業など、教職関連の授業を科目等履修生として受講可能な制限単位まで目一杯取り続け、教育実習（特別依頼校でさせていただいた）を経て、大学院博士課程在学中に無事、中学と高校の国語科専修免許取得へと漕ぎ着けた。大学院の授業と並行しての教員免許取得はなかなか大変であったが、滝沢先生の授業はもとより他の教職関連の授業も興味深く、欠席することなく取り組んだ。もともと研究者を目指していた自身にとっては、教職の授業は何もかも新鮮であり、また、学部生に混じって良い刺激をいただいたことも大きかった。

博士課程の後は博論提出のため、研究生として引き続き大学院に在籍し、併せて文学部の副手（現在の日本文学科）としても勤務することとなった。その最中にご縁があって、墨田区の区立中学校TAとして約1年間、副手の傍ら中学1～3年生の国語の授業サポートにも携わった。このTA経験が私にとって、教員免許取得後の初めての教育経験である。生徒たちは光村図書の国語教科書を使いなが

ら、副教材のワークや漢字・語句の練習問題プリントなどを解き、わからない箇所をTAが個別に教えるといった内容であった。中学1~3年生という多感な年頃の子どもたちに接する中で、教育へのやりがいや楽しさ、その一方で、自身の教え方の至らなさを実感する貴重な経験を得た。

このようなTAと副手を兼務するある日、JR板橋駅から大学に向かう通勤途中、たまたま滝沢先生が前を歩いており、お声がけしたことがある。大学までの僅かな時間であったが、ご一緒しながら少しお話をさせていただいた。ただ残念なのは、会話内容を断片的にしか覚えていないことである。私が科目等履修生として常に最前列の席（先述した、教壇から見て左手側の席）に座っていたのを覚えておられたこと、また、私の将来（研究者としての進路）について、先生のご経験を交えて少し話されたことくらいである。普段、副手として大学に勤務していたものの、勤務場所は滝沢先生の研究室とは全く異なっていたため、先生と直接お話しをする機会は後にも先にもこの一回きりであった。あとは現在まで続いている年に一度のご挨拶（年賀状）である。

その後、私は2年間の副手勤務を経て、2011（平成23）年4月から神奈川県私立高校で国語科非常勤講師として教壇に立つこととなった。ここでの日々はまさに試行錯誤の連続だった。部活大好き勉強大嫌いな生徒に対し、どのようにして国語への興味や関心を持たせるか、集中力を途切れさせないようにするかなど、教科書を土台にした自作の教材作りが続いた。初年度は16コマ担当し、2・3年目は18コマ担当した。この時期が一番、教育の難しさや大変さを知った時期でもあったと思う。いかにして「わかりやすい」「飽きさせない」「雑談だけどためになる」授業展開を構築すべきか、同じ国語科の専任教諭からアドバイスをいただき、教育関連の文献などを読みながら授業に生かせるよう必死に取り組んだ。その甲斐もあつてか、年を重ねるごとに学期末ごとに集計される授

業評価アンケートの評価は徐々に上がっていった。その最中に、大正大学の「国語科教育法」の授業（当時、米山孝子先生がご担当）でゲスト講師と呼ばれ、模擬授業を行った。このことも非常に貴重な経験となった。つい数年前に受講していた「国語科教育法」の授業を、今度は自らが教える側に立つという、何とも不思議な感覚であったことを鮮明に覚えている。

私立高校での3年間の勤務を経て、2014（平成26）年4月には、島根県松江市に所在する松江工業高等専門学校人文科学科に専任講師として着任した。基本的に高専は工学系に特化した高等教育機関であり、即戦力を伴ったエンジニア育成を主眼としている。中学卒業後の15歳から20歳までの5年間一貫教育であり、いわば短大とほぼ同じ位置づけにある。卒業時には準学士として認定されるのだが、扱いても生徒ではなく「学生」であり、留年率も高い。言うまでもなく、エンジニア育成においても一般教養は必須であり、そのため松江高専では人文科学科が設置され、国語科もそこに含まれる。私は人文科学科の国語科教員として「日本語」（高校の「国語」と同じ）や「日本語表現」「文学」といった授業を担当した。その後、2016（平成28）年4月には、福島県いわき市に所在する福島工業高等専門学校一般教科に准教授として着任し、教育や研究はもとより担任経験なども重ねた。そして2021（令和3）年4月、茨城県水戸市に所在する常磐短期大学幼児教育保育学科に准教授として着任し、現在に到っている。

大正大学から飛び立った後、このような遍歴を経て現在に到っているわけだが、改めて思うのは、教員免許を取得しておいて良かったということである。当初は研究者にとって、将来のセーフティネットとしての意識が強かったのだが、私立高校や高専での教育経験を経て、教育者としての視点も合わせ持つことができたのは、人生の財産と言える。また、細々とはあったが、滝沢先生とのご縁も今日まで繋がっていたことは有り難い。結果、

こうして文章を書かせていただく契機となり、誠に感謝申し上げる次第である。

私自身、もともと研究者を志していた人間であるため、これから教師を目指す後輩の皆さんに適切なアドバイスなどは正直、見当たらない。それでも敢えて言うならば「向き不向きよりも、常に前向きであれ」ということであろうか。そこにはポジティブシンキングが前提条件となる。そして、好奇心と実行力があればさらに良い。多メディア時代の

渦中に生きる子どもたちに対し、教師自身が継続した好奇心を持って様々な情報を取捨選択し、良き方向へ子どもたちを導きサポートしていくことは、今後ますます求められるだろう。また、組織内での多様な役割への適応力も問われてくる。私も滝沢先生の教え子・第1期生としての認識を心に留めつつ、これからの大学教育に尽力して行きたい。

■学生・受験生の皆さんへ

足立区立島根小学校主任教諭 樋口隆児
(平成22年3月、人間科学科卒業)

1. はじめに

「先生・教員」と聞いて、どんなことを思い浮かべますか？少し考えてみてください。ここで思い浮かべることが、これまで出会った先生の印象、ご自身の現在の状況・立場によって様々だと思います。例えば、「何でも知っている人」「信頼できる人」などの肯定的なイメージをもつ方もいれば、「怖い」「口だけの人」などの否定的なイメージをもつ方もいるでしょう。また、「授業をする」「やりがいのある仕事」「子供の成長に関わる」のように仕事として捉えたり、最近のニュースの影響もあり「大変」「激務」「不祥事」などを思い浮かべたりする方もいると思います。

この『大正大学 教職課程年報』は、現役の大学生や受験生が見てくださるとのこと。そして、おそらく、“教員”というものに対して、多少なりとも興味のある方が見ているのだと思います。「先生になりたい！」「教員免許は取っておきたい」「教職って何だろう？」など、様々な思いをもっている皆さんにとって、少しでも有意義なものとなるよう、ここでは、私自身の経験をもとに、大正大学で学んだこと、そして、教員生活も11年目となった現在感じていることを中心に書かせていただきたいと思います。

2. 学生時代の学び

約15年前、大学に入った当初の私は「とりあえず教職はとろう」という程度の気持ちでした。その大学1年の時、たまたまゼミの担当教授になったのが、教職を担当していた滝沢和彦先生でした。滝沢先生から、近隣の豊島区立巣鴨北中学校での運動会の受付ボランティアを紹介していただき、興味本位で参加しました。そして、その際、感じたのが“子供の成長を間近で見ることのできる教員の魅力”でした。運動会後の職員室での反省会で、どの先生方も“運動会を通して、子供たちがどう成長したか？”ということを楽しんで話していました。それまで児童・生徒の立場でしか捉えていなかった運動会という行事を、先生方がそのように捉えているということに驚くとともに、子供の成長を一番近くで感じることでできる“教員”という仕事に、大きな魅力を感じたのを覚えています。そして、今振り返ると、その経験が、私が本気で教員を目指すようになったきっかけとなりました。

大学2年になり、実際に子供たちと関わりたいと考えるようになった私は、豊島区立清和小学校でSAM (School Assistant Members) として、授業補助等のボランティア活動を行うことになりました。授業中、鉛筆が止まっている子の隣に行き、解き方のヒントを与えたり、集団行動を苦手として

いる子の隣に付いてサポートをしたり、休み時間思い切り体を動かして遊んだり、給食を一緒に食べたりと、本当にたくさんの経験をさせていただきました。また、遠足や宿泊行事の引率等にも参加させていただいたこと、先生方の日々の授業実践を見たり、先生方とたくさん話をさせていただいたりしたことも、私の大きな財産となっています。このSAMの活動は、大学卒業後も含め4年間続きました。さらに、運よく教員として清和小学校に採用され、6年間勤務することになりました。

大学3年になり、私は就職活動をどうするか悩んでいました。教員にはなりたけれど、その覚悟・資格が自分にあるのか、判断できずにいたのです。そこで自分の中で決めたのが、SAMの活動を週に2日、朝から夜まで行うこと、毎回、活動の記録を取り続けることの2点を1年間やり遂げることができたら教員になるというものでした。

その時、活動は一人でを行うことが多く、気軽に相談できる仲間もおらず、辛いと感じたこともありましたが、ただ、学校で子供たちと関わると、自然と笑顔になり、帰る頃には身体は疲れていても、心が元気になっている自分があることに気がきました。また、先生方にもたくさん声をかけていただき、1年後、自分の中で「絶対に教員になる」という気持ちを固めました。その後は、就職活動は行わず、教員採用試験に向けての勉強を行いました。この時、子供たちや先生方に支えられた経験は私の中で大きな出来事でしたし、子供を支えるだけでなく、子供に支えられることもあるという、新たな教員の魅力に気付いた瞬間でもありました。

大学生後半は、自身の活動はもちろんですが、後輩への指導にも力を入れていました。それまでの経験をもとに、「スクールボランティアの事前指導」をテーマにした卒業論文を作成したのですが、その際、私が活動している様子を動画で撮影しました。そして、その映像をもとに、滝沢先生の授業で後輩向けにSAM等の事前指導を行わせていただいたのです。その時、「後輩が何で困っているのか」「どんなことを伝えればよいのか」ということを考えて話をしたのですが、その経験は、現在中堅

教諭となり、後輩や同僚の教員に支援・助言を行う際にも大いに役立っています。

また、当時は、自分が“よい先生になりたい”という思いでいました。それは、“素敵なお先生になれば、受け持つ30人の子供たちがよりよく成長できる”と思っていたからです。その気持ちは今でも変わりませんが、後輩向けにSAM等の事前指導を行う中で、“よい先生を30人育てれば、その先生方が受け持つ子供たち900人がよりよく成長できるのではないか”と考えるようになりました。その考えは、現在一層強くなっており、今後、私自身が取り組んでいくべき内容かと考えています。

ここまで、学生時代の学びのを中心にお話してきましたが、「これをやりましょう」や「これが正解です」ということを伝えたいわけではありません。私が伝えたいのは、大正大学（他の大学も同じかもしれませんが）では、SAM等の様々な体験ができ、自分の力を伸ばすことができるということです。きっとチャンスはいろいろな場所にあります。あとは、それを見付けられるように常に自分のアンテナを張っていられるかどうかです。そして、チャンスがあったら、興味のあることに出会えたら、積極的に関わってみてください。“できるかできないか”ではなく“やるかやらないか”という意識が大切です。そして、“迷ったらとりあえずやる”です。やれば必ず力になりますから。

3. 教員になって思うこと～学生・受験生の皆さんに向けて～

ここからは、教員になって感じる教員の魅力と大変さをお伝えします。教員の魅力は、やはり“子供の成長を間近で感じられる”ことです。毎日のように、昨日できなかったことができるようになっていく瞬間を見ることができます。また、そのことに関連して、子供たちのために自分の授業・指導技術を高め、子供たちの力を引き出し、伸ばしてあげたいと思いながら、日々努力を重ねることができます。子供たちに自分の力を引き出されて、伸ばしてもらっているような感覚になることもあります。それも、教員の魅力の一つだと思います。また、童

心に返り、様々な行事や日々の学び、遊びに全力で取り組むことができることも、素晴らしいことだと思っています。そして、全力で取り組むからこそ、笑ったり、泣いたり、悔しがったりと様々な感情をもち、周りと共有しながら日々生活できます。このような仕事は、もしかしたら少ないのではないのでしょうか。いずれにせよ、子供たちと関わる中で、互いの力を高め合い、日々感情豊かに生活できるという部分に教員の魅力があり、その魅力に惹かれ、私は今も教員を続けているのだと感じています。

一方で、大変さもあります。授業準備、事務処理、子供の指導、保護者対応など、本当に様々な業務に日々追われます。特に、大きな行事等がある場合や、昨今の新型コロナウイルスといった有事への対応の際は、多くの時間をとられます。(もちろん、他の仕事でも同様に大変な部分があると思いますが)もし、教員を目指すのであれば、魅力と大変な部分をしっかりと見極めいただければと思います。その際、SAM等の活動で実際に学校現場に行き、子供の様子や先生方の様子を見ることをお勧めします。「百聞は一見に如かず」というように、実際に現場に行くことで見えてくるのがたくさんあるはずです。

また、大変さに関連して、忘れてほしくないことがあります。それは、支えてくださる方が必ずいるということです。同僚の先生方、管理職(校長・副校長)の先生方、保護者、子供たちなど、必ず手を差し伸べてくれる方がいます。どの仕事も同じかと思いますが、大変な時こそ、是非深呼吸をして周りを見渡してみてください。

最後に、教員になった今だからこそ、学生時代から意識しておくこととよいと感じることを四点お伝えします。一点目は、周りの様子をしっかりと感じ取り行動に移すということです。学級にはたくさんの子供たちがいます。その一人ひとりの小さな変化を見落とさないことはとても大切です。また、職員間でも、先輩より先に行動する、周りが気付かない

細かい部分に取り組むということが、学校という組織でお互いに支え合うことに繋がります。

二点目が、悩んだら相談する癖をつけるということです。仕事で悩むことはたくさんあります。特に若い時は、分からない・できないことだらけで悩むことの連続です。その時、怖いのが、相談をしないことです。誰にも相談せずに一人で抱え込んでしまうことで、問題が大きくなってしまいます。分からない・できないことは恥ずかしいことではありません。困ったら相談するというのを、日頃から意識してみてください。

三点目が、自分の魅力を知るということです。これだけは誰にも負けない、こんな特技がある、不器用だけど努力を続けられるなど、何でも構いません。魅力的な人に、子供たちは惹かれ、ついていきます。自信をもって、「私の魅力はこれ!」と言えるものを、是非探してみてください。

四点目が、出会いを大切にするということです。これから様々な人に出会うことと思います。その時、是非、その人の良さを見つけてみてください。その人から学べることを探してみてください。そのために、その人とたくさん話をしてみてください。きつとご自身の力になり、世界が広がっていくことに繋がるはずです。「一期一会」という言葉があるように、人との出会いを大切にできる人でいてください。

4. 終わりに

まずは、最後まで読んでくださり、ありがとうございました。この文章を読む前と読んだ後で、何か変わったことはあるでしょうか。これから大学で学ぶ人、教員になるか迷っている人、教員になりたい人など、様々な状況の皆さんにとって、私の経験が少しでも役に立てば、嬉しく思います。皆さんが今後、様々な場面で活躍することを願っています。

最後になりましたが、今回このような機会をいただいた滝沢和彦先生には、大変感謝しております。ありがとうございました。

■今までの思い、そしてこれから

神奈川県立特別支援学校教諭 飯川 遥
(平成 22 年 3 月、人間科学科卒業)

自信を持って

何年か前に、教育実習を目前に控えた学生さんの前でお話する機会をいただいたのですが、その時ちょうど子どもたちにハマっていたピエロの格好でお邪魔しました。ピエロのニコちゃんは、しゃべらないのでジェスチャーや筆談を駆使して目の前にいる学生さんとコミュニケーションを取りました。初めは、戸惑いが充満していた教室でしたが、しばらくして怪しい人物ではないと認められたので、無事、多くの皆さんに受け入れられました。目の前に「一見怪しい人」が現れても、積極的に話しかけてくれた学生さんたちでした。これから教員になろうという学生さんに対して、だいぶ変化球のアプローチでしたが、思いのほか自分の考えが伝わりうれしかったのを覚えています。

自己肯定感の低さから自分に対して自信がない人がたくさんいること、自分もその 1 人であること、自信は経験によって少しずつ積み重なっていくこととお話しました。小さなことでも「わかった！できた！」の成功体験の積み重ねは、自己肯定感を高めます。「わかった！できた！」を積み重ねて自信を持つことができるのです。

私が教師として子どもたちと関わる上で大切にしているのは、『信頼関係を築くためのコミュニケーションをしっかりとること』、『目の前にいる子どもの困り感を理解し、できる限り、わかった！できた！を実感できるような環境づくりをすること』の 2 つです。ちなみに自己肯定感が高かったら、初対面の人の前に出るのにピエロの格好なんてしなないです。当時の私は、学生さんの前で素をさらけ出す自信がなかったのでしょうか。

出会い

私は勉強が苦手で、特に数学は小 4 の壁にぶち当たり、泣きながら分数と戦う日々でした。先生に言われたことは何一つ理解できず、わからないこ

とが積み重なり、いつしか何もわからない状態に。それでもなんとか誤魔化して過ごしてきました。

大学に入り、教職課程で学ぶこととなり、様々な視点から物事を考えるようになりました。教育の歴史や教育課程、現代の教育の問題点について考える日々です。先生や仲間と、あぁでもないこうでもない意見を交わしながら、この発問の仕方はどうだろう、本当に伝わっているのかな？などと考えるようになりました。

3 年生になってからは、TA (ティーチングアシスタント) として実際に現場に足を運びました。中学校では、数学のアシスタントをさせて頂き、そこで出会ったのが「わからないことをわからないと言いつせない子」でした。ある時、数学の問題で指名され答えることが出来なかった生徒が「なんでこんなこともわからないの？小学生でもわかるよ！」と言われていました。「小学生でも、わかる」と、同じようなことを自分も言われたことがありました。「小学生の時にわからない問題をそのままにここまで来ていたとしたら、わかるわけないよなあ…」と思っていましたが、その生徒に対しては何もアプローチできませんでした。わからないことをわからないと言え環境がなければ、どんどんそのまま流されていってしまいます。劣等感を感じる前に、わからないことを「共感してあげたい」と思うようになりました。そんなことを考えているうちに、出会ったのが、通常の学級に籍を置く障害のある子どもたちでした。

彼らは障害特性から同級生とも馴染めず、大人からは叱られる場面が多くありました。コミュニケーションの取り方がわからず、時に暴言を吐いたり、手が出てしまったりすることもありました。彼らはどうにかして自分の思いを伝えようとしているのにも関わらず、跳ね返されてしまうのです。彼らのそんな姿を見て、彼らの思いにも「共感してあげたい」、思いが伝わらないこの状況をなんとか

したいと思い、学び始めたのが特別支援教育でした。

特別支援教育の世界へ

大学院では特別支援教育を専攻し、知的障害児教育の基礎やアセスメントツールについての知識を得ました。「特別支援教育は、教育の原点だよ」と教えられ、さまざまな障害のある児童生徒と関わりました。それまでは、集団の中で配慮が必要な子どもを見ていましたが、ここでは、目の前にいる子と『1対1で向き合う』ことになりました。この子は、何を見て、何を感じ、何を伝えようとしているのか。コミュニケーションのとり方もさまざまで、上手くいかないこともありました。こちらが「してほしい」と思ってさせることは、散々な結果に終わり、「なんで出来ないの」と思った時もありました。

『自分にとっては当たり前を理解していることが、目の前の相手は理解できていない』ことというのは、『なぜ理解していないか』を分析しないと、共感は出来ないのだと感じました。定型発達の子がとくに考えずに自然に習得していくものでも、未習得のその子にとっては当たり前ではありません。その子の当たり前は何なのだ、試行錯誤する日々でした。とくに教育実習では、この子は何が出来て何が出来ないのか、ひとつの課題を成し遂げるためには何が必要なのか。1人の子を理解するためにたくさんの時間をかけました。

特別支援学校の教員になって10年が経ちました。日々子どもとにらめっこです。勝つ時もあれば、負ける時もあります。負けるとくやしい。くやしいから、もう一度挑戦。アッハッハッハッハッ！くそー！今日も負けた！強いなあ…。1人ひとりと向き合う時間は、今でも1番大切にしています。

集団のあり方は、私が大学生だったころと違います。一人ひとりの児童生徒にあった支援、合理的

配慮の考えが小学校や中学校の通常の学級にも根付いてきています。障害のある子を中心に見た集団、集団を形成している子たちが、その子をどう捉えているのかを考える機会も確実に増えていると思います。さまざまな教育的ニーズが生まれてきているので、一人ひとりと向き合っていると、学級経営を行う際には、多くの課題も感じるのではないかと思います。

子どもたちの未来のために

コロナ禍となって2年が経ち、世の中が大きく変わりました。学校現場も混乱を極め、日々なんとかこなしている状況が続いています。感染者数が減ったと思ったらまた次の波が来る、の繰り返し。行事もことごとく無くなりました。子どもたちを取り巻く環境は大きく変わり、制限のある生活を強いられています…

私自身も、何かを諦めることが多くなり、疲れもたまり、日々の気力もつまらないことに全振りして、夜になるとクタクタになってしまうこともあります。しかも、だんだんとその状況に慣れてしまって、それが当たり前になりつつあります。しかし、そんな状況でも、子どもたちとにらめっこをしている時間が一番楽しいです。大人になってからの学校は、本当に楽しいのです。

私は自分の経験と「わからないことをわからないと言い出せない子」や「自分の思いを上手く伝えることができない子」に出会ってこの世界に身を置くことになりました。今でも学生時代に感じたような「この状況をどうにかしたい」という思いになることがあります。困難なケースもありますが、どんなことにも向き合い、これからも挑戦し続けていくつもりです。

笑顔は人に伝播していきます。笑いは健康に良いそうです。限りある学生生活、楽しみながら研究に励んでくださいね。

■まわり道も全て活かして

都内公立中学校教諭 吉高詠美子
(平成 26 年 3 月、教育人間学科卒業)

1. はじめに

私は、現在都内公立中学校で社会科教諭として勤務をしています。中学生の頃から教員という職業に興味をもち、念願叶って教員生活も今年で4年目になります。しかし、大学を出てすぐに教員になれたわけではなく、様々な経験を経て今に至ります。今回、滝沢先生がご退職されるということで、原稿を書く機会をいただきました。私の経験が役に立つかは分かりませんが、学生時代から現在までを振り返ってお話をしたいと思います。

2. 学生時代

学生時代は、ただひたすらアルバイトに勤しむ日々でした。家庭の事情もあり、奨学金と自分のバイト代で4年間の学費等を賄わなければならなかったからです。早朝バイト→授業へ→夕方からバイトなんて日もしょっちゅうありました。その分、授業中はうとうとが止まりません。何度友達に起こされたことか…。それでも、単位を落とすわけにはいかないのです。試験直前はプリントの内容を短期集中で詰め込んで乗り切っていました。そんな勉強で知識が身につくわけもなく、教員採用試験の勉強も全力を尽くせとはいえないまま、初めての採用試験は不合格となりました。

3. 学生のサポートを経て

教員採用試験には落ちましたが、大学卒業後は縁あって教育人間学科の副手として勤務することになりました。ついこの前まで学生として通っていた場所に職員として勤務するのは不思議な感覚でした。先生方や学生さんたちのサポート、出欠確認、書類の整理や誤字脱字チェック、会計業務、外部からいらっしゃるお客様の対応等、仕事は多岐にわたりましたが、今振り返ってみると副手として経験させていただいた仕事の一つ一つが今教員として仕事をする上でとても生かされています。

教員は授業を教えるだけが仕事ではありません。宿泊行事があれば、外部の業者とその都度連絡を取り合うこととなります。書類の整理や確認は子どものワークシートだけではなく、保護者に提出してもらったもの、職員会議資料、回覧でまわってくるもの等、常に紙だらけで毎日確認しないとあっという間に溜まります。もし、ストレートで教員採用試験に合格していたら、教育現場の想像以上の仕事の多様さに心も身体も追いつけなかったかもしれません。

副手として働く中で一番大きかったのは、学生さんたちの存在です。教職課程をとっていないに関わらず、たくさんの学生さんたちと関わらせていただきました。校内で会うと、気さくに話してくれる学生さんたち。人見知りかひどかったはずの私が、いつの間にか人とコミュニケーションをとるのが少しずつ楽しくなっていました。時には授業に関係する話だけでなく、プライベートな話をすることもあり、まるで高校の教育実習をしているかのような感覚になる時もありました。春に卒業する頃には、嬉しい反面、少々寂しい気持ちになったものです。

私は教職課程の副手だったので、教員を目指す学生さんたちに関わる機会が多かったのですが、特に「教職サークル」のメンバーの熱心な姿には日々頭が下がる思いでした。毎週土曜日の授業のあとは、模擬授業を行ってみんなでアドバイスをし合ったり、採用試験の過去問を解いたり…。夢に向かってまっすぐ進む彼らをサポートする中で、副手の仕事にやりがいを見出すとともに、教員になるために自分はここまで頑張ることができるのだろうかという自問自答を繰り返す日々でした。

副手になって3年目の秋、週に1回支援員としてお世話になっていた中学校から特別支援学級の産休代替教員のお話をいただきました。副手として学生のサポートを続けたい気持ちもありました

が、「これは教員への道に進む最後のチャンスだ。学生さんたちのように真剣に夢に向かって努力しないと。」と覚悟を決め、副手を辞めることにしました。もし、学生さんたちの熱い姿に触れずに、大学卒業後に他の仕事に就いていたとしたら、教員になる夢を諦めていたかもしれません。

4. 教員になってから

産休代替教員や区講師を経て、ようやく正規教員となり、現在の勤務校に配属となりました。教員生活1年目は副担任として、教科の授業だけでなく、学活や道徳のやり方、様々な場面で指導教諭に付いてまわって勉強しました。経験のない競技の部活動の顧問や生徒会を任されて不安でいっぱいでしたが、温かい先輩教員に恵まれ、なんとか1日1日乗り越えていきました。

その時に大切だと感じたのが、異業種の友達との交流です。教員の仕事は朝早く、夜遅くまでかかることもあるので、必然的に教員と子どもとしか関わらない日々になります。そんな中で少しでも時間を見つけて友達と飲みに行ったり、違う職業の話の聞いたりすると、息抜きになるとともに新たな視点で仕事に取り組むことができるのです。

「この話、明日の道徳に使えるな。」「その仕事にはこんな面があるんだ。」と、教育とは離れているからこそ、生きた教材になるものもあると感じました。

教員生活2年目は中学2年生の担任になりました。生徒が1年生の冬頃から新型コロナウイルスが世界で猛威を奮い始めて休校になっている中で、「誰も経験したことがないこの状況で私が担任をやったら学級崩壊を起こしてしまうのではないかと不安で仕方ありませんでした。しかし、クラス替えで初担任の私にやりやすいクラス編成にしてくださいと、相談しやすく頼りになる学年の教員陣が常に支えて下さったこともあり、初担任としての1年間を無事に終えることができました。

そして教員生活3年目の今年度は、進路がかかる中学3年生の担任でした。週の持ちコマが29コマ中24コマという日々で、忙しすぎて所々記憶が

あまりないのが正直なところです。それでも、コロナ禍で学校行事が縮小されている中、私なりに生徒や保護者にできることはないかと考え、毎月1回学級通信を発行しています。学校での生徒の様子を発信して保護者の方々に知っていただいたり、生徒の頑張りを紙面に掲載してお互いの良さを認め合ったりと、すきま時間を見つけては写真撮影やメモをこまめにして作成しています。空き時間もあまりない中で作成しているので、自分で自分を追い込んでいるなあと思いつつも、きっと自分自身が楽しんでいるから続いているのだと思います。そんな学級通信も今月(2022年2月時点)で13号目となりました。15号まで発行する予定です。

5. 私が伝えられること

いよいよ受け持った生徒たちも3月には卒業します。中学卒業後は義務教育ではなく、それぞれが選んだ道に進学します。もしかすると社会に出る子もいるかもしれません。そのうえ、2年後には成人となります。この先は、それぞれが選んだ場所で充実した日々を過ごしてほしいと願うばかりです。そのために私が担任として生徒たちに伝えられること、伝えなければいけないことを授業だけではなく、朝や帰りの学活も活用しながら話をしています。「支えてくれる人への感謝の気持ちは言葉で伝える」「困っている人に手を差し伸べられる人間に」「やらなければならないことは計画をきちんと立てる」「その場に合った服装を」など、特別なことではなく、当たり前のことばかりです。きっと中学生時代に伝えても、大人になるにつれて緩くなってしまったり、やらなくなったりすると思います。大学で生活指導なんていちいちされないですよ。しかし、社会に出た途端、「できて当たり前！」と周りから見られます。そんな時に、「一番細かく言われた中学生の時に立ち返れば、外すことはないかな」と思い出してくれたらいいなと思うのです。

6. 最後に

書くことがなかなか思い浮かばないなと思って

いましたが、いつの間にかたくさんの思いがあふれていました。私が今、たくさんの思いに触れながら、日々忙しくも充実した日々を過ごしているのは、教員になるまでにまわり道をしたからだと思います。もちろん、教員を目指す皆さんには一発合格を目指してほしいのですが、私の性格的にはこの道で合っていたのかもしれませんが。教員を目指す気持ちを持たせ続けてもらえた環境に感謝して

います。滝沢先生をはじめ、教育人間学科の先生方、助手の森さん、そして今まで携わった学生の皆さん、本当にありがとうございました。

教職を目指す皆さん、どんな経験も無駄になることは1つありません。様々な経験が生かされるのが学校の面白いところです。皆さんのこれからの活躍を心から願っています。

■一人前にはいつなるのか

川口市立里中学校教諭 西島晴信
(平成27年3月、人間学部教育人間学科卒業)

◆勤務校における現状報告

現在私は、埼玉県にある川口市立里中学校で勤務させていただいています。臨時的任用教員を2年間経験し、教員採用試験に合格後、現在の学校で勤務しています。よき先生方の中で教えていただき、多くの学びを得ることができました。採用後、初年度より担任として、2年目からは生徒指導主任、5年目は教育相談主任として、生徒と学びあうことができました。この7年間という経験ではありますが、その中で、自分なりに感じ取ったことを少し偉そうに報告させていただきます。この中から、少しでも何かを感じ、今後先生方や現役生が会う生徒に還元することができたらと思います。

初めて教員になった人も、30年間教員をやっている人も同じ教員です。30年間教員を続けた人からでないと教えてもらえないことはあります。でも、それが当たり前ではいけないとも思います。生徒にとっては、同じ教員という立場である以上、教員側の力量の差によって生徒が受ける影響が大きく変わってはいけないはずです。そのため、生徒の前に立つと決まった以上は、「自分は一人前の教員である」と言い切れるための努力と準備をしなければいけません。その努力と準備をした上で、生徒の前では一人前だと言い切らなければいけないと思います。これが、「一人前になるのは今」ということです。

◆一人前にはいつなるのか

こないだふと同僚の先生に、「先生という職は、いつ一人前になるんですか？」と聞かれました。この発言に私は、「今だよ。でも、その上で、一生なることはできないと思う。」と伝えてみました。この会話について自分なりに考え、自分の教員・教育に関する考えを少しでも伝えることができればと思います。

「一人前になるのは今」

教師として生徒の前に立つ以上、一人前になれていなければいけないと思います。今年採用され、

「一人前になるのは一生かかる」

先ほどの内容とは矛盾しますが、一人前になるのは一生かかることである、とも思っています。教員として、日々授業や学級指導などをする中で「以前よりも授業がうまくなった」「学級へ良い働きかけができるようになった」と感じることもあります。ですが、その度に自分ができていないことがたくさん見えてきます。「授業の導入が悪かった」「展開の発問に工夫がない」「学級へのもっと良い話があった」などできないことがたくさん見えてきます。そうすると、「一人前にはまだまだなれていないな」と感じます。

今回、「一人前」というテーマで話を書かせていただきましたが、やはり教員という職業は奥が深く、いつになっても正解が見えてこないものである。教育ではこんな言葉が大切であると言われる。それは「不易と流行」。不易とは変わらないもの、流行とは日々変わっていくもの。変わっていくものがある以上、教員は常に一人前を目指し続け

ることが必要なのだと思います。

◆結びに

今回、勤務校における現在の実践について報告する場を設けていただいた滝沢先生に感謝いたします。この文章に目を通していただいた方と教育について語り合える日々と、大正大学の更なる発展を祈念しております。

■コロナ禍での卒業式を迎えるにあたって

横浜市立中学校教諭 佐々木渚

(平成 29 年 3 月、文学部人文学科カルチュラルスタディーズコース卒業)

昨年 11 月に、教育実習を控えた大学 3 年生が受講している「教育実習 I」にて、特別講義の講師を務めさせていただきました。講義は完全オンライン形式。目の前にあるのはパソコン一台と高性能マイク、そして滝沢先生のみという、異様な(笑)状況の中、講義を行なわせていただきました。

普段、公立の中学校で教壇に立っている私にとって、このような形式での授業は初めての体験でした。オンライン授業の実施やその苦労などについて、ニュースなどではさんざん耳にしていましたが(私自身も、勤務校でオンライン朝学活を行なうことができました)、いざ自分がそのような状況になると、なかなか緊張するなあと感じました。生徒と対面しながら行なう授業の時に感じる緊張感とは、まったく異なる緊張感です。大学の先生方は、このような形の授業をもう 1 年近く(1 年以上?)実施していらっしゃるのかと思うと、ただただ、敬服するばかりです。

できれば、学生さんとは顔を見合わせながらお話をしたかったものです。また機会があれば、大学にもぜひお伺いしたい所存です。

さて、講義から早くも 3 カ月が過ぎ、私はいま、卒業式を目前に控えています。コロナ禍が始まって丸 2 年。未知のウイルスが話題になり始め、突

然の全国一斉休校が始まったあの日から、もう 2 年が過ぎようとしています。

近隣の小中学校からは、毎日のように学級閉鎖や学年閉鎖のお知らせが聞こえてきます。私の勤務校はこれまで、幸いにも閉鎖等には至らず、なんとか持ちこたえて教育活動を継続しています。とはいっても、本当にこの「持ちこたえる」という言葉がびったりな、ギリギリの状態です。

そんな、様々な制限のある中で卒業式を行なうのも、今回でもう 3 回目。保護者の方の入場は各家庭 1 名まで、在校生の参加はなし、合唱はマスクをつけたまま……といった対策を講じながら、なんとか卒業生を晴れやかに送り出そうと、準備を進めているところです。

卒業式や入学式といった式典で、国語科の教師が必ずといっていいほど担当するのが、「門出の言葉」「送る言葉」といった、代表生徒によるスピーチの指導です。学年を代表する生徒とともに、人生一度きりの式典で話すスピーチの内容を考えるのは、その緊張感や期待度からたいへん重責ではありますが、同時にたいへん名誉ある仕事だなあ、とも感じています。

例年、スピーチ原稿を作成するときには、まず、過去のスピーチ内容を参考にします。卒業生による「門出の言葉」の内容として多いのは、3 年間の

思い出を振り返るものや、家族、保護者、先生といった、自分たちを支えてくださった方々への感謝のメッセージです。卒業の舞台ですから、内容はポジティブなものが好まれます。

しかしこのコロナ禍において、卒業生たちには「定番の思い出」がありません。自然教室も、職業体験も、調理実習も、修学旅行も行えませんでした。あるのは「休校」「延期」「中止」といった、ネガティブな言葉ばかりです。

さて、そんな中でどのようなスピーチをするのがよいのだろう、と私はいささか悩んでおりました。嘘をつくわけにはいきませんが、かといって実施できなかった思い出ばかりを語っても、門出のスピーチにはふさわしくありません。とりあえず、「門出の言葉」を担当する代表生徒に、過去のスピーチ原稿を手渡し、「まずは自分の伝えたいことを考えておいで」と指示しました。

そうしてできあがった、仮の原稿。そこにあったのは、「先生たちが、このような状況下の中でも、できることを最大限に行なわせてくれた」という感謝のメッセージでした。

この2年間、本当に様々な苦労がありました。学習の保障、行事の実施判断、安全に活動を行なえ

る方法の検討……。正直に言うと、すべてが思い通りに動いたわけではありません。むしろ、生徒たちには我慢ばかりさせてしまったように思います。それでも、「生徒たちの大切な経験の機会をなんとか失いたくない」という思いで、ここまでやってきました。

生徒の中にはきっと、「先生たちは何もしてくれなかった」と感じている子もいるかもしれません。全員が全員、満足のいく2年間だったとは言えないかもしれません。それでも、卒業式の「門出の言葉」として、代表生徒からこのような言葉が自然と出てきたのは、私たちの思いが、生徒たちに少なからず届いているということの、一つの証明なのではないかと思えます。ここまでやってきたことが、一瞬にして報われたような、そんな温かい気持ちでいます。

これから本番に向け、スピーチ原稿をブラッシュアップしていきます。卒業式当日、この「門出の言葉」が、旅立っていく卒業生たちの道しるべとなることを、巣立ちを見守る家族や保護者の方々の灯となることを、我々教員の、明日からの糧の一つとなることを、切に願います。

■教員という仕事に携わって

I はじめに

「揮毫ってどんな仕事？」と疑問を抱いたのは、教員になってから最初に行われた職員会議でのことである。大学在学中に学修しなかった言葉が飛び交い、「これから教員としてやっていけるだろうか」と不安を感じたことを今でも鮮明に覚えている。しかし、それ以上に小学生のときからの夢であった教員という仕事ができる喜びと期待が大きかった。

そして、現在教員としては5年目（本採用は1年目）を迎える今、大学時代の学びや現在のことを振

さいたま市立木崎中学校教諭 矢口 悠太
（平成29年3月、教育人間学科卒業）

り返りながら、少しでも多くの方の参考になればと思う。

II TA活動での取り組み

大正大学に入学して教職を学びたいと思った理由の一つがTA活動である。大学1年生から実際の教育現場に出て、児童生徒と関わったり先生方の学校での様子などを学べたりすることに魅力を感じた。そのため、1年次から豊島区立清和小学校にてTA活動を行った。

当時の記録を振り返ると、私が学び得たことと

して、次の3点が記されていた。

1点目が「動作や作業をする前に児童に確認すること」である。授業の際に「次に進めても大丈夫か」というような問いかけをした際に、まだの児童は手をあげたり、大丈夫な場合にはその旨を伝えたりすることを先生方が徹底していた。

2点目は「児童を育てる我慢強さを持つこと」である。すぐに注意や指導をすることも重要であるが、児童たち自身に気付かせようとしていた。一方で、先生方も「今はどうするときか」と適切な声掛けを行うようにしていた。児童たちに今の状況を理解させ、周りの様子も見ながら考えてほしいという意図が伝わってきた。

3点目は「伝えるべきときにしっかりと伝えること」である。ある児童が別の児童に対して「容姿に関わること」を言った場面があった。そのことを先生は学級全体へ指導した。その際に、「言葉は人を元気にすることもできるし、逆に人を傷つけることもできる」と話されていた。人にされて嫌なことはしないという当たり前のことを児童たちに理解してもらおうと、指導されていた。

以上のことを踏まえて、「児童たちに学習や生活以外でも、人として生きていく上での大切なことを学んだり、児童たちが自ら行動できるように適切な指導や助言を行ったりすることの難しさを実感した」と記されていた。

振り返ると、実際の教育現場で学ぶことができるのは、自分の経験値にもつながる。特に、実際のTA活動の中で起こった具体的な場면을振り返る記録(=プロセスレコード)を活用して省察することは、次回以降のTA活動や先生方に質問する際にも大いに役立つものである。普段のTA活動以外に、夏季休業日の水泳教室や学習教室などの活動にも参加し、充実したものとなった。

Ⅲ 教職課程での取り組み

私自身が教職課程の学びの中で意識したことは、次の3点である。

1点目は「大学での学び(授業や諸活動も含める)を大切にすること」である。大学での学びは自分の

学習方法を広げてくれた。講義やゼミなどでの学びはもちろん、知識や認識を深めるために授業の復習を行ったり、仲間との議論やテーマをもとにしてレポートなどの成果物を作成したりすることには力を入れた。それが自分自身の成長、将来関わる生徒たちのためにつながるという思いで取り組んだ。そうした日々の積み重ねがあったからこそ、自分の自信へとつながり、大学での学びを大切にしていこうと考えるようになった。

2点目は「同じ志を持つ仲間と切磋琢磨すること」である。教職課程や学科、ゼミに所属する仲間は教員になりたいという共通の夢を持っていた。教職課程での学びが本格化した2年次以降は、模擬授業を定期的実施するようになった。学習指導案の作成、教材の準備、実際の場面を想定した発問や授業展開の工夫など、大学での学びをフル活用して取り組んだ。模擬授業が終了した後は、授業についてお互いに協議を重ね、課題点を挙げることで次回までに改善すべき点が見えてくるようになった。特に教科や科目に関する専門的な知識などは課題とする部分も多かった。そのため、社会科に関連する大学の授業や教員採用試験対策講座などを受講することで定着を図るようにした。

3点目は「学び得たことをさまざまな場面で活用すること」である。上で示したような内容を実践で活かせるのが教育実習であった。教育実習での取り組みについても触れておく。

教育実習を終えた最終日に「絶対に教員になる」という強い決意を抱いたのを今でも覚えている。教育実習では「①言語活動を取り入れた授業実践をすること」、「②先生方はどのように授業を創っているのか見ること」、「③生徒一人ひとりを理解すること」を目標に臨んだ。実習を行う中で「良い先生と思われたい」という気持ちが見え隠れし、生徒に対して優しく対応してしまうことが多かった。しかし、指導する場面では伝えなければならないこと、生徒に教員の思いや言動は伝わることを、TA活動や指導教諭の先生の助言を踏まえて改善することができた。教育実習後は、体育祭や合唱コンクールなどの学校行事にも参加し、学級や学校全体

の様子を見ることができた。

IV 教員としての取り組み

現在はさいたま市内の中学校で勤務をしている。私は臨時的任用教職員として4年間の経験を経て、5年目にして本採用となった。今年度は3年生の副担任として、社会科（1年生2クラス、3年生3クラス）を担当している。日々、目の前にいる生徒のことを第一に考え、職務にあたっているが、自分が思い描いているようにできることが少ない日々が多く、毎日が反省の日々である。しかし、そんな中でも生徒たちに良い変容が見られたときは嬉しくなり、共に喜びを爆発させることもある。

例えば、学習指導において、アクティブ・ラーニング型授業の実践を行った一例を紹介する。教員として2年目のとき、社会科の地理的分野、世界の諸地域の中で学習するヨーロッパ州の授業で「EUはなぜ一つになろうとしたのか」を探究課題として設定し、5時間構成で実施した。その中の3時間目に位置付けたのが、ジグソー法を用いた授業である。4人1組のグループを作り、グループの中で「①工業」、「②交通」、「③生活」、「④経済統合」の分担を決めた後、「個人で調べる→同じ番号同士で共有→グループで内容をまとめる→クラス全体で共有」をした。その際に、学習が苦手な生徒たちも自分たちの分担を熱心に調べ、取り組もうとする姿勢が見られた。また、探究課題のまとめとして、ルーブリック評価を用いたパフォーマンス課題（レポート）を行った。これにより、生徒一人ひとりの学習状況を把握し、個別にフィードバックを行うことができた。

毎回の授業でアクティブ・ラーニング型授業を実践することは厳しいが、学期に一度は単元全体を見通した授業づくりを行っていきたくと心がけている。社会科の授業が好きである生徒が一人でも増えてほしいという思いを持ちながら、「実社会に関心を持ち、様々な社会的事象を自分事として捉えることができる生徒」、「課題に対して自分の考えを持ち、自分の言葉で表現することができる生徒」を育てていきたいと考える。

ある先輩教員から「教員が本気で取り組んだ分だけ、生徒たちもそれに応えてくれるよ」と言われたことがある。教員である我々が「生徒にどんな力を身に付けさせたいのか」、「取組を終えたときにどんな姿であってほしいか」を思い描きながら教育活動を実践していくことが大切である。そのためには、教員自身が自分の言葉で生徒に語る時間を作る。何気ない一言で終わらせるのではなく、一言に重みがあるような言葉かけや指導を行う。生徒を褒めたり叱ったりする場面がいろんな活動の中で想定されるが、日々の学習指導や生徒指導の場面においても、生徒との信頼関係を築くことが第一歩である。生徒を育てるのは、教員一人の力ではできない。同じ学年の職員や教科担当、学校全体での同僚性を発揮すると共に、家庭や地域とも連携して日々の教育活動を行っていくことが求められている。

V 現役生や受験生へのメッセージ

最後に、私が現役生の皆さん、受験生の皆さんに伝えたいメッセージが2つあります。

1点目は「自分の心と体を大切にしてほしいということ」です。私自身もこの5年間で、教員を辞めたいと思ったことは何度もありました。それには様々な理由がありますが、それが積み重なってしまうと自分の心や体にも影響が出てしまいます。それでは、生徒たちだけでなく、自分が辛くなってしまいます。だからこそ、無理はしないでほしいのです。生徒たちのために日々学び続ける教員であることは当然ですが、自分の命を犠牲にしてまで頑張る必要はありません。もし、辛いときは周りにいる仲間や相談できる相手に自分の思いを伝えてみましょう。先ほども述べましたが、教員という仕事は一人ではできません。お互いに助け合ったり支え合ったりすることができるチームであれば、乗り越えていけるでしょう。そのためには、健康が第一です。

2点目は「現在の状況を踏まえて臨機応変に対応できるようになるということ」です。現在、世界では新型コロナウイルス感染症の流行、ロシアとウ

クライナを含んだ国際問題など課題が山積しています。学校現場でも、この2年間で急速に様々なことが変化しました。中でも顕著になっているのは、「ICTの活用」です。私が教員3年目までは、教室にタブレットを運んできて、それを2クラスずつ使うような状況でした。しかし、今では各クラスに1人一台のタブレットが支給され、授業の中で使うのが当たり前になってきています。クラス全体で考えをまとめる際には、タブレットに打ち込んで送信すると他の人の考えを見ることができ、発表しなくともクラス全体で共有ができ

るようになりました。生徒たちの学びも大きく変化しようとしています。これから先、予測困難な時代を生き抜いていく力を身に付けさせるためにも常に臨機応変であってほしいと思います。

教員を志す皆さんへ、どんなときでも常に「生徒のことを第一に」考えてください。どれだけ生徒に本気で向き合い、語り掛け、一緒に取り組むことができるのかで教員人生は大きく変わります。ぜひ、未来を切り拓いていく子どもたちのために一緒に頑張っていきましょう。

■教員を目指すみなさんへ

土浦日本大学高等学校教諭 五十田勇登
(平成29年3月、教育人間学科卒業)

1 はじめに

私は現在茨城県にある大学付属の私立高校に勤務しています。縁もゆかりもありませんでしたが、どうにかここで教壇に立ち、中学生からの夢をかなえています。本校では非常勤講師を2年、専任となって2年目を終わろうとしています。ここでの4年間は自分を教員として大きく成長させてくれましたが、それと同じように大学で学んだことを遺憾なく発揮しています。今回の執筆は、将来どこかで共に働く人たちに少しでも参考になるよう残したいと思います。

意するのか、考えなければならないことがたくさんあります。教材研究の基礎はここで培われたと思います。また他のメンバーの授業を見ることで、同じ単元でも扱う教材や教授方法の違い、幅広く授業について学ぶことができました。模擬授業を数多くこなしたことは、教壇に立って生徒に教える練習はもちろん、その準備についても多く学ぶことができました。そして何よりこれだけの場数をこなせば自信もつき、教育実習でも、勤務してからも臆することなく授業を展開することができました。

2 在学中の取り組み

私が在学中に特に取り組んだことは模擬授業です。2年生の後期の教科教育法の授業でしっかりとした授業をできるようにと、夏休みから模擬授業をひたすら行うことにしました。私は教職研究会に所属していたため、メンバーと毎週土曜日に持ち回りで模擬授業を行うというのを3年の12月ごろまでやっていました。月に1回は順番が回ってくるので、10種類近くの指導案、教材作り、教材研究を行いました。たった一つの内容でも、どう教えるのか、どんな言葉を使うのか、どんな教材を用

私は、授業はやらないと上手くならないと思っています。今でも冬休みの約2週間だけでも授業をやらないだけでも怖くなります。毎年同じ教科書の同じ単元を教えていても、複数クラス持っても同じ授業はありません。一回一回の授業で常に反省と改善を繰り返しています。それでも準備不足を感じることは多々あります。大学時代にもっと専門教養を、さらに言えば地歴公民どれでも教えられるように知識を深めておくべきであったと後悔しています。在学中は専門教養を高めるための勉強をたくさんしておくべきです。

3 非常勤講師として

教員として働こうと思っても、必ずしも正規採用で即勤務できるとは限りません。公立の臨任や私立の非常勤講師という選択もあると思います。私は現在の高校に最初は非常勤講師として勤務しました。非常勤講師は給与面や福利厚生では正規採用に劣ります。しかし、非常勤講師時代の授業だけにとことん時間をかけられたことは、授業準備の基礎が出来上がり、大きな財産となっています。

非常勤講師として勤務したことで得られたことを伝えたいと思います。私の勤務校は大学附属の私立のため、付属校推薦を目指す総合進学コース、一般入試で国公立を目指す特別進学コース、留学がカリキュラムに組み込まれている英語に特化したグローバルスタディコース（GS）の3コースに分かれています。初年度は総進1年、特進1年の現代社会、総進2年の倫理と政経、GS3年の公民演習の計20コマを担当しました。コース別を考えると5科目もあったので、毎日授業準備と教材研究に追われる日々でした。しかしこの経験が今の私の教員生活を大きく支える土台を作ってくれました。

例えば1年現代社会では、教科書や単元は同じでもコースが異なれば理解度も関心も大きく違います。現社はまさに現代の政治システムや社会情勢を学ぶ科目であるため、社会への関心の有無が理解度にも大きく影響を与えていました。

総進では、いかに教科書の内容をわかりやすく噛み砕いて説明するかが重要でした。私が思っている以上に生徒にとって、教科書は勉強するための重要なもの、という認識が強いです。総進の生徒達には、教科書にある内容をきちんと理解させることが最重要事項でした。現実世界とのリンクも大事ですが、仕組みや事実の理解を重視する授業が多かったです。

一方特進では、ニュースや政治に興味ある生徒も多く、ただ教科書の内容を教えるだけでは不十分でした。その日の単元に関連するニュースや、世界史・日本史との関連性を毎授業取り入れるなど、教科書の内容以上の理解を図ろうとしました。彼

らは、興味を持てば主体的に学んでくれます。今学ぶ内容が今の社会を知るためにどう役立つのかを考えさせられれば、おのずと理解度も学習意欲も高めることができました。

担任を持つ現在、当時と同じように授業準備をしようとする、おそらく仕事は回っていないと思います。今は非常勤時代の土台があるので、反省と改善でカバーできている部分が大きいです。非常勤講師は授業力を高める最大のチャンスだと捉え、挑戦してもよいと思います。

4 教育実習生を受け持つ

今年度は教育実習生を受け持ちました。実際に自分が受け持つことでわかったこと、教育実習生にどんなものを求めているのかを、これから実習に行くみなさんに伝えられたらと思います。

教育実習生に一番頑張ってもらいたいことは「堂々とやること」です。上手い授業、わかりやすい授業、生徒とのコミュニケーションときつといういろいろなことを意気込んで挑むと思います。私が実習生の時も、大学で学んだことを発揮しよう、生徒と積極的にコミュニケーションを取って面白くてわかりやすい授業をやろうと思っていました。しかしそんな簡単に面白くてわかりやすい授業なんてできません。でも実習生だろうと教壇に立ち、先生と呼ばれる以上は堂々と先生にならなければなりません。大きな声ではっきりとしゃべる、少しでもわかるように伝わるように堂々とすることが大切です。結果は後からついてきますし、どんなに練った研究授業でも課題は残ります。失敗を恐れずに実習に挑んでほしいです。

また、なるべく多くの教科科目を越えてたくさん授業見学をしてほしいと思います。私は担当した実習生に、最低でも地歴公民の先生全員の授業を見学するように指導しました。担当は公民でしたが、それ以外の同じ地歴公民の授業であれば参考になる部分はたくさんありますし、授業でどんなことを大切にしているかを学ぶことは、自分の授業に応用できると思います。実際に勤務すると、他人の授業を見学することはなかなかできません。

実習生は授業を見学することも勉強になります。実習中は授業準備に追われる日々になりますが、せっかく現場を見る機会です。たくさんの授業を見学して欲しいと思います。

5 最後に

私は教員として「生徒たちに何を遺すか」ということを考えています。それは生徒に対してだけでなく、同じ大学で学ぶみなさんに対しても同じだと思います。私が在学中も教育実習に行った先輩方の報告や、大学院や実際に教壇に立っている人たちの話を聞いて、より教員として働きたいとモ

チベーションアップにつながりました。また勉強になることが多く、自分の教員としての考え方も影響を与えていると思います。今回の報告が少しでもみなさんの教員として働きたいと思う気持ちを刺激できたらと思います。いつかこの文章を読んだ方々と一緒に働ける日を楽しみにしています。

稚拙な文章ではありますが、ここまで読んでいただきありがとうございました。またこのような機会を与えてくださった滝沢先生をはじめ教職鴨台会に感謝申し上げます。

■教員の仕事について考える

私立高校教諭 今関優斗

(平成 29 年 3 月、歴史学科東洋史コース卒業)

本題に入る前に

私は、2013 年大正大学文学部歴史学科東洋史コースに入学し、教職研究会「えんぴつ」（教職サークル）に入った。卒業後、2017 年から福島県の私立高校で常勤講師として 3 年間務め、現在は茨城県の私立高校で 2 年目を終えようとしている。5 年目を終えて 6 年目に突入しようとしている一人の私学教員が現役生に伝えられることは何かと考えると、「教員の仕事」とは何かということだろう。短い教員生活の中で考え続けたことをもとに「教員の仕事」とは何かを伝えられたらと思う。

本題

これまでの教員は、黒板と喋りで勝負ができた。でも今の教育行政は「主体的・対話的で深い学び」だったり、ICT、GIGA スクール構想、プログラミング教育などを推し進めている。主語を子どもとした上で授業を考えろ、という国の指示である。つまり、国が黒板と喋りの授業を求めなくなった。時代が変わった証拠である。端的に言って、もう教員の仕事は「教える」ことではない。

【時代の変化】

時代が変わったということ、現勤務校では「総合的な“探究”の時間」で『ENAGEED』という教材を使っている。この教材は、「100 年前まであり得なかったことが、今あり得ている。今ある仕事もなくなり、新しい仕事生まれてくる。」という話から始まる。AI やロボットが進歩したこの時代、セルフレジが登場したり、電子マネーが普及し、何かと“自動”である。確実に今ある仕事の大半は消えるだろう。例えば、コンビニのレジ打ちや品出し、簡単な事務処理、警備などロボットや AI によって自動化されてしかるべき仕事がある。そして、新しい仕事が誕生するだろう。最近の例でいえば、YouTuber がいい例だ。

では、教員はどうだろうか。おそらく、学校がなくならない限りは教員の仕事もなくなる。ただ、授業は黒板と喋りで行うものではなくなるだろう。さらに、教員がやるべきことでもなくなるかもしれない。なぜなら、すでに YouTube の講義動画やスタディサプリで十分だからである。

現勤務校では、一人に一台 Chromebook を持っている。何かと便利で、このコロナ禍のもとでは大

活躍だった。ただ、社会の授業で考えてほしい。GIGA スクールが進み一人一台何かしらの媒体を持っている教室で、黒板に板書しながら、かつての授業を進めていると話の内容のほぼすべてが机の上に置いてある ICT 教具（タブレットや PC）から獲得できる内容なのである。前日に見ることもできるし、先生の話と同時進行で講義動画を再生することもできるだろう。社会の教員として時事問題を解説することも、YouTuber や話のうまい芸人さんの YouTube のほうがわかりやすい。そして、なにより生徒はそのほうが見る。

もはや、勉強を教えることや知識を与えることはネット上で十分な時代になっている。もう教員の仕事は「教える」ことではない。

【教員のリアル】

さて、話題を変えて、私の仕事を例にお話ししたい。1年目から2年目まで強化指定部のラグビー部で、3年目は強化指定部の女子ハンドボール部についていた。学校を変えた4年目、5年目も強化指定部の男子バレーボール部についていた。毎日部活に明け暮れる日々である。どの部活も私の専門の競技でもないし、自分が全国大会や関東大会へ出場したという経験はない。全くわからない世界に突然入れられた感覚だった。それでも部活という組織の一員として、チームの一員として喜怒哀楽を生徒とともにした。中型自動車免許を取って、マイクロバスで全国各地に遠征に行っている。また、ラグビー部のときには、コーチのライセンスもとった。ウェイトトレーニングの勉強もして、食事の栄養素などの勉強もした。試合や練習の動画を撮影して、それを編集し、データに起こす。そして、それをチームに伝達するアナリストの真似事もやった。もちろん競技が変わるごとに競技の勉強もしている。2校目の現勤務校では、広報の担当として YouTube 動画の編集もしている。オープンスクールの企画運営もやっている。これと並行して授業をやって、クラス担任をやっている。これが教員のリアルである。とにかく、なんでもやる。本当に何でもやる。学生のときにまさか自分がマイクロバスを運転し

て東日本を走りまわっているなんて思いもしなかった。とにかく教員の仕事は幅が広く「なんでも屋さん」だ。

【興味関心を惹く授業】

学生時代の私は、教職サークルで模擬授業をするとき「導入」にとっても力を入れていた。興味関心を惹く教材を探してきたり、話のもっていき方を工夫したり、趣向を凝らして模擬授業を行うことに力を注いだ。黒板に字を書いて、地図を書いて、とにかく興味関心を惹いたうえでわかりやすい授業をしようと心がけていた。実際、教壇に立つてからも導入で興味関心を惹いてわかりやすく面白い授業をすることだけを追求していた。世界史でも日本史でも政治経済でも地理でも同じように。

実際、興味を持ってくれる生徒も若干いた。歴史に興味なさそうなイケイケの女子生徒が「歴史面白い！」ってわざわざ言いに来てくれた時には飛び上がりそうなくらいうれしかった。でも、その授業の名簿には55人の名前があった。つまり私の趣向を凝らした授業は、1/55人にしか届かない授業だった。

テレビでは池上彰さんが難しい時事問題を説明している。みんながみんな口をそろえて、わかりやすいと感想を述べる。そりゃそうだ。テレビ局の財力と美術さんたちの能力を結集して、スライドをつくり模型を作り、パネルを作る。テレビ局の蓄積である映像を持ってきて昔の映像を流す。そして池上さんがやわらかい口調で説明を付け足す。それはどう頑張ったってわかりやすくて面白い説明であり、そういう番組になる。そんなことができたら生徒はみんな社会科や時事問題に興味を持ってくれるかもしれない。でも、こんなことは教員はやってられない。なぜなら、前述したように教員の仕事は幅が広すぎるから。

だからと言って、無難に済ます教員にはなりたくない。授業でも部活でもクラスでも、とにかく子どもたちに何かを伝えられる教員でいたい。そう思いながら、いろんな本を買っては読んで、読まな

くなって…。そんな埋もれていた「積読」の中から再発見して、なんとなく読むようになったのが、『学び合い』の本だった。そこから私の教員としての言動は大きく変わっていった。

『学び合い』を単語帳のように説明すると、上越教育大学教職大学の西川純先生が提唱するアクティブ・ラーニングの手法の一つという説明が無難だろう。ただ、『』を必ずつける。この『』に奥の深さがあって、私は自分の中に落とし込むまでに2年かかった。単なる学び合い学習ではない。詳しいことは、西川先生のHPを見てもらうのがいいだろう。

【「教員の仕事」とは何か。】

西川先生が講演や書籍の中で何度も述べることとして、

○高校・大学を卒業した生徒・学生の3分の1以上が非正規雇用になっている。

○就職した高校生、大学生は3年以内に3割以上が離職する。

(西川純『人生100年時代を生き抜く子を育てる！個別最適化の教育』 2020 学陽書房)

がある。それ以外にも、現勤務校の探究学習ではないが、今ある職業が消え、新しい職業が生まれてくる世の中である。コロナで一部の業界にここまで影響が出るなんて予想もしなかった。加えて、ロシアがウクライナに侵攻するなんて日本にいる一部の専門家以外に誰が予想しただろうか。

こんな就職も安定しない、先の読めない時代を一人で歩いていかなければならない生徒たちに、自分たちが生徒や学生だったころに受けた授業をそのままやっていて、何を伝えられるだろうか。何を残せるだろうか。そんな疑問を西川先生は投げかけつつ、『学び合い』の話を始める。私たち教員が、子どもたちに教えられる力、与えられる能力は一つ「人とつながる力」である。そして「教員の仕事」は「人とつながる力を養うこと」である。

アルバイトをしている学生や就労経験のある方ならわかると思うが、仕事をするということは、いろんな人とつながりを持って仕事をするこ

と。英語が得意な人がいれば、表計算ソフトに長けている人もいるだろう。私はどちらも苦手だ。だから、得意な人に聞く。そして、アドバイスをもらったり、効率的にする関数を教えてもらったりする。そうやって効率よく仕事を進め、成果を上げる人間のほうが有能な人間である。

そういった力をつけるのは、就職してからでなくともいい。だから、授業の中でもクラスみんなで作る行事の中でも、人とつながりを持って協働して何かをする経験を積むことができれば、社会に出てからも人とつながりを持って、自分の能力を補いながら効率よく仕事をするができるはずだ。もっと言えば、できそうもない仕事や作業を、人に話しかけられないからと遅くまで残って一人で何とかするよりも圧倒的に「まし」である。

生徒たちに教員が与えられることは「人とつながりを持ち、協働して何かをやり遂げる」という経験である。

私のクラスの学級目標は基本的にずっと同じにすると決めている。1年生・2年生のクラスは「全員で～With Everyone～」で、3年生のクラスは「一人も見捨てない」である。クラスの話し合いは一定のルールを定めてすべて生徒に任せる。席替えも修学旅行などのグループ分けもほぼ介入しない。

私の授業（高校2年生特進コースの世界史B）では、1年間の中で50分1コマの授業を全て講義形式で行った授業は一度もない。一度も私の説明を聞かずに神聖ローマ帝国までたどりついている。

クラスの話し合いに参加しない生徒はいない。授業中で寝ている生徒もいない。全員がなんとなく世界史Bに取り組んでいる。まだまだ修行が足りないのはもちろんだが、興味関心を惹き、わかりやすく楽しい授業をしているときよりは、圧倒的に「まし」である。その種明かしは『学び合い』にある。この先の世の中を胸を張って生きていける生徒を送り出すために、もっともっと「人とつながる力」を育てる教員として精進していきたいと考えている。

また、先の読めない世の中を生きていくのは、生徒たちだけではない。我々教員も、この駄文を最後まで読んでくれている現役生も同じだ。つまり、我々教員も多くの人と関わって生きていかなければ

ならない。今、一緒に授業を受けている友人やたまたまグループワークのメンバーになった他学科の知り合いが、自分の人生を助け、サポートしてくれる人になるかもしれない。それが「人とつながる」ということである。

■なぜ、教員を目指しているのか…

都内公立中学校教諭 木島龍哉
(平成 30 年 3 月、教育人間学科卒業)

はじめに

「あなたはなぜ、教員になりたいのですか？」これは、あなたたちの大学の卒業生であり、現在教壇に立っている人間が先輩風を吹かせたい！というわけではないです。この間いこそが教員になるうえで原点であり、終着点だと思っています。私自身、大学 2 年次には教員を目指す理由というものが分からなくなり悩みました。普通に大学を出て就職をしたほうがいいのか？ 教員になってどうするの？ そんな思いが日に日に強くなっていきました。しかし、いま私は東京都で採用されて 2 年目、1 学年の担任をしています。もしかしたら、私の拙い文章を読んでくれている学生の皆さんの中に在学中の私と同じ悩みを抱えている人がいるかもしれません。そんな人はまず原点に立ち返り、己と向き合ってみてください。6 年前の私のように。

1. 覚悟を決めるまで

悩みに悩んだ学生時代でしたが、結局教員を志し続けることができたのは沢山の子どもの出会いでした。大学に入ってすぐ塾講師のアルバイトを始め、ハッキリとしていなかった教員を目指すというビジョンが徐々に明瞭化しました。教採浪人時代を含め 6 年間塾講師のアルバイトをして、全部で 5 つの塾で働きました。数えきれない数の生徒たちと関わってきたことで、今でも地元に戻り、コンビニに寄るとレジが元担当生徒なんてことはざらです。そういう人との繋がりが素晴らしい。立派な大人に成長していく子ども達の進

路に少なからず影響を与えられた存在なんだな。そんな気持ちが私を教員へと導く原動力だと気がかされ、絶対に教員になろうと覚悟を決めました。元々、小学校の教員志望で勉強をしていました。しかし、現在は中学校の教員として働いています。今となつてはこの進路選択は自分にとってのベストだと思っています。中学校の教員の方が採用試験の倍率が高いし、特に社会科は門が狭いです。でも、中学校の教員を目指したいと思うに至った経緯の中で、大学時代の TA 活動は欠かせませんでした。

小学校での TA 活動を 1 年間続けました。活動自体はすごく楽しかったし、とても良い経験として自分の中で今も活かされています。しかし、1 年間を通して「自分は小学生を相手にするのが向いていない」と感じました。もし、TA 活動をしていなかったら小学校の教員になっていたかもしれません。そして、そこで初めて向いていないと知り、仕事に対して悩みを抱えてしまったかもしれない。自分の向き不向きが知れただけでも TA 活動をした意味は非常にあったように感じます。

実際に教員を目指すにあたって、大きな関門は採用試験に受かることです。学生の皆さんは単位を取ることが主になってしまっている人もかもしれませんが。実際私もそうでした。滝沢先生の授業では 3 回ほど単位を落としました。しかし、教職教養の勉強をしていた時に大学で学んでいたことがたくさん出てきて、今となつては単位を落として

もらってよかったのかもしれないと思っています。

2. 教員になっての現在

この文章を書かせてもらっているので当たり前ではありますが、私は今、都内の公立中学校の教員として働いています。ここに至るまでに、学習支援員、産休代替教員を経験しましたが、今自分が抱える仕事量、責任は段違いです。自分の準備した教材で授業を受け、自分の指導を受け間違いを正され、自分のクラスで友達との集団生活を学ぶ。大きな責任を伴いますが、その責任が大きくなるだけ、やりがいや喜びも大きくなります。自分を先生と呼び学ぶ姿勢を見せてくれる生徒にどれだけのことを教えてあげられるかが大切であり、生徒の質問にすぐ適切な返答ができるかが生徒と教員の信頼に繋がるということを実感します。そこで、私が普段から意識していることの中から3つ紹介します。

① 教材研究は抜かりなく

当たり前のことであり、基本中の基本です。しかし、この当たり前が最も重要であることを痛感します。教材研究していたおかげで生徒の信頼を損なわずに済んだ場面は何度もあります。また、教材研究が充分だと自分の説明に自信が付き、説得力が出ます。生徒はよく人を見て、教員によって態度を変えることもしばしばです。それが良くないことだとは指導しますが、事実であり、自分が中学生だった頃を思い返せば、思い当たる節はいくらでもあると思います。自分の指導を生徒が素直に受け入れられて、より良い教育を受けさせるためにも、自分がやらなくてはいけない努力は非常に多いです。

② 教室美化は学年一！

まず、汚い教室で授業したくないです。そして、汚い教室で生徒が良い教育を受けられるとは思っていません。自分のクラスの生徒には、前の時間の黒板の字が薄くでも残っていたら次の授業の先生に失礼だから毎時間意識して消すことを徹底させています。かばんは決まった場所に置き、ごみが落

ちていたら拾う。しかし、相手は子供です。なかなか指示通りに動いてくれません。ではどうするか？ 答えは簡単です。教員が動くことです。ゴミが落ちていたら拾う。掲示物がずれていたら直す。机が曲がっていたら整える。先ほども述べましたが生徒は人をよく見えています。そのうち生徒自ら気づきゴミを拾うようになり、掲示物を直すようになり、机を整えるよう声掛けするようになります。まだまだ素直な中学1年生だからこそ細かい部分を徹底させ、当たり前にするので3年生まで継続してできるようにさせます。そして、次年度クラス替えした先のクラスでも同様の行動をとることができたら、学年全体に良い雰囲気をもたらしてくれるだろうと信じています。

③ 1日1回以上自クラスの生徒と話す。

やはり生徒の細かい変化や悩みに気付くためには生徒1人1人と話すことが重要だと思っています。これを毎日やることで生徒は先生と話すことへのハードルも低くなり、普段の会話の一部として悩みなんかを話してくれることも多いです。それでも話せないような重い悩みはSC(スクールカウンセラー)さんの力を借り、組織として解決する必要があります。生徒は意外と小さなことで深く悩んだりするので、教員が話を聞くことで負担を和らげてあげることも大事な役割の1つだと考えています。

今はまだまだ自分の実力でできることも少ないので意識が足りない部分も多いと思います。しかし生徒のためにやっていることは必ずわかってくれます。自分が教員としてどれだけ仕事を頑張っているか評価してくれるのは管理職の先生でもなく、教育委員会の指導主事でもありません。学校の生徒です。子供の反応が素直な自分への評価です。私たち教員の仕事の根幹は生徒のためです。教員になった際はぜひその気持ちを持ち続けて頑張ってください。

3. 教員となった今の夢

教員になるまでは教員になることが夢でした。

しかし、教員となった今は新しい夢があります。

それは、自分の教員としての姿を見て 1 人でも多くの教え子が将来教員を目指し、一緒に働いてくれることです。

私は教員採用試験に 3 度挑戦しています。2019 年 3 月、当時の勤務校の卒業式前日、1 人の生徒が私に手紙をくれました。「2 年生の時から放課後受験の相談や、受験勉強を見てくれてありがとうございます。おかげで志望校に合格することができました。将来は私も木島先生と同じ中学校の先生の先生になろうと思ったのでいつか一緒に働きましょう。」そう綴られた手紙に書かれた「先生」という文字は半端な立場の自分には重くのしかかり、自分を鼓舞するには充分すぎました。そしてその年、私は合格しました。

その手紙をくれた子は現在高校 3 年生、進路がどうなったかは全く知りませんが、その子の手紙に励まされたのは事実です。

そして教員となった今、その手紙をくれた子と同じように将来教員を目指す子が増えたらとてもうれしく思います。そして同じ勤務校で働き、生徒

の成長を支援する楽しさを分かち合いたいです。

4. 教員を目指す大学生へ

教員を目指し勉強している学生の皆さんは、教員という仕事の辛い面を知りながらも挑戦している人ばかりだと思います。もちろん辛いことも大変なことも多い職業です。学生の皆さんが想像する以上に大変です。しかし、教員でしか経験できない魅力もたくさんあります。ぜひ皆さんにも、私が感じている魅力、楽しさ、やりがいを共感していただきたいです。教員への道のりは長く、辛いでしょう。教員になってからも日々勉強です。しかし、教員という職業にはそれだけの苦勞をする価値があると思っています。

「あなたはなぜ、教員になりたいのですか？」悩んだ時にはここに立ち返ってください。自分の気持ちを確認できます。

大変だとは思いますが、一生懸命努力して、教員として未来に満ち溢れた子供たちと一緒に育てていきましょう。

■一年間を振り返って

現在、私は東京都の公立中学校で国語科の教員として働いています。私が大正大学を卒業して現在の仕事に就き、もうすぐ 1 年を迎えようとしています。昨年も「4 年間の教職課程を終えて」という形で書かせていただきましたので、ここでは、長年目指してきた教員という仕事に就き、初任者として日々研鑽に努めたこの 1 年間について書かせていただきます。

1. 教員一年目の学校生活

現在所属している中学校は、生徒数が 560 人を超える、東京都の公立中学校の中では比較的大規模な学校です。私が一年目に受け持ったのは第 1 学

北区立明桜中学校教諭 中村比南 (令和 3 年 3 月、文学部日本文学科卒業)

年で、この学年の生徒たちは新型コロナウイルス感染症の流行により私立中学校の受験希望者が少なかったためか、例年よりも 20 名ほど多く入学してきました。

今でこそ、この 1 年間で様々な仕事を経験させていただき、少しずつ自信がついてきているところではありますが、教員としての仕事が始まり、夏季休暇期間を迎えるまでは、自分自身も新しい環境での生活に慣れることに精一杯で、沢山の不安を抱えていました。しかし、私が、このような不安を乗り越えることができたのは、生徒や他の先生の存在が大きかったと思います。

小学校から上がってきた 1 年生に、授業や普段

の学校生活の規則を定着させられるかといった不安もありましたが、生徒の日々成長していく姿や自分と同じように新しい環境での生活に一生懸命慣れようと努めている姿を見ていると、自然と活力がわき、この生徒たちにできる限り応えてあげられるようにしようと努めることができました。

また、大学4年生の教育実習では経験することがなかった、校務分掌の仕事や学級または学年運営の仕方、その他様々な仕事を初めてすることになり、一人では何も分からないということが、私の中で特に大きな不安になっていました。しかし、周りの先生は、それらの多くの仕事を一つひとつ、実際にやって見せてくださり、とても丁寧に教えてくださいました。初めから無理にひとりで仕事をこなそうとしても、かえって迷惑をかけてしまう可能性もあるということを理解した上で、分からないところは聞き、教えてくださった先生には、常に感謝の気持ちを言葉で伝えられるように心がけています。

さらに、教育現場で働くことになり、この1年間で改めて実感したことは、どのような些細なことでもすぐに教員の間やスクールカウンセラー(SC)、スクールソーシャルワーカー(SSW)など関係機関の方に共有し、多くの教員で対処方法を考え、取り組むことの大切さです。これが、大学時代にもよく耳にしていた「チーム学校」ということなのだとはよく分かりました。また、生徒に少しでも変化があれば、こまめに保護者の方へ報告し、学校と家庭をつながりやすくすることにより、生徒が学校生活をより安心して送れるようになるということも分かりました。

この1年間で学んだことは、これらだけではなく、沢山ありましたが、ここでは割愛させていただきます。

この記事を書かせていただいている現在の私は、少しずつ学級締めの日に近づくことを寂しく感じながらも、来年度はどの学年を受け持つことになるのか、2年目は自分も学級を持つことになるのか、その際にはどのような学級にしようか等、生徒と同じように期待を膨らませながら新学期を楽しみ

にしています。残り数週間ほどの短い時間の中で、現在受け持つ第1学年の生徒たちに伝えられることを十分に伝え、教員2年目を迎えたいと思います。

2. 教職を目指す現役生へ

教員として働く今、一番欲しいものは何かと聞かれると、それは「時間」です。

現在、教職を目指して勉学に励んでいるみなさんは、毎日をどのように過ごしていますか。私の大学時代を振り返ると、自分で組んだ授業に参加し、そのほかに、アルバイトをしたり、趣味に没頭したりと、好きなことを自由にする時間が十分ありました。

しかし、教員になると、そのような時間はなくなってしまいます。特に初任者の間は、長期休暇期間を除くと、全くないといっても過言ではありません。スケジュールが埋まっていて忙しいほうが充実していると感じる私でも、自由な時間がほしい、と頻繁に思うほど、やはり中学校教員という仕事は多忙です。

このことから、私が現役生のみなさんに今やっておくべきこととしてお伝えしたいことは、2つあります。

まず、時間のある学生の間には様々な経験を積んでおくことです。それは、どんなことでも構いません。興味を持ったことや気になったことがあれば、何でも挑戦してみると良いと思います。何かに挑戦したり、熱中したりと、様々な経験を積むことは、教員になったときに自分の話の持ちネタにすることができます。子どもたちは先生に興味を持ち、どんな人なのかをとっても知りたがりです。その際に、自分の学生時代の経験談を話すことで、心の距離をグッと縮めることができます。例えば、私はディズニーが大好きなので、幼稚園から一緒だった友人と、大学2年生の3月に、東京駅八重洲口から東京ディズニーリゾートがある舞浜駅まで6時間かけて歩いて行くことに挑戦しました。電車に乗って短時間で行くのと、寒い中を長時間かけて歩いて行くのでは、パーク外からシンデレラ城が見

えたときの感情は全く違ったということと、苦労した分、これまでにはないほどの達成感を味わうことができたという話を子どもたちにすると、想像以上に盛り上がり、国語の授業の内容とつなげることも出来ました。当時は興味本位でやった挑戦でしたが、今では他の何にも変えられないほど特別な思い出になっています。

なかなか自分でやりたいことが見つからないという人は、とにかく沢山の本を読んでください。実際に、何か挑戦するわけではなくても、沢山の本を読み、その作者・筆者の考え方や経験を自分のものにするのも良いと思います。

もう1つは、できる限り多くの人と関わり、様々な情報を得られる環境を作ることです。私は、自ら積極的に他者とコミュニケーションを取ることは、正直、得意ではありませんでした。しかし、教員になるためにはそのようなことは通用しないと、自分ではわかっていたので、大学時代は、授業で関わった教授や先輩、同級生、後輩との関係を大切にしよう、常に心がけていました。私が、充実した大学生活を過ごすことができたことも、採用試験に

合格したことも、卒業後もこのように記事を書かせていただいていることも、すべて、私自身の力ではなく、その私の周りの多くの存在の力が大きく影響していると感じ、心から感謝しています。そのため、みなさんにも自分一人で頑張るのではなく、自分の周りの人と支え合うことの大切さを感じて欲しいと思います。

長くなりましたが、現役生のみなさんも、教職を目指し、夢を叶えたいという一心で、今頑張っていると思います。教職を目指すうえで、特に大切なことは、教育現場を知ることです。大正大学を卒業し、教員として働いている先輩方は沢山います。先生として働いている人の話を聞く機会があれば、必ず参加することをお勧めします。早い段階から、教育現場を知るとは、モチベーションを保ち、自分の自信にもつながります。

どうか、「教員になりたい」と強く決心した時の気持ちを忘れず、最後まで頑張ってください。現役生のみなさんを心より応援しています。

■勤務校における現状報告

都立工業高校教諭 中村悠花
(令和3年3月、文学部日本文学科卒業)

勤務校での仕事について

私は、都立の工業高校に勤務している国語科の教員です。

昨年までは、大学で学生として学んでいた私が、今日も高校生の前で教員として教壇に立っているのが、今でも不思議な気持ちです。

工業高校の一般的なイメージはというと、荒れているイメージになってしまうかもしれませんが、私が勤務している工業高校は、エンカレッジスクールという学び直しをする学校で、現在はそこまでひどく荒れているわけではありません。学び直しをするということで、漢字だと高校1年生の漢

字テストで、小学2~3年生レベルから学び直しをしています。国語の教科書を使った授業では、中学生レベルの教材1つを1ヶ月から2ヶ月間かけてゆっくりと学んでいきます。

生徒たちはとても素直です。機嫌が良い日もあれば、機嫌が悪い日もあります。授業で質問をした際に、素直に答えてくれる日もあれば、ちょっとすねてしまって答えるまでに時間がかかる日もあります。

毎日を本当に素直に、必死に生きています。生活のために学校帰りにバイトをして、自分で学費を払って必死に登校している生徒もいます。問題行動を起こしたり、荒れている生徒も、時間をかけてよ

く話を聞いてみると、ご家庭の事情であったり、大人への不信感から荒れてしまっている場合もあり、見た目やその生徒の態度で生徒にレッテルを貼るのではなく、きちんと生徒の話に耳を傾けることが大切だと強く感じました。

教員として心がけていることは、生徒との日々の会話です。生徒が何かに悩んでいる際に、保護者や友達に相談できる環境があればもちろんそれで良いのですが、教員にも相談しやすい環境があれば生徒の助けになるかと思います。そのため私は、日々の生活の中で、生徒に寄り添うことができるようにしています。

現在は教務部に所属し、臨時時間割を組んだり、テストの時間割を組んだり、チャイムの時間設定をしたり、中学校への広報活動の準備をしたり、入試に関わったりと多岐にわたった業務に携わっており、毎日正直疲れ切っています。ですが、日々の生徒との会話で癒されたりすることで、リフレッシュして日々、頑張っています。

来年度から、都立高校でも生徒一人一台のタブレット端末を活用して授業を行うことになっているのですが、その活用の仕方を0から検討していく等、これからも教育現場は混乱が生じると予想されます。そんな中でも、日々負けずに働いていきたいと思っています。

教職課程での学びについて

教職課程の授業が本格的に始まる大学2年生では、月曜日から土曜日まで大学に通う時間割になりました。レポートや課題も多く、バイトやサークル活動も含めると、大変忙しい日々でしたが、どの授業も全て教員採用試験に必要な知識や教育実習で役に立つと考え、できるだけ良い成績で単位を取ることに集中していました。教育課程論、教育制度論、生徒・進路指導論、心理学概説や日本国憲法、特別活動の指導法等、今まで深く学んでいない分野の知識を、基礎の基礎から学ぶことができました。

また授業の中で、現代の教育に関する様々な問

題の提示をしてくださる先生が多く、教員に何が求められているのかを実際に考える機会が与えられたことは、教員採用試験や教育実習で役に立ちました。グループやペアで話し合う時間を設ける形の授業や周りの学生と協力して課題に挑戦する形の授業もあったので、その際には自分の意見を明確に伝える練習ができたことで、二次試験での面接対策になりました。

教員を目指している後輩へのメッセージ

大学2年生から始まる教職課程の授業を受けていく中で、必ずどの先生もおっしゃっていた言葉があります。それは、『教員という職業は、激務であるから、生半可な気持ちで目指すのであれば、やめなさい。』『教員免許をもっているだけでは、なんの意味もないから、免許を取ると決めたのであれば、本気で教員を目指しなさい。』という言葉です。

この言葉を何度も伝えられながら、正直に言うと私は、何度も迷い、悩みました。悩みながらも教員を目指して頑張りました。大学生は、自分の“将来”がもう“将来”という相当先のようなイメージではなく、もうすぐその現実として、2年後、3年後に自分が何をしているのかを具体的に想像し、決断し、行動しなくてはなりません。現実逃避したくなるかもしれませんが、後悔しないように、日々勉強してください。眠さに負けてしまうことや、友達と遊びに行くこと、飲みに行くこと、一人の時に特に目的もなくスマホをいじること、大学生には数え切れないほど誘惑が多いですよ。頑張りが辛ければ、時には誘惑に負けてもいいかもしれません。本当に辛い時には泣いてもいいと思います。自分の心が折れないように、でも自分が納得できるように大学生活を送ってください。

とにかく諦めずに、ギリギリまでねばって頑張るしかないと思います。これまでの時間は戻りませんが、今からの時間でどうにかすることは可能です。大正大学で学んだことを思い出し、直前まで必死に頑張ってください。

私はこれからも何十年と教員生活を続けていき

ますが、目の前の生徒は、一度限りの出会いだということを忘れずに一日一日を大切に過ごしていき

たいと思います。

■教員 1 年目を終えて

匝瑳市立八日市場第二中学校教諭 増淵静流
(令和 3 年 3 月、文学部歴史学科卒業)

はじめに

私は大正大学の歴史学科日本史コースを卒業し、教員となって 1 年が経とうとしています。私が教職を本格的に志したのは大学入学後で、高校生のころは「教員ってやりがいのありそうな仕事だな、僕でもなれるのかな」と、夢の 1 つとして考えている程度でした。

そんな私が、この 1 年間で経験した多くのできごとや考えたことを振り返り、少しでも教職に興味がある皆さんのためになればと思い、この文章を寄稿させていただきます。

教員の仕事

皆さんは中学校教員の仕事として何を思い浮かべますか？

おそらく担任や普通の授業、部活の顧問を思い浮かべたのではないのでしょうか。もちろん、それらは正解なのですが、私が教員となってまず感じたことはそれ以外の仕事の多さでした。生徒たちが円滑に学校生活を送れるようにするための細かい仕事がとても多いのです。

私は現在、1 年生の副担任と 1・3 年生合わせて 5 クラスの社会科の授業、卓球部の顧問、それに人権教育主任を任されています。学生の皆さんも、1 年目は副担任と主顧問を任される場合が多いと思います。これらの仕事で最も苦労したことは、教材研究とその他の仕事の両立です。複数の学年の授業を持つと、週に 6、7 コマ分の教材研究が求められます。教材研究を進めながら、授業プリントや小テスト、定期テストを作り、提出物やテストの採点をしなければなりません。

生徒たちは正直です。しっかりと教材研究

と生徒たちの関心が結びつき、授業が成功した時は大きな達成感を得られる一方で、少しでも手を抜くと全く手ごたえがなくなってしまいます。それが教員という仕事のやりがいであり、大変さでもあると感じています。これは部活動や学校行事でも同じです。

教員のやりがい

ここまで読んでくれた皆さんは、「やっぱり教員って大変なんだ…」と感じていることと思います。もちろん楽な仕事ではないのですが、その大変さを上回るやりがいを感じられることが教員の魅力だと私は思います。

思春期の生徒たちと接するなかで、全く同じ 1 日はありません。さまざまなトラブルや事件を乗り越えながら成長する生徒たちとともに生活できることは、何にも代えがたい経験であり、やりがいであると感じています。行事や部活動では、生徒に見通しや練習メニューを考えさせることで、生徒の主体性を高めながら教員の負担を減らすことができるなど、創意工夫で生徒の取り組み方が大きく変わることも教員の魅力であると感じています。

初めて経験するスポーツの顧問となったり、思い入れのない地域での勤務になったり、膨大な仕事に追われたりすることがあると思います。それでも生徒たちとともに成長できる教員を目指す決めた皆さんを応援しています。

おわりに

学生である皆さんは、社会人に比べて自由な時間が多くあります。まだ教員一本でいくと決めていない方も、今しかできない経験をたくさん積ん

てください。最近はコロナによって旅行や外出が制限されていますが、コロナ禍だからこそ経験できることも大いにあると思います。オンライン旅行や ZOOM 飲み会、近所の散策など、何でも 1 回はチャレンジしてみてください。(ちなみに私は大型自動車免許を取得しました。) そのような経験が将来、人間の厚みとして生徒たちの好奇心をかき立てる授業に生きてくると思います。

コロナによって GIGA スクール構想が前倒しで進み、勤務校でも全校生徒にタブレット端末が配

布されました。今後教員になられる皆さんは、ICT 機器を用いた教育の即戦力として期待されています。ぜひ「1 度はチャレンジ」の精神で学生生活を過ごしてください。

まとまりのない文章で読みづらかったかと思いますが、最後までお付き合いいただきありがとうございました。また、この機会をくださった滝沢先生をはじめとした大正大学の諸先生方、職員方への感謝をもっておわりとさせていただきます。

8. 大正大学教職支援センター 関係資料

(1) 大正大学教職支援センター規程

(趣旨)

第1条 この規程は、TSRマネジメント推進機構規程第4条に定める教職支援センター(以下「センター」という。)について、必要な事項を定める。

(目的)

第2条 センターは、本学学則第40条第1項に規定する教職に関する科目を円滑に教授・運営を行い、教職課程登録者の支援と教員養成教育の整備・充実及び優秀な教員の輩出に努めることを目的とする。

(所管業務)

第3条 センターの所管業務は、次のとおりとする。

(1) 教職課程(教科及び教職に関する科目)の編成と運営、履修指導(科目等履修生を含む)及び教員免許状の授与に関する事項

(2) 教職課程に関する調査・研究に関する事項

(3) 教職課程の自己点検評価に関する事項

(4) 教育委員会等関係諸機関との連携に関する事項

(5) 実習指導及び運営に関する事項

(6) 学校インターンシップ等に関する事項

(7) 教職支援センター年報の発行に関する事項

(8) 隣接校種の教員免許状取得支援に関する事項

(9) 教員採用試験対策等キャリア支援に関する事項

(10) その他目的達成に必要な事項

(運営組織)

第4条 センターに次の職員を置く。

(1) センター長 1名

(2) 副センター長 1名

(3) 学長が指名する本学役職者 若干名

(4) 教科及び教職に関する科目の専任担当者

2 センター長は、センターの業務を統括する。

3 センター長は、本学専任教職員のうちから学長が任命する。

4 副センター長は、センター長の職務を補佐する。

5 副センター長は、本学専任教職員のうちからセンター長が指名する。

6 第1項第1号から第4号の職員の任期は2年とし、再任は妨げない。ただし、任命されたときの学長のもとでの再任は、当該学長の任期内に限るものとする。また、任期中に交代したときの後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(顧問)

第5条 センターに、顧問を置くことができる。

2 顧問は、第3条の各号に定める事項を実施するにあたり、その運営に関する助言を行う。

3 顧問の任免については、別に定める。

(コーディネーター)

第6条 センターに、コーディネーターを置くことができる

2 コーディネーターは、第3条の各号に定める事項を円滑に実施するため、助言を行う。

3 コーディネーターの任免については、別に定める。

(センター会議)

第7条 センターの円滑な運営のため、センター会議を設置する。

2 センター会議は、第4条第1項に規定する職員のうちからセンター長が指名する者及び第5条、

第6条の委員をもって構成する。

3 センター長は、必要に応じて他の教職員を会議に出席させることができる。

4 センター会議の審議事項は、第3条の各号に定める事項とする。

(招集・開催・成立)

第8条 センター会議は、センター長が招集する。

2 センター長に支障があったときは、副センター長が代行する。

3 センター会議は、必要に応じて随時開催する。

4 センター会議は、過半数の委員の出席をもって成立する。

(管掌)

第9条 この規程の事務管掌は、教務部教務課が行う。

(改廃)

第10条 この規程の改廃は、代議員会の議を経て、学長が行う。

附 則

この規程は、平成29年5月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成29年11月1日から施行する。

附 則

- 1 この規程は、令和4年4月1日から施行する。
- 2 従前の「大正大学教職部会細則」は、廃止する。

(2) 令和3年度教職支援センター運営委員一覧

担当総務副学長	神達知純	教育職員	西蔭浩子
コーディネーター	丸山裕幸	教育職員	佐々木倫朗
顧問・教務部長	小林伸二	教育職員	山本 涉
担当学長補佐	星野 壮	教務部長補佐	松根恵美子
センター長	坪井龍太	教務課長	百合本健志
副センター長	行森まさみ	就職課長	富坂健治
教育職員	滝沢和彦	教務課	坂本 圭
教育職員	稲井達也	教務課	小幡 翠
教育職員	山内 洋	教務課	高野空太
教育職員	渡辺麻里子	教育人間学科	森恵美子
教育職員	村上興匡	教育人間学科	根本美々

※4月1日～10月30日まで滝沢和彦センター長、佐々木倫朗副センター長

※11月1日～より上記体制

※令和4年度より教職部会と統合

(3) 令和3年度教職課程履修者

	仏教	教育人間	人間科学	臨床心理	人文	日本文学	歴史	表現文化	合計
4年	5	21	0	0	0	10	25	2	63
3年	10	29	0	0	2	10	23	0	74
2年	3	0			5	16	36	0	60
1年	5	0			7	16	36		64

(4) 令和2年度教員採用状況

No	学 科	勤 務 先	教 科 等	校 種 別	職 種
1	教育人間	品川区立中延小		小学校	教諭
2	教育人間	羽生市立川俣小学校		小学校	常勤講師
3	教育人間	川島町立中山小学校		小学校	常勤講師
4	日本文学	北区立明桜中学校	国語	公立中学校	教諭
5	日本文学	都立中野工業高校	国語	公立高校	教諭
6	日本文学	青森高校	国語	公立高校	非常勤講師
7	日本文学	都立水元小合学園		特別支援学校	非常勤講師
8	歴史	匝瑳市立八日市場第二中学校	社会	公立中学校	教諭
9	歴史	千葉商科大学付属高校	地歴	私立高校	非常勤講師
10	歴史	武蔵野東高等専修学校	国語	高等専修学校	教諭

9、2021年度教職支援センター日誌

教職支援センターの主な行事、大学行事及び支援センター所属教職員が関わった学外行事、学会、研究会等を紹介します。

3月

- ・ 8日 港区立南山小学校学校運営協議会
- ・ 9日 教材模試フォローアップ講座
- ・ 11日 都立桜修館中等教育学校論文審査会
- ・ 13日 全国私立大学教職課程協会（全私教協）
常任理事会
- ・ 15日 学位授与式
- ・ 16日 教採模試フォローアップ講座
- ・ 20日 全私教協第4回理事会・質保証特別委員会
- ・ 24日 新年度第1回代議員会・教授会
- ・ 31日 教職部会、『教職支援センター年報』創刊
第4号刊行

4月

- ・ 8日 入学式、全私教協事務局会議
- ・ 9日 在校生ガイダンス
- ・ 10日 在校生就職ガイダンス
- ・ 15日 春学期授業開始
- ・ 17日 全私教協質保証特別委員会
- ・ 26日 休校日（～5月11日）
- ・ 30日 学校図書館出版賞選考委員会

5月

- ・ 14日 都立赤羽北桜高校「総合的な探究の時間」
講演会
- ・ 16日 関東地区私立大学教職課程研究連絡協議会（関私教協会）・東京地区教職課程連絡協議会（東教協）定期総会・合同研究大会
- ・ 18日 全私教協常任理事会
- ・ 21日 巣鴨北中学校・滝野川紅葉中学校訪問、
全私教協第5回理事会
- ・ 22日 全私教協社員総会・第40回研究大会・第
1回理事会、介護等体験ガイダンス（社会福祉
施設）
- ・ 24日 日本国語教育学会全国大会運営委員会
- ・ 26日 代議員会

- ・ 27日 滝野川紅葉中学校訪問、教職部会
- ・ 29日 介護等体験ガイダンス（特別支援学校）、
関東教育学会理事会

6月

- ・ 4日 全私教協事務局会議
- ・ 7日 全私教協『教師教育研究』編集会議
- ・ 9日 時事通信社教採ガイダンス
- ・ 10日 全私教協質保証特別委員会・常任理事会
- ・ 12日 関東教育学会第1回編集委員会
- ・ 16日 介護等体験ガイダンス
- ・ 22日 全私教協質保証特別委員会
- ・ 23日 代議員会
- ・ 24日 都立桜修館中等教育学校第1回学校評価
委員会・第1回学校運営連絡協議会
- ・ 25日 全私教協研究交流集会打ち合わせ
- ・ 26日 都内私立大学教職課程事務担当者懇談会
（都私教懇）
- ・ 27日 茨城県教採1次
- ・ 29日 都立飛鳥高校第1回学校評価委員会・学
校運営連絡協議会
- ・ 30日 練馬区立貫井中学校校内研修会講師

7月

- ・ 1日 佛教大学図書館協会総会
- ・ 2日 教職出陣式
- ・ 6日 全私教協事務局会議・質保証特別委員会・
研究委員会
- ・ 7日 教職部会
- ・ 8日 全私教協研究交流集会打ち合わせ、港区立
南山小学校学校運営協議会
- ・ 11日 東京都他教採1次
- ・ 13日 全私教協質保証特別委員会
- ・ 14日 学部教授会
- ・ 17日 関東教育学会理事会
- ・ 18日 関私教協研究部総会・研究部会・研究懇
話会

- ・ 20日 全私教協質保証特別委員会
- ・ 23日 代議員会
- ・ 24日 全私教協第2回理事会、関東教育学会第2回編集委員会
- ・ 27日 全私教協質保証特別委員会
- ・ 28日 TSR マネジメント報告会

8月

- ・ 3日 全私教協質保証特別委員会・常任理事会
- ・ 6日 春学期授業終了
- ・ 8日 全私教協質保証特別委員会
- ・ 17日 全私教協質保証特別委員会
- ・ 19日 都立赤羽北桜高校リーダー研修会講師
- ・ 25日 データサミット、全私教協質保証特別委員会
- ・ 26日 学科ガイダンス
- ・ 28日 北海道高校教育経営研究会研修会講師

9月

- ・ 1日 全私教協質保証特別委員会、教職部会
- ・ 2日 秋学期授業開始、教育実践学会編集委員会
- ・ 5日 日本NIE学会常任理事会
- ・ 7日 全私教協質保証特別委員会
- ・ 10日 文科省説明会
- ・ 11日 関東教育学会紀要編集委員会
- ・ 14日 全私教協質保証特別委員会
- ・ 18日 教育哲学会（～19日）
- ・ 20日 全私教協理事等対象自己点検評価説明会
- ・ 21日 全私教協常任理事会、大正大学附属図書館SDGsリレー講座（趣旨説明）
- ・ 22日 代議員会
- ・ 24日 SDGsリレー講座（環境教育）
- ・ 25日 日本デュイ学会（～26日）、関私教協第1部会（教育実習）
- ・ 28日 全私教協質保証特別委員会
- ・ 29日 9月学位授与式、介護等体験スタートガイダンス、教職部会
- ・ 30日 巣鴨北中学校訪問

10月

- ・ 2日 日本教師教育学会（～3日）
- ・ 5日 全私教協質保証特別委員会
- ・ 7日 港区立南山小学校学校運営協議会
- ・ 8日 巣鴨北中学校訪問、全私教協会員大学対象自己点検評価説明会
- ・ 11日 関私教協第8部会（教員養成制度部会）

- ・ 12日 全私教協研究交流集会準備委員会・質保証特別委員会
- ・ 17日 関私教協第3部会（教職カリキュラム研究部会）
- ・ 20日 全学FDセミナー
- ・ 22日 全私教協質保証特別委員会
- ・ 23日 総合型選抜入試
- ・ 24日 これからの高校国語教育研究会講演
- ・ 26日 全私教協質保証特別委員会
- ・ 27日 代議員会

11月

- ・ 6日 鴨台祭（～7日）
- ・ 7日 関東教育学会理事会
- ・ 9日 全私教協質保証特別委員会
- ・ 11日 全私教協常任理事会
- ・ 12日 全私教協研究交流集会リハーサル
- ・ 13日 全私教協常任理事会
- ・ 14日 日本NIE学会常任理事会
- ・ 15日 教育実践学会理事会
- ・ 16日 全私教協研究交流集会準備委員会
- ・ 18日 教職支援センター運営委員会・教職部会合同会議
- ・ 20日 学校推薦型入試、教育実習I（外部講師）
- ・ 21日 日本NIE学会常任理事会
- ・ 24日 代議員会、全私教協質保証特別委員会
- ・ 25日 都立八王子拓真高校第2回学校運営連絡協議会
- ・ 26日 全私教協研究交流集会前日リハーサル、都立足立西高校第2回学校運営連絡協議会
- ・ 27日 全私教協研究交流集会
- ・ 28日 教育実践学会研究大会

12月

- ・ 1日 教職支援センター運営委員会・教職部会合同会議
- ・ 4日 教育実習報告会
- ・ 5日 日本NIE学会研究大会京都大会・常任理事会
- ・ 11日 関私教協研究懇話会、介護等体験報告会
- ・ 12日 全私教協常任理事会
- ・ 13日 世田谷区立給田小学校第1回学校関係者評価委員会
- ・ 14日 全私教協質保証特別委員会
- ・ 16日 秋学期授業終了
- ・ 17日 就活出発式、巣鴨北中学校訪問、文科省

教職課程事務担当者説明会、冬期休業開始

- ・ 22日 代議員会・教授会
- ・ 23日 仕事納め
- ・ 28日 全私教協質保証特別委員会

1月

- ・ 8日 全私教協研究委員会
- ・ 10日 冬期休業終了、青少年読書感想文全校コンクール中央審査会
- ・ 11日 全私教協質保証特別委員会
- ・ 13日 全私教協事務局会議、北海道高校教育研究会国語部会講演
- ・ 15日 大学入学共通テスト（～16日）
- ・ 19日 教職支援センター運営委員会・教職部会合同会議、代議員会
- ・ 21日 港区立南山小学校学校運営協議会
- ・ 25日 全私教協質保証特別委員会
- ・ 26日 卒業論文口述試問（～28日）

2月

- ・ 1日 一般入試前期（～3日）
- ・ 5日 2022年度教員採用試験（一次試験）対策学習会
- ・ 7日 臨時代議員会
- ・ 12日 2022年度教員採用試験（一次試験）対策学習会
- ・ 15日 全私教協質保証特別委員会
- ・ 17日 都立飛鳥高校第3回学校評価委員会・学校運営連絡協議会
- ・ 19日 2022年度教員採用試験（一次試験）対策学習会、京都教育大学附属高校教育実践研究集会講演
- ・ 22日 全私教協臨時社員総会、共愛学園中学高

等学校国語科校内研修会講師

- ・ 23日 日本図書館情報学会編集委員会
- ・ 24日 教職支援センター運営会議・教職部会合同会議
- ・ 26日 2022年度教員採用試験（一次試験）対策学習会、日本スクールコンプライアンス学会第10回大会
- ・ 28日 教育実践学会紀要編集委員会

3月

- ・ 2日 一般入試後期
- ・ 5日 2022年度教員採用試験（一次試験）対策学習会、関東教育学会紀要編集委員会
- ・ 8日 全私教協常任理事会
- ・ 9日 臨時代議員会
- ・ 11日 関私教協第3部会、都立桜修館中等教育学会論文審査会
- ・ 12日 2022年度教員採用試験（一次試験）対策学習会
- ・ 15日 学位授与式
- ・ 19日 2022年度教員採用試験（一次試験）対策学習会、関東教育学会理事会
- ・ 21日 教育実践学会常任理事会
- ・ 23日 代議員会、教授会
- ・ 24日 教職支援センター運営会議・教職部会合同会議
- ・ 26日 2022年度教員採用試験（一次試験）対策学習会、全私教協第4回理事会
- ・ 27日 日本NIE学会常任理事会
- ・ 31日 『教職支援センター年報』創刊第5号刊行

《編集後記》

『2021年度 大正大学教職支援センター年報 創刊第5号』をお届けする。

本年度版も教員養成政策の動向の整理から始め、4年間の教職課程を終えて4月から教壇に立つ諸君を中心としたレポート、教育実習Ⅰ（事前指導）における佐々木渚先生の特別講義の記録に高野篤子先生、行森まさみ先生、三浦巧也先生の論考、浦部ひとみ先生の現場からの報告、そして教職鴨台会会員のページ等々から構成してみた。ご寄稿下さった全ての皆さんに改めて御礼を申し上げるとともに、読者各位からは忌憚りの無いご批判ご指導をいただくようお願いを申し上げます。

教職支援センターは昨年11月に坪井龍太先生が新センター長に就任され、本年4月からは従来の教職部会と一体化するかたちで新たなスタートを切ることになっている。新センターが本学におけるより良い教職指導を実現するようお願いしてやまない。関係各位からの益々のご支援をお願い申し上げます次第である。

なお、筆者は本年3月をもって大正大学を定年退職することになっている。この年報の編集が本学における最後の仕事となった。これまでご支援ご指導いただいた皆様にこの場をお借りして御礼を申し上げます。ありがとうございました。

(滝沢記)

2021 年度

大正大学

教職支援センター一年報(創刊第 5 号)

令和 4 年 3 月 31 日発行

編集 : 大正大学 教職支援センター